南北朝動乱と伊予の武将

―付 後南朝物語―

悠久の日本歴史の中で
幾度となく栄光と悲劇が繰り返され
他に例を見ない大規模な動乱の中で
生きぬいた
人間群像……

南北朝動乱と伊予の武将

―付、後南朝物語―

別府頼雄

南北朝動乱と伊予の武将／目次

一、大河ドラマ〝太平記〟……9
二、南北朝正閏論問題の経緯……22
三、異形の天皇後醍醐の即位……26
四、後醍醐天皇討幕の執念……32
五、伊予の武将たちの動静……40
六、後醍醐天皇隠岐配流……51
七、足利尊氏幕府に反旗……63
八、新田義貞と伊予の武将……69
九、建武新政の成立と崩壊……83
十、大塔宮護良親王の悲劇……87

十一、足利尊氏と伊予の武将……99
十二、固陋頑迷な北畠親房……115
十三、北畠顕家の活躍と諫奏文……119
十四、南朝と伊予水軍の活躍……128
十五、長慶天皇と伊予の武将……139
十六、南北両朝合一と後南朝……160
十七、後南朝の亡霊熊沢天皇……177
南北朝史略年表……184
表紙……大河ドラマ『太平記』より

はじめに

歌書よりも軍書にかなし芳野山

江戸時代の前期における俳人、各務支考（かがみしこう）が詠んだ名句である。戦いに明け戦いに暮れた六十年間、多くの尊い命を失った南北朝時代の悲しみを単的に巧みに表現し得た句はほかにはない。

この「軍書」とは、いうまでもなく『太平記』のことである。南北朝時代の状況を、よく活写して余すところのない軍記物語である。

ところが史学者久米邦武が、『史学会雑誌』に「太平記は史学に益なし」と発表して以来、南北朝時代の歴史を研究する者から顧られなかった時期があった。いうまでもなく、

我われが今日見ることができる『太平記』は原本ではなく、たびたび転写されたものであるから、中には改竄されたものもあるだろう。

しかし、南北朝時代の歴史を研究しようとするとき『太平記』は史実を全然含んでいないと決めつけることは早計であり誤りである。細心の注意を払いながら他の史料と対照して、より真実なものに迫ろうとする態度で研究すれば価値の高い軍記物語といえるのである。現在では、校註本が出ているので研究が容易になった。

『南北朝動乱と伊予の武将』を書くに当っては、山下宏明校註『新潮日本古典集成』の『太平記』を参考にして、愛媛県史、吉野町史、九度山町史、十津川村史、大塔村史、川上村史、上北山村史および後南朝史論集、村田正志著作集その他多くの著書を対照しながら纒めたものである。特に引用を必要とした場合は、その出典を明記しておいた。

南北朝の動乱は全国の国民を熾烈な戦いに巻き込んで六十年間にもおよんだのであるからたまっものではない。家を焼かれ財物を奪われ命を失うという悲惨さは想像しただけでも恐ろしいことである。

戦前の教育では、南北朝時代の動乱を美化して国民の目を欺いてきた。そのために無理に合理化しようとして各所に矛盾を残している。それらを挙げてみると、

一、明治政府（桂首相当時）は国粋主義者の圧力に屈して、歴史的事実を曲げて「南朝を正統とする」ことを決定し、明治天皇を正統でない皇胤の天皇ということにした。

二、光明天皇に授けた神器を偽物であるという後醍醐天皇の宣言を認めたため、動乱のさ中逃亡を繰り返したとき偽物を作ることができるか否かの疑問と天皇の性格の異常を認めたことになった。

三、接角かち取った「建武の新政」も僅か二年余りで崩壊し、天皇親政が現実に即さない貧困なものであったことを暴露したにも拘らず『建武の中興』と美化して、国民を欺いてきた。

四、足利尊氏のもとに全国の人心が収攬され武家政治が再開され平和への基礎ができたのに逆賊の汚名を着せるという問題を残した。

これらは問題点の一部であるが、要は権力の座にある者が自己の欲望を満足させるため

に武力を行使して、罪の無い庶民を巻きぞえにして生産物を略奪し尊い命を失わしめるようなことがあってよいものであろうか。先に我が国が起こした大戦に、国民の命を鴻毛の軽きに比して奪い取ったことと合わせ考えながら本書を書いたのである。ご批判ご指導を乞う次第である。

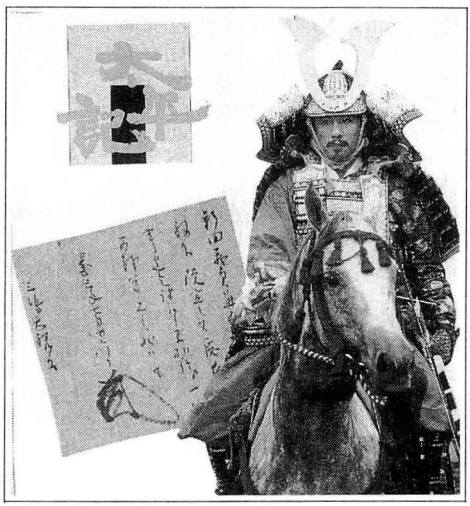
平成三年『重信史談』に「南北朝動乱と郷土の武士たち」を発表したものは、紙数の制限があったので不十分であったため、更に増補改訂を加えたものである。

平成七年一月

一、大河ドラマ〝太平記〟

悠久の日本歴史の中で幾度となく栄光と悲劇が繰り返され、他に例を見ない大規模な動乱が長期にわたって続いたのは、南北朝時代がその最たるものであろう。

その南北朝時代を、「戦後でなければ書くことはできなかった」という吉川英治の『私本太平記』を原作に、NHKが大河ドラマとして〝太平記〟を



NHK大河ドラマ〝太平記〟

太平記絵巻

放映することを決定した。

チーフプロデューサー高橋康夫は、「今まで誰も手をつけなかった日本歴史のタブーに、初めて挑戦する」と覚悟を述べている。たしかに、日本の放映史上では画期的な企画といっても過言ではあるまい。

『太平記』の世界は華やかな宮廷人と剛毅な武士と強(しぶと)かな庶民が入り乱れて、互いに命運を賭けて戦うところの壮大な歴史絵巻である。シナリオライター池端俊策は、「太平記の世界は我われの巨大な鏡である」と述べているように、今回の大河ドラマはキッと現代人の我われにも共通した世界を映し出してくれるであろう。

演出に当っては、「最新の日本中世史の研究を採

り入れて、戦前の皇国史観による先入観に捉われないように注意を払った」と述べている。キャストについても長い時間をかけて議論したというだけあって、足利尊氏には元アクションスターの真田広之を、後醍醐天皇には梨園のプリンスといわれている片岡孝夫を、楠木正成（まさしげ）には庶民的人気が高い武田鉄矢を配している。その他を見ても深い配慮がうかがえるのである。

既に栃木県足利市と群馬県太田市に二億数千万円という巨費を投じて、『太平記』の舞台となる京都と鎌倉の建物や街並みをオープンセットに再現して撮影を開始しているのである。

戦前の教育では、南朝に味方した者はすべて忠臣の亀鑑であると称賛し、北朝に味方した者は皆逆賊と酷評したが、昭和十一年に直木賞を受賞して以来、本格的な歴史小説を次々と発表して、新しい道を拓いてきた作家海音寺潮五郎は、

南北朝動乱の時代は、日本歴史の中で一番バカバカしい時代であった。今次の戦争もバカバカしい戦争であったが、八年ぐらいで済んだ。それを六十年も続けたのである。

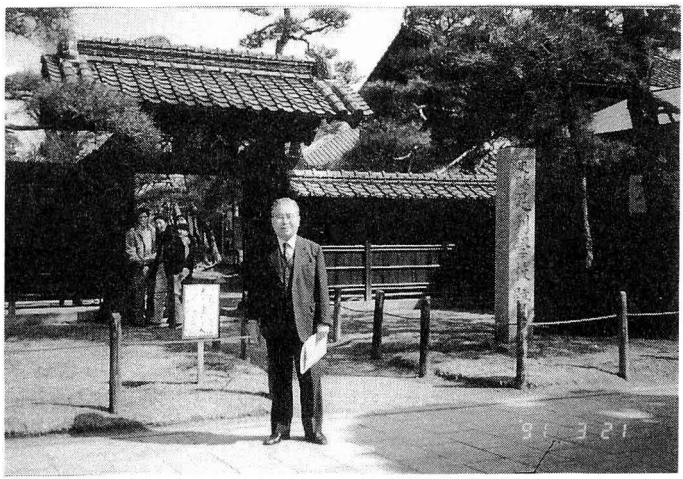
その原因たるや、両統に分かれている皇室が、互いに相手を侮辱し合い虐げ合って国民はそのあおりを食って苦しんだ戦争だから、実にバカバカしい限りである。

と述べている。たしかに、後醍醐天皇が標榜した「天皇親政」「王政復古」「延喜・天暦の治への回帰」という政治理念は、時代錯誤・時代逆行も甚だしい考え方であった。その証拠に、接角勝ち取った『建武の新政』も僅か二年余りで崩壊したではないか。これではなんのために長い戦争をして尊い血を流し、掛け替えのない命を失ったのか、実に意味のない戦争になってしまったのである。権力の座にいる者が、自分の欲望を満足させるために国民の命を鴻毛の軽きにもてあそばれてはたまったものではない。このことを歴史の教訓として肝に銘じておかねばならないのである。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

私はこの稿を書くに先立って足利市と太田市の史蹟探訪を試みた。かつて観光旅行で足利学校を訪れたときは右隣に小学校があった。

ところが、宇都宮市で全国教育大会があったとき、帰りに立ち寄ったときには、小学校



史跡　足利学校跡

は移転して、その跡地は発掘調査が行われているところであった。今回、訪れてみると、昔の方丈や庫裡・書院などがすべて復元されて様子がすっかり変っているのにびっくりした。

管理事務所でたずねると、昭和五十七年に史蹟保存整備事業に着手し、発掘調査を行い、古絵図や古記録を調べたり専門家の指導を受けて、昭和六十三年に建造物の復元を行ったということであった。方丈・庫裡・書院・土塁・庭園の復元に十年の歳月を要したという。現在は歴史上有名であった昔の足利学校のすばらしい全貌を目の当りにすることができて

足利学校　復元された方丈、庫裡

感慨無量なものがあった。

足利学校は「日本最古の綜合大学」といわれているが、その創設については諸説がある。しかし、鎌倉時代の初期、関東の武士が文化に劣っていることに気付いた足利義兼が、一族の学問所として鑁阿寺（ばんなじ）の一角に学校を興したというのが最も有力な説である。

天文年間（一五三二～五四）第七世庠主（しょうしゅ）九華の頃は、全国から学徒が三千人も集って事実上日本最高学府としての面目躍如たるものがあったという。儒学を中心に易学、天文学、兵学、医学など、実用主義的な学問が重視されていたのである。室町時代の名医田代三善、

豊臣秀吉や徳川家康に重用された曲直瀬道三、上野寛永寺の開基天海僧上らは、みなこの足利学校の学徒だったのである。

室町・戦国時代の足利学校のことを、フランシスコ・ザビエルが、「日本国の中で最も大にして有名な坂東の大学」というようにヨーロッパに紹介したので、日本の中世における学問の一大中心地として一躍有名になったのである。

旧蹟内にある市立足利学校遺蹟図書館には足利学校の本が一万二千冊あり『文選』（二十一冊）など、七十七冊の宋刊本があって、国宝に指定されている。これほど貴重な本が戦国時代を無事に乗り越えて、よく残ったものだと感激したものである。

足利学校と道路ひとつ隔てた北西の位置に鑁阿寺がある。ここは八幡太郎義家の曽孫足利義兼がつくった館跡である。義兼は頼朝に協力して、鎌倉幕府の創立に貢献し、のち出家して鑁阿上人と称し、建久七年（一一九六）に館を寺にしたのである。館跡は四辺形をしており、周囲に土塁と堀をめぐらし、四方に門を設けており、約四万平方メートルの広さをもっている。

足利氏の氏寺である鑁阿寺（足利市）

鎌倉時代中期に建てた本堂と鐘楼はともに国の重文になっており、他の多くの堂塔・門はみな県指定の文化財に指定されている。また、鑁阿寺文書百二十二通は重文であり、足利尊氏・義満が寄進したという貴重な青磁類を多数所蔵しているのである。

足利学校と鑁阿寺で多くの時間を費やしたので、タクシーを走らせて郊外にある大河ドラマ〝太平記〟のオープンセットの見学に残り時間をあてることにした。到着してみると大型観光バスが次から次へと出入りするという盛況ぶりであった。

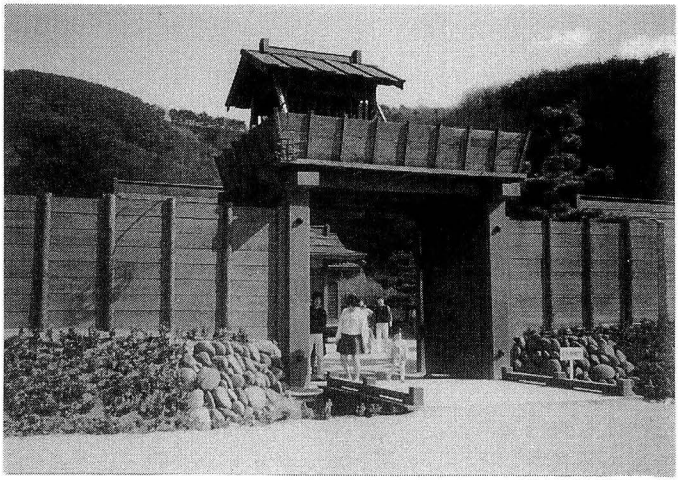
撮影が行われていないときは建物の見学が

“太平記” オープンセット見学（足利市）

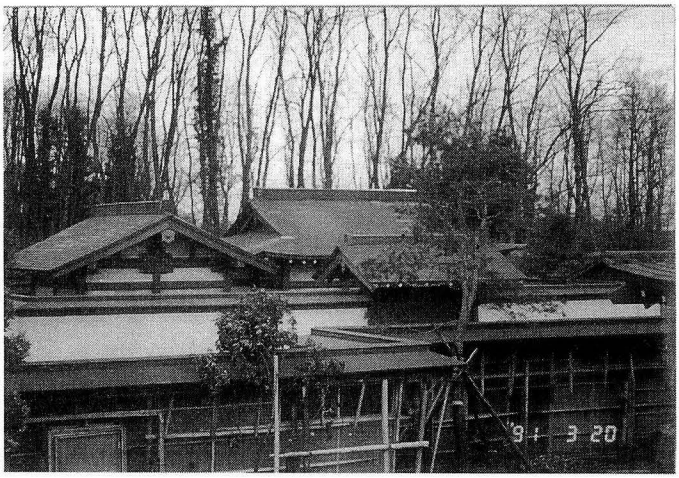
許されているので、自由にあちこちを見て回った。ベニヤ板を上手に使い、色彩の工夫によってライトをうまく当てるとすばらしい建物に映るようである。建築物の裏側や必要でない場所は柱だけであったり、支柱が丸見えのところもあってなかなかおもしろいものである。

☆　☆　☆　☆

翌日はホテルを出て太田市に直行した。この街は十七世紀の初め大光院の門前町としてつくられたところであるが、正保三年（一六四六）に日光例幣使街道が定められてから宿場町として発展したといわれている。「太田



大河ドラマ〝太平記〟オープンセット



大河ドラマ太平記のセット（裏側へ廻れば）

国の史蹟「金山城跡」

の呑竜（どんりゅう）さま」の名で親しまれている大光院は正式には「義重山新田寺大光院」といって浄土宗の寺である。

徳川家康が慶長八年（一六一三）に新田義重の菩提を弔うために、呑竜上人を開山として建立したもので、寺領三百石が与えられ、幕府から寺社奉行の直轄という特別の保護を受けていた寺である。

参詣を終えると、国の史蹟となっている金山城跡に登った。自然の要害をうまく利用して築城したところで、飲料水にも恵まれた中世の山城で、関東の七名城の一つに数えられているものである。

文明元年（一四六九）、新田氏の一族岩松家純（いえずみ）が築城したものであるが、天正十八年（一五九〇）に廃城となった。本丸跡は金山連峰中の主峰、実城（みじょう）山上に新田神社外三社が祀られているところである。そのほかに、二の丸、三の丸、馬場、日の池、月の池、矢倉台、城門跡、石垣などがよく保存されている。

細谷駅の西北、別所には茶臼山古墳があって県指定の史蹟になっている。これに隣接して真言宗の円福寺があり、御宝山金剛院と称して新田義重の四世の孫、政義が開基した寺である。古くは大坊、大日坊、阿弥陀坊、極楽坊その他合わせて十二坊をもっていた大寺であったというが、今は荒廃しており昔を偲ぶ面影はない。境内に新田氏累代ものと伝えられる石層塔、五輪塔など十数基がある。その中の一基に元享四年（一三二四）の刻銘があった。これらはみな県指定の史蹟になっている。

円福寺の参道を少し東へ行くと、新田義貞の誕生地と伝えられている台源氏館跡がある。別所の北に隣接する脇屋は、新田義貞の弟脇屋義助の所領で東南部の低い台地に義助の館跡を示す一基の碑が淋しく建っているばかりであった。

大河ドラマ〝太平記〟撮影風景

ここで時間をかけ過ぎたので、運転手をせかせて生品神社を目指して走った。『上野国神明帳』に載っている新田郡筆頭の古社である。元弘三年（一三三三）五月八日、甲冑姿の武者百五十騎が、この社頭に集結して、新田義貞を中心に、大中黒の旌旗を翻えして、鎧の袖を鳴らしながら出陣したところである。

大河ドラマ〝太平記〟の放映が決まってからは、足利市、太田市は『太平記』一色である。スイッチを入れると、新田義貞活躍の場面がビデオで放映される仕組みになっている施設がつくられていた。観光客の

ために一役をかっているのである。

私は、生品神社の参拝を終えてから太田市の効外にある大河ドラマのオープンセットの見学の場に向かうことにした。

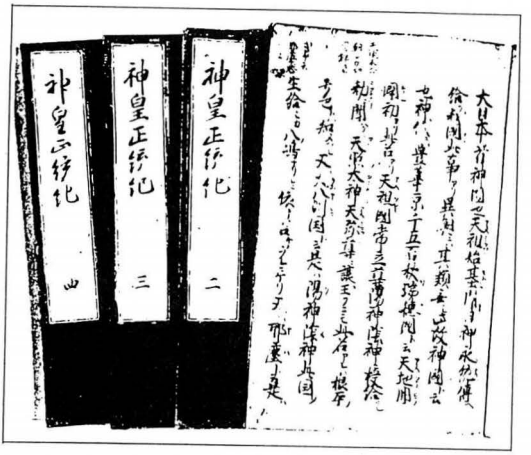
二、南北朝正閏論問題の経緯

日本の南北朝時代の歴史を研究しようとする者は、明治時代に起きた南北朝正閏論問題の経緯を知っておくことが肝要である。これを避けて通っては真実の日本の歴史を知ることは不可能であろう。

戦前における日本の歴史教育は、いわゆる皇国史観と呼ばれたものであって、タブーとされているところが多く、真実の歴史を論じることは許されなかったのである。

南北朝正閏論というのは、十四世紀における南朝と北朝のどちらの皇統が正しいかとい

う論争であって、南朝の公卿北畠親房が『神皇正統記』を著わして、南朝の正統性を論証しようとしたことは有名である。これに対して『梅松論』（著者不詳）は北朝の正統性を主張して対立していたのである。



「神皇正統記」（白山本）の巻頭部分
（石川県　白山比咩神社蔵）

ところが、元中九年（一三九二）に、南北両朝が合一し、それ以来南朝の皇統は消滅して、北朝の皇統がずっと続いたので、当然のことながら北朝を正統とし、南朝を偽朝と呼んだので、南朝に味方していた武士たちは朝敵とか逆賊とみなされるのが一般の通念となっていた。

しかし、『太平記』が一般に普及するようになると、南朝に同情する人が多くなり、その忠臣であった楠木正成を尊敬するという風潮が生まれてきた。永禄二年（一五五九）に正成の子

孫と称する大饗正虎（楠長諳）に朝敵赦免の綸旨が下されたのも、その現れである。

江戸時代になると、朱子学が盛んになって歴史事象を倫理的に判断する風潮が強くなり、水戸の『大日本史』や頼山陽の『日本外史』が南朝正統論をとりあげたのである。

明治時代になると、黒板勝美らが南朝正統論を支持したが、吉田東伍らの北朝正統論や久米邦武、三上参次らの南北朝対立論が有勢であった。

ところが、明治三十六年（一九〇三）に国粋主義思想が台頭してくると、それを背景にして国家統制を行うとする気運が高まってきた。その先駆けとなったのが国定教科書制度の創設であった。

明治四十三年（一九一〇）に、『小学日本歴史』が南北両朝に正閏の区別をしない立場をとって編集されていることが俄かに問題にされた。翌年の一月十九日に読売新聞が、前年に起きた幸徳秋水の「大逆事件」とからませて、「南北朝問題―国定教科書の失態」という社説を掲げてセンセーショナルな攻撃を加えたので、ついに政治問題に発展する結果となった。

南北朝正閏論問題は政争の具に利用されることになり、野党の立憲国民党は桂内閣の攻撃材料としたのである。二月二十三日には、この教科書問題は「大逆事件」以上の大事件であるとして政府弾劾の決議案を帝国議会に提出することになった。しかし、このときは与党政友会の多数によって反対否決された。

しかし、国粋主義団体を中心とする人々は現教科書排斥運動を活発に展開したのである。教科書の執筆者喜田貞吉のもとへは強迫状を送り続けるという状態が続いた。彼は小松原文相の圧力にも屈することなく、学問的良心を守り、歴史的事実に忠実であろうと努力したのである。

しかし、桂内閣は焦慮の末、二月十七日、文官分限令第十一条を適用して、喜田貞吉を休職にし教科書図書調査委員を諭旨免職にした。桂首相は元老山縣有朋と相談して、閣議で南朝正統論を採用することを決定し、二月二十八日、明治天皇に上奏して枢密院の諮詢を経た上で「南朝を正統とする」という裁可を得たのである。

そこで、文部省は、北朝系の光厳・光明・崇光・後光厳・後円融の五代にわたる天皇を

『皇統譜』から削除し、北朝の年号を抹消するという処置をとり、南北朝という呼称を廃し、吉野朝と改めさせたのである。そのため、明治天皇は正統でない皇統の天皇という矛盾した結果となったのである。

このことがあってからは、田中義成博士が良心的歴史学を堅く守って『南北朝時代史』を著わして、その称号を用いたほかは、南北朝時代を吉野朝時代と称するようになった。

このことは、学問・研究の自由が政治の圧力によって歪められるという結果をきたし、以後日本の史学の発展は今次の敗戦に至るまで阻害されたのである。

三、異形の天皇後醍醐の即位

文保二年（一三一八）三月、花園天皇より九歳も年長の皇太子尊治親王が三十一歳で即位したが、当時としては遅過ぎた年齢の即位で異例のことであった。それには複雑な事情

がからんでいたからである。

即ち、尊治親王の生母忠子は中級の公卿五辻忠継の女であって、十八歳のとき後宇多天皇の目にとまり、入内して皇子皇女を生んだ。その長子が即ち尊治親王である。

ところが、忠子は後宇多天皇を裏切って天皇の父である亀山上皇のもとへ走って寵愛を受けることを敢えて行ったのである。それは当時宮廷内において最大の実力者であった亀山上皇の力にすがって、自分の子尊治親王を早く皇太子にして次の天皇にさせようとする思惑があったからである。

案の定、このことは現実のものとなった。忠子は亀山上皇の御沙汰によって従三位に叙せられ、准三后を贈られた。その翌年には皇子尊治に親王の宣下があり、姉奘子も内親王になったのである。

しかし、後宇多天皇は父亀山上皇の乱業を憎んでいたし、上皇のもとへ走った忠子の不貞に対してひどく腹を立てていたので尊治親王が皇位につく見込みはほとんどない状況になっていた。

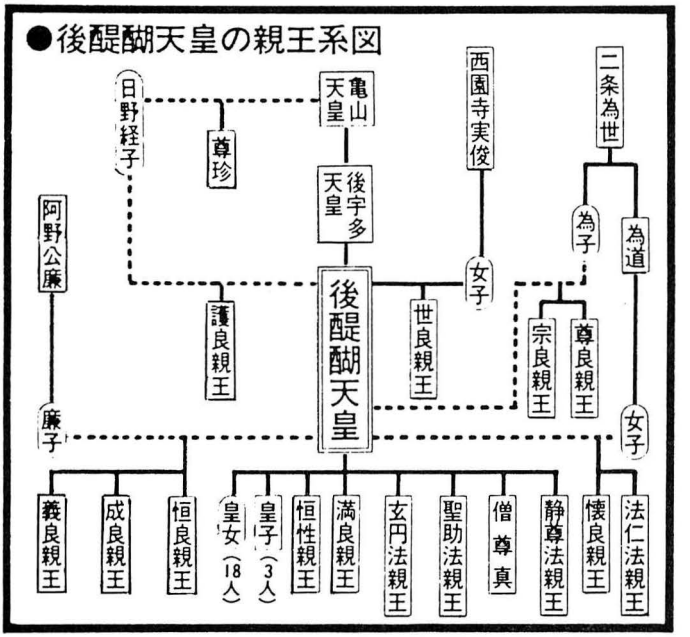
ところが、異母兄である後二条天皇が若くして崩御されたので、尊治親王には好運が舞い込んできたのである。それは一代限りのリリーフ役という条件つきではあったが、忠子の念願通りに尊治親王は天皇の位につくことができたのである。作家緒形隆司は、

位の低い家柄の母より生まれ、十五歳まで親王の宣下が得られず、母の不貞によって亀山上皇のうしろだてを得て、ようやく皇太子となったが上皇の晩年に御子が生まれたので、尊治親王の即位の望みは夢と消えていたのである。ところが、好運が舞い込んできたわけである。

と述べている。

その後醍醐天皇は優れた素質をもっており学問をよくした。また、強烈な個性の持主であり多情でもあった。多感な青年時代の不遇に対する憤懣のはけ口を女性に求めたのであろうか、たびたびスキャンダルを起こしている。後醍醐天皇の英邁さについて『太平記』は、

四海風を望んで悦び、万民徳に帰して楽しむ。誠に天に受けたる聖王、地に奉ぜざる



ざる明君なり。

と絶賛を送っているのである。

しかし、後醍醐天皇の女性遍歴の習性は天皇に即位後といえども止むことはなかった。皇室系図の中で最も信憑性が高いといわれている『本朝皇胤紹運録』を見ると、十八人の女性に三十六人の皇子皇女を生ませている。

その中で、護良・尊良・世良・宗良・恵尊・恒良・成良・懐良・満良の皇子たちは、後に戦場に送り出されて波乱に富んだ生涯を送

ることになる。後醍醐天皇の皇子に生まれたばかりに、政争の道具に使われるという運命に翻弄されるのである。尊治親王は即位後、ただちに自ら後醍醐天皇と称するなど、古今に例のない異常な神経の持主であった。

神奈川県藤沢市の清浄光寺（俗称＝遊行寺）が所蔵している後醍醐天皇の肖像画は、密

後醍醐天皇画像（清浄光寺蔵）真言密教に帰依

教の法服姿で、黄櫨染の直衣に冠をつけた上に中国皇帝や古代天皇がかぶる礼冠を重ねてかぶっており、弘法大師が唐から持ち帰ったといわれる七条袈裟を重ね着し、大日如来の分身である金剛薩埵そっくりの密具を両手に持っている。これは他の天皇には見られなかった異形の姿である。

この後醍醐天皇の肖像画について、神戸大学の蓮沼啓介教授は、

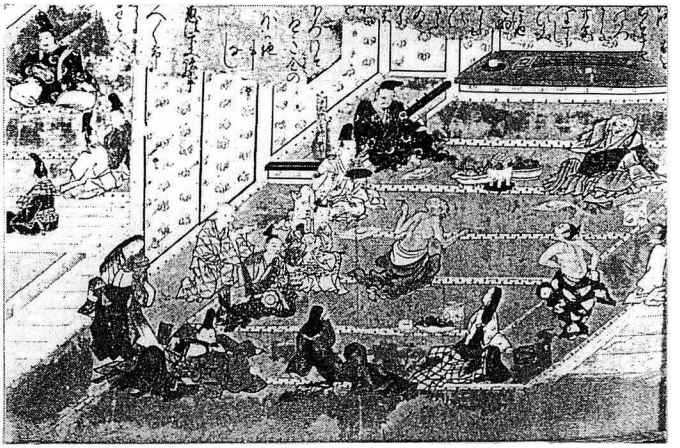
この絵の後醍醐は天皇にして天子であり、同時に太陽仏の化身としての密教の教主であることは明白である。しかも、この肖像画に添えられていた三通の文書によれば、この絵は元徳二年（一三三〇）十月二十六日に金剛薩埵の心を得させる瑜祇灌頂を後醍醐に授けた時の姿を、その死後に文観が自ら描いたものである。つまり、後醍醐は笠置山決起の前年に天皇でありながら実は密教の教主にもなっていたのである。

と述べている。このように、後醍醐天皇は実に徹底した異形振りを発揮していたようである。

四、後醍醐天皇討幕の執念

後醍醐天皇が即位してから三年目に、後宇多上皇は院政を廃止して、国事のすべてを天皇の親政に委ねることとした。このことは、かねてより後醍醐天皇が望んでいたことであったから大喜びで、「延喜・天暦の治への回帰」という政治体制に向けて意欲を燃やした。

早速人材の登用に意を注いだ。ブレーンに東寺の文観、金剛寺の禅恵、法勝寺の円観、東大寺の聖尋、観心寺の聖論をはじめ、大納言吉田定房、北畠親房、中納言万里小路宣房、日野資朝、日野俊基、花山院師賢、四条隆資、洞院実世、源具行らを近待させた。そうして「無礼講」あるいは「文談会」と称する集会を開催して、幕府の目を欺きながら討幕の計画を練っていた。なお、文観を介して師檀関係にあった六波羅の評定衆・引付頭人伊賀兼光をだきこみ、六波羅の動向を探索させていたのである。



無礼講　美女を交えての狂宴にまぎれて、後醍醐天皇による倒幕の密議が練られていた（「太平記絵巻」埼玉県立博物館蔵）

正中元年（一三二四）九月二十三日、北野天満宮の祭礼の当日に、六波羅を攻撃と決定した。この日は、祭礼の警備に六波羅の武士が出動するので、六波羅の兵力は手薄になるときをねらったのである。

ところが、この計画は事前に漏れていた。六波羅探題の常盤範貞は、悪党追捕という名目で兵三千を率いて、天皇方の一味である多治見国長、土岐頼兼の宿所を一斉に攻撃して討幕計画を粉砕したのである。

この計画が露見したのは、『太平記』によると「同志の一人土岐頼員が新妻に寝物語りに話したことが原因である」とせられていた

のであるが、最近、東京大学の佐藤和彦教授が『花園天皇宸記』を研究した結果、「祐雅法師が無礼講に参加している者の名簿を六波羅探題に送りつけていた」ことを発表している。

また、一説には六波羅探題からも「無礼講」や「文談会」にスパイを潜入させていたともいわれている。

「当今御謀反（とうぎんごむほん）」を伝える早馬が鎌倉幕府の結城宗広のもとに到着したのは、皮肉にも九月二十三日で北野天満宮祭礼の当日であった。「当今御謀反」ということは、天皇が幕府に謀反をしたということであるから幕府は天皇より上の位に在るという意識が国民の中には定着していたようである。

さすがに、後醍醐天皇も今回の計画が露見したことには大へん慌てたようである。早速、万里小路宣房を勅使として鎌倉に派遣し、異例の告文（弁明書）を送って、「天皇は討幕計画には全く無関係である。関係しているという噂があるので頗る迷惑をしている」と弁明させたのである。このことについて史学者は、

討幕計画の張本人である後醍醐天皇の言葉としては、その精神構造や行動理念を解析する上において極めて重要な鍵となる発言である。

と指摘しているのである。

幕府は日野資朝を討幕計画の主犯として佐渡に流罪にして、天皇の責任は問わないことにした。これを正中の変という。

それから二年後、嘉暦元年（一三二六）に皇太子邦良親王が病没された。後醍醐天皇は自分の皇子尊良親王を皇太子にしようとして幕府にはたらきかけたが、幕府は先に定めている「文保の御和談」の主旨の通りとし、持明院統の量仁（かずひと）親王を皇太子とした。

これによって、後醍醐天皇の在位期間はあと一カ年であるということが確定的となったのである。これ以上後醍醐天皇が在位を続けようとすれば、それに反対する幕府を倒すよりほかに方策はないから討幕を焦るようになっていくのである。

しかし、側近の者たちは時期尚早を理由に反対していたのである。天皇に最も信頼を受

けていた大納言定房でさえも、

頃年天下の躰百分にして九十は武家の有なり。戦士の勇、山東の民一は千に当る。あに、皇畿近習の嬰児を以って東関蛮夷の勇健に対せんや。此事不可また言いがたし。関東天下兵馬元帥の権、現に七、八代定めて日月盈蝕の期あらんか。兵事を用いず。暫らく時運を俟つ。これ大義のみ。

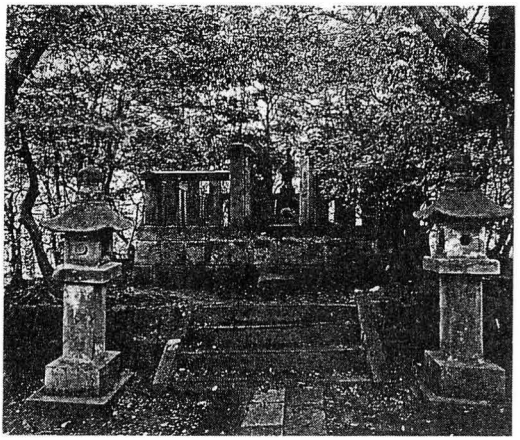
と、天皇に諫書を奉呈したのである。定房にしては、よくよく考えに考えた末のことであったが、天皇は定房の真意を読みとる度量を持たず、耳をかすことなく、天皇の逆鱗に触れて蟄居を命じられたのである。

元弘元年（一三三一）四月二十九日、定房は、ついに天皇の討幕計画を六波羅に密告した。六波羅から知らせを受けた鎌倉幕府は長崎高貞、南条高直らを上洛させて、文観、忠円らを捕え鎌倉に護送し拷問にかけて、すべてを白状させたのである。

その結果、文観を硫黄島に、忠円を越後へ流罪にし、円観は結城宗弘に預けて白河へ移

し、日野俊基は武蔵国葛で処刑した。

さらに、幕府は後醍醐天皇の討幕計画を徹底的に粉砕するため三千の兵を京都に指し向けた。朝廷では事態の重大性に驚き、護良親王の意見を入れて、花山院師賢を天皇の替玉として比叡山に向かわせたのである。



日野俊基の墓（鎌倉市梶原葛原が岡）

幕府軍がこれを追っている間に、天皇は変装して笠置に潜幸し、近郊の土豪や野伏に参陣を呼びかけた。『太平記』に、

河内ノ国金剛山ノ西ニコソ楠多門兵衛正成トテ弓矢ヲトッテ名ヲ得タル者ハ候ヘレ。

とあるのは、河内国南河内郡赤坂村水分（みずくきり）の住人楠木正成が参陣して後醍醐天皇に拝謁したことを述べているのである。

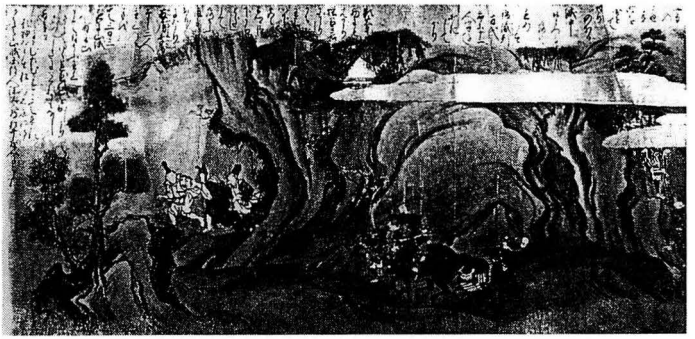
後醍醐天皇が笠置山に潜幸したことを知った鎌倉幕府は、大仏貞直（おおさらぎ）、塩田時見、遠江治（とわとおみ）時、足利高氏を大将軍に、長崎高貞を侍大将に任じて、総勢二十万八千余騎の大軍を繰り出して攻撃したので、笠置は旬日を経ずして陥落したのである。

「機略の天才」、「智謀の将」といわれた楠木正成は赤坂城において奇抜な合戦を展開して何十倍もの敵軍を悩まし続けていた。史料として信憑性の高い『楠木合戦注文』に詳しく述べてある。

『天竜寺文書』に「和泉国若松荘に悪党楠木兵衛尉が押し入って乱暴した」という記録があるが、この悪党というのが楠木正成のことであるといわれている。この「悪党」というのは悪人という意味ではなく「強い」というニアンスがまさっているのである。

赤坂城は四町四方にも足らない小城である。幕府軍は一万の大軍で包囲したのであったが奇抜な戦法で手こずらされた。

しかし、奇抜な戦法とか奇襲作戦というものは、今も昔も変わりなく、一時的に成功し



後醍醐天皇笠置脱出

笠置山をさまよう後醍醐天皇　六波羅軍により攻めおとされた笠置山城をあとにして、天皇は笠置山中を三日三晩さまよいつづけた。藤房・季房の他は天皇の手を引くものもなく、昼は道傍の塚の陰に隠れ、夜は野原の露を踏みわけ、食料もなく逃亡生活をしたすえ、結局捕えられた。後日、そのありさまを聞いた花園上皇は「王家の恥、何事かこれに如んや」と慨嘆したといわれる。（「太平記絵巻」埼玉県立博物館蔵）

ても決定的な勝利を得ることはできないのである。笠置も赤坂も千早も、次々と大軍の正攻法の前に陥落していったのである。

笠置が陥落の危機に瀕したとき、後醍醐天皇は楠木正成の赤坂城に移ろうとして、万里小路藤房、千種忠顕らと笠置を脱出して、山に臥すこと三日、路に迷っているところを山城国の住人深栖三郎に捕えられ、六波羅に送られた。これを元弘の変という。

後醍醐天皇は関東申次の西園寺公宗（きんむね）を呼んで、「今度のことは天魔の所為であるから許してもらいたいと、幕府に伝えてほしい」と哀願したというが、後醍醐天皇は最後のどた

ん場になるといつも情ない態度を呈するようである。

このことについて謙虚で篤実な花園天皇は、『花園天皇宸記』の中で、

王家の恥、何事かこれに如かんや、天下の静謐もっとも悦ぶべしといえども、一朝の恥辱また歎かざるべからず、

と批判しているのである。後醍醐天皇の奇怪な言葉や態度は常人とは思われないようなところがあるので驚かされるのである。

五、伊予の武将たちの動静

正中の変で異例の告文を幕府に送って討幕計画者としての難をのがれた後醍醐天皇は、幕府が「文保の御和談」を楯にとって持明院統の量仁親王を皇太子にしたことに失望を感じ、討幕の決行をあせった。側近の反対や大納言定房の諫奏にも耳をかさず、ついに幕府

に密告せられるに至った。

幕府は正中の変における後醍醐天皇に対する穏便な処置を後悔し、今回は徹底的に討幕計画を粉砕しようと、京都に向けて大軍を繰り出すと共に、全国の御家人に対して出動を命じた。

このとき、いち早く幕府の命に応じて参加した伊予の武将は、風早郡高縄山城の河野通盛、伊予郡砥部庄の大森彦七、越智郡府中城の伊予国守護宇都宮貞宗、周桑郡赤滝城の大森長治、喜多郡根来城の宇都宮貞泰らであった。

『参考太平記』によると、河野通盛は元弘二年に幕府の命を受けて京都の六波羅探題の援助に参加している。即ち、播磨国の赤松則村が宮方軍に属して六波羅の攻撃に向かったので、六波羅を援けるべく河野通盛は一族を率いて摂津国尼が崎に上陸して京都に向かったのである。

通盛は陶山義尚と緊密な連絡をとりつゝ華々しい手柄を立てたので、光厳天皇から御剣を賜り対島守に任じられるという栄誉に浴している。しかし、嫡子通遠を戦死させたので

ある。

赤松重時は風早郡恵良城と立烏帽子城に拠って周桑郡の蜂が森・赤滝両城と気脈を通じて宮方軍を牽制(けんせい)した。

いっぽう、後醍醐天皇に味方した伊予の武将は、久米郡石井郷土居を本拠とする土居通増、周桑郡得能庄の常石城の得能通綱をはじめ風早郡忽那島の領主忽那重義・重清父子と重清の弟義範、伊予郡八倉山重見荘に居を構えていた重見通宗、越智郡大三島の大山祇神社の祠官祝安親らであった。

後醍醐天皇は笠置山が危険になったので、楠木正成が楯籠っている赤坂城に移ろうとしたが路に迷い有王山のところで幕府の手に捕えられた。

幕府は皇太子量仁親王を擁立して光厳天皇とし、承久の変の例にならって後醍醐天皇を隠岐島に配流とした。

やがて、護良(もりよし)親王は十津川で兵を挙げ、ついで吉野に入って河内・和泉の幕府軍を掃討した。

巻子本に表装された忽那文書の「後醍醐天皇の綸旨」
村田正志博士によって
「国宝級の史料」と折紙がつけられた

忽那義清は一族を率いて喜多郡に出陣し、宇都宮貞泰を根来山に攻撃した。宇都宮氏は下野国の豪族であったが、豊房が元徳二年（一三三〇）に伊予国守護に任ぜられ、翌年十月地蔵が嶽城（今の大洲市）を築いてこれに拠っていた。根来山の貞泰と豊房との関係は明らかでないが、伊予の幕府方の有力者であったことは間違いないようである。

忽那氏の挙兵については、従来護良親王の令旨（りょうじ）（元弘三年四月一日付）によるものとされてきたが、最近の研究では、既にそれ以前に土居・得能氏らと連合し

て討幕の軍に参加していたということが明らかになった。

忽那重清は根来城を攻撃したあと、越智郡府中城の宇都宮貞宗を攻撃して制圧した。そこで、長門探題の北条時直は伊予における反幕府の軍を撃滅しようと、防長の精兵を率いて攻撃してきたが、宮方軍は越智郡の石井浜でこれを撃退させた。

村上義弘公碑

『残太平記』および『三備史略』によると長門探題の北条時直は、反幕府軍を封じるために海路京都へ上ろうとしたが、備後の鞆津で村上義弘の瀬戸内水軍のために行く手をさえぎられたので、やむなく鉾を転じて伊予の石井浜に上陸したというのである。私はこれ

まで長門探題が中予地方に宮方の主力があるのに、なぜ越智郡の石井浜に上陸したのであろうかと疑問に思っていたのであるが、『残太平記』や『三備史略』によって、その謎が解けたのである。

この石井浜における戦いに失配した北条時直は復讐の念を燃やして、準備を整え再び伊予の反幕府の宮方軍を壊滅させようと水居津（三津浜付近か）に上陸して、久米郡石井郷の土居通増の本拠地を攻撃してきた。

忽那重清らは気鋭の水軍を率いて土居通増・得能通綱らの連合軍と協力して、星ノ岡で北条時直軍を迎え撃ったが、激しい白兵戦となった。

『正慶乱離志』によると、北条時直軍の勢いが強く、宮方軍は久米郡平井・梅ノ本付近まで追い込まれ、播磨塚台地の西麓、徳威原あたりで激戦が繰り返されたという。小野小学校の校庭（中庭）にあった「与力松」や野田村三嶋明神宮（現徳威三嶋宮）の境内（けいだい）にあった「錦旗の松」と称した樹齢五百年を越える老大木は、宮方軍の陣立をした場所であって、地元では誇りにしていたものである。今はその雄姿が見られなくなって昔を偲ぶよす

がもないが、南北朝史を考えるたびに思い出すことがらである。

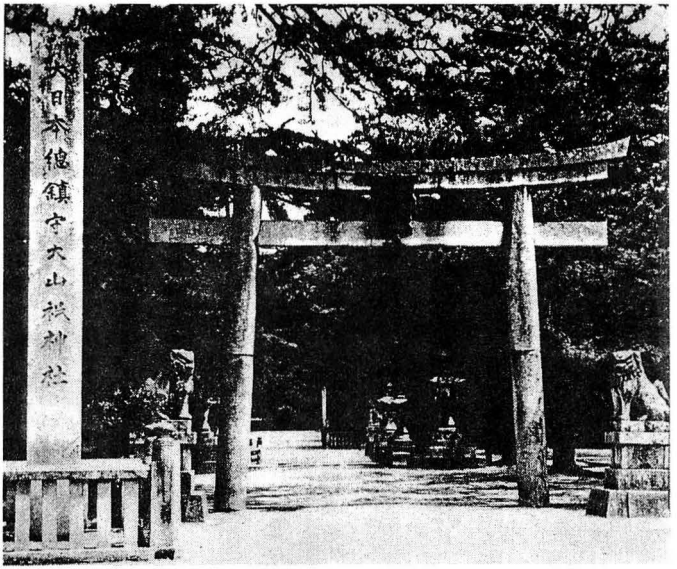
この戦いのとき、三嶋明神宮の神主玉井大夫越智通威は大山祇神社の祠官祝安親の軍に属して戦死を遂げた。宮方軍は一時苦戦に陥ったが、勢力を挽回して反撃に転じたので、遠路来攻した時直軍は疲れが出たのか多数の死傷者や軍馬や兵糧までも捨て置いたまま船に乗り込み逃げ帰ったのである。

『大山祇神社文書』（県指定重文）に、

当国度々合戦　致忠勤之条　尤神妙　具可達天聽之状　如件

とある。祝安親が後醍醐天皇に味方して、度々の合戦に手柄を立てたということで、その詳細が『祝安親軍忠状』に、

伊予国在庁兼御家人祝彦三郎安親と申す軍忠の間の事。去る閏二月十一日当国石井浜合戦の時、山手に於て安親先に懸りぬ。次に同二十七日より三月十一日に至る喜多郡根来の城合戦、同十二日星岡山の合戦に、毎度軍忠を抽（ぬき）んで候いぬ。次いで同五月七日讃岐島坂山の合戦に雅楽三郎入道、周敷浄円坊並びに安親、相伴いて先に懸け候い



祝安親は大山祇神社の祠官

ぬ。凡そ道前に於ては、安親最初より御方に馳せ参ぜしめ、数カ所合戦に忠勤を抽んじる条云々。

とある。祝安親は戦略家として傑出した武将であったといわれている。

☆　☆　☆

さて、ここで南北朝時代における郷土の史実が錯乱していることについて、注意すべきことを述べておこう。

それは『参考太平記』の巻七、

「河野挙義兵、付長門探題敗北事」のところに、

土居二郎、得能弥三郎宮方ニ成テ旗ヲ挙云々。

とあって、その註記に『金勝本太平記』に、土居二郎名を通治、得能弥三郎名を通言とあるのを、後世の史家が鵜呑みにして真実として取り上げたために、通治を河野通治即ち後の河野通盛と解することになったのである。

ことに、『大日本史』や『日本外史』のように著名な史書が、これらの説を採用したために信用せられる結果となり、大きな誤謬を生じることになってしまったのである。

『土居得能名称考』は、このことを指摘して明確に論証している通り、「土居二郎は通増であり、得能弥三郎は通綱である」のが正しいのである。通言については、「二氏の子弟の中に其人ありて、北陸地方において戦没せしものにあらざるか」と述べているに過ぎないのである。

ちなみに、『土居得能名称考』は大政官修史館の編纂によるものであることをつけ加えておく。

なお、『太平記』巻一に、

河野備後守通治、得能備中守通益（中略）是等を宗徒の侍として、其勢六万余騎鳳輦の前後を打囲み云々。

とあることを、そのまま信ずると、河野通治（通盛）が宮方として後醍醐天皇に供奉したことになってしまうのである。

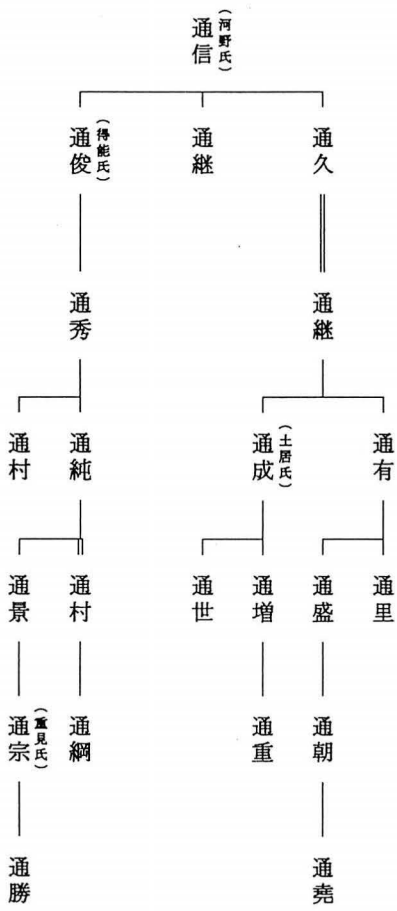
通盛は鎌倉幕府の御家人として忠誠を尽くし、のちには足利尊氏に仕えて河野氏の発展に努めた人物であって、『太平記』の叙述が誤っていることは明らかである。

このような錯乱の原因は、得能通綱が宮方について、朝廷から河野家の惣領職を与えられたことがあるので間違うことになったようである。これは一時的なことであって、惣領職の期間が余りにも短かかったので、通綱の存在を見落して通治と誤認した上に、土居氏と得能氏を入れ違えた結果であると説明しているのである。

土居氏が通増であり、得能氏が通綱であることは『正慶乱離志』をはじめ、郷土の諸史料でも明らかにされているところであって間違いのないことである。

現存している『得能累世一覧』も『太平記』の誤りを知らずして、それに合わせようとして後世の人が改竄したため返って史料的価値を失わせる結果となったのである。貴重な史料を好事家によって取り返しのつかないことにした例である。

河野・得能・土居・重見氏関係略図



六、後醍醐天皇隠岐配流

数万という大軍に攻撃を受けても攻め口のない難攻不落といわれた笠置山の絶壁をよじ登っていく不屈の勇者がいた。山上の砦はたちまち火の海と化したので、後醍醐天皇は僅かの従者とともに笠置山の脱出をはかったが、杣道（そまみち）をさ迷っているところを六波羅の兵に捕えられ、宇治の平等院に監禁される身となった。

嘉暦元年（一三二六）七月二十四日、幕府は後醍醐天皇の皇太子となっていた量仁（かずひと）親王を天皇にすることを決定し、後醍醐天皇が笠置山に楯籠っているとき、既に廃帝とせられていたのである。

元弘元年（一三三一）九月二十日、後伏見上皇の詔（みことのり）をもって量仁親王は践祚して光厳天皇となった。即ち北朝の初代天皇の誕生であるが、かつての後鳥羽天皇と同様に、剣璽を

ともなわない異例の践祚であった。

幕府は宇治の平等院に監禁されている後醍醐天皇に、光厳天皇に剣璽を授与するよう強く求めて、元弘二年（一三三二）三月二十二日、光厳天皇の即位の儀式を執り行い、四月二十八日に近江丹波で大嘗会が行われたのである。

そのため、後醍醐はもう天皇ではなくなって上皇ということになるのであるが、後醍醐自身は譲位したという意識をもっておらず、後になって、「光厳天皇に渡した剣璽は偽物である」などと宣言したりすることもあったので、この論考の中ではわかりやすいので天皇の名称を用いることを断っておく。

元弘二年三月七日、後醍醐天皇は数百騎の武士に護衛せられて配流地隠岐島に向けて出発した。このとき随行が許されたのは、千種（ちぐさ）忠顕、世尊寺行房、阿野廉子（れんし）、大納言、小宰相の五名だけであった。

『太平記』には、後醍醐天皇が隠岐に護送される途中、児島高徳（たかのり）らの一族が、後醍醐天皇を奪還しようと計画を立てて舟坂山で待機していたが、後醍醐天皇護送の一行は播磨の

今宿から山陰道に変更となったので計画は失敗したため、児島高徳は院ノ庄の後醍醐天皇の宿所に忍び込んで、庭の桜の幹を削り、

（天莫空勾践　天勾践を空しうするなかれ
時非無范蠡　時に范蠡無きにしもあらず）

という詩を墨書しておいた。

翌朝、警備の兵士がこれを見つけたが、意味がわからないので天皇に知らせた。天皇は児島高徳の意図することがよくわかったので意を強くして隠岐に向かうことができたようである。

『太平記』第四巻の「備後三郎高徳が事付呉越軍の事」には、児島高徳のことが、他のことの十倍以上ものページ数を費やして、故事を詳しく述べている。それを要約すると、

中国の春秋時代の末期、呉と越が覇権を争ったとき、越王の勾践が会稽山の戦いに破れて、呉の捕虜となったとき、范蠡という越の忠臣が魚売りに変装して姑蘇城に幽閉されている勾践に近づいて、後日の再会を期して、どうか命を大切にせられて待って

いてください。

という古事の意味にちなんで、天皇に味方がいることを知らせたのであった。

ところが、児島高徳という人物について、久米邦武博士が『史学会雑誌』（一七～二二号）に、「太平記は史学に益なし」という論文を発表して以来、高徳は架空の人物と見なされた時期があった。しかし、歴史学者和歌森太郎が研究して「高徳は備前国の山伏である」ことを論証し、また岡山の郷土史家相原康氏が「修験者の児島三郎高徳である」ことを明らかにしたので、実在の人物であることが認められたのである。

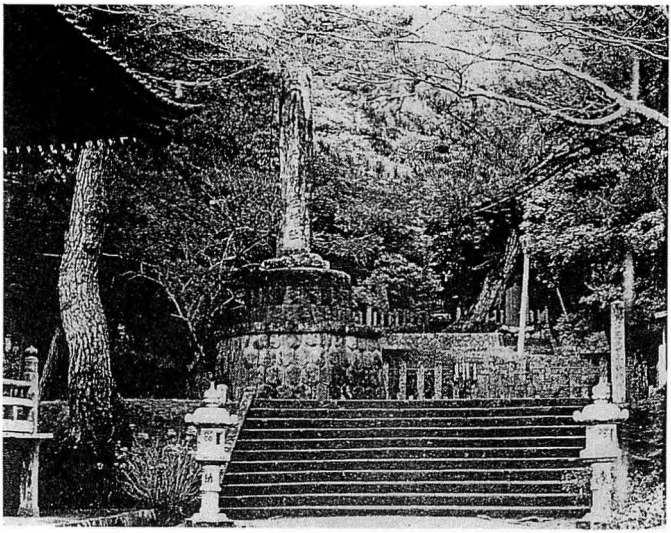
隠岐島を訪れると、後醍醐天皇が配流となった行在所（あんざいしょ）の所在地が、島前（どうぜん）の黒木神社のかたわらに「黒木御所跡」という碑が建っているところであるという説と、島後（どうご）の国分寺跡であるという説が根強く対立しているのに驚かされた。

従来教えられてきたのは、島前の別府港の東約五百メートルのところに、後醍醐天皇を

後醍醐天皇配流（隠岐・黒木御所跡）

祀ってある黒木神社の側にある「黒木御所跡」の碑が建っているところとばかり思っていたが、既に明治二十五年に吉田東伍博士が、『増鏡』の記述を根拠にして「国分寺が行在所であった」と断定し、次いで明治四十年代になって、島根県史編纂者の野津左馬助が、出雲の鰐淵寺の僧頼源が死の直前に浄達上人に手渡した寺宝の譲り状に「隠岐国、国分寺においてこれを下さる」と書いてあることを取り上げてその根拠とし、吉田東伍説を裏づけした。そのため、文部省は昭和九年に国分寺跡を後醍醐天皇の行在所として国指定の史蹟としたのである。

ところが、黒木御所を支持する島前の人たちは、



隠岐の国分寺（後醍醐天皇配流行在所）

後醍醐天皇が配流になった当時、国分寺跡は既に荒廃していて行在所として使用は不可能であると主張しているのである。また、『増鏡』に「海づらより少しはいったところに国分寺がある」と書いてあるが、実際は国分寺跡は海づらから五キロメートルも離れているので、国分寺跡ではない証拠であると主張し、さらに『増鏡』に、

かの島（隠岐）におはしましつきぬ。昔の御跡は、それとばかりのしるしだになく、人のすみかもまれにおのづから蜑（あま）の塩やく里ばか

りはるかにていとあはれなるを御覧ずるにも御身の上はさしおかれてまずかの古の事思しいづ。

とあるので、「この昔の御所跡」とは、後鳥羽上皇の行在所のことであるから、もし、後醍醐天皇の行在所が国分寺のある島後であったとすれば、行在所跡即ち後鳥羽上皇の行在所のある道前を訪ねるはずはないというのである。なお『増鏡』に、

つれづれにおぼさるるをりは廊めく所に立ち出でさせたまい遥かに浦のかたを御覧じやる。

とあるが、もし国分寺が行在所であったら、いかに廊下に出ても浦のかなたが見えるはずはないと反論しているのである。さらに『太平記』に、

佐々木隠岐判官貞清、府の島という所に黒木の御所を作りて皇居となす。

とあるように、当時の隠岐守護職佐々木貞清は道前に住んでいたので、府の島と呼んでいたのであるから、そこに黒木御所がつくられていたということは、島前説を裏づけるものであると主張はなかなか強いのである。

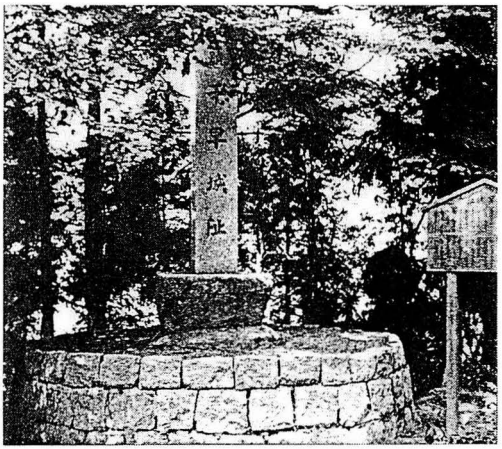
島根県では、大正天皇および昭和天皇が御来島せられたとき、「黒木御所跡」を後醍醐天皇の御所跡である」と御説明した関係上、昭和三十二年に「黒木御所跡を伝説地」に指定するという苦しい立場となったようである。

この隠岐島は境港から約八キロの沖合にあって、神亀元年（七二四）に「遠流の島」と定められて以来、近世に至るまで、「流人の島」として知られていたところである。天皇や有名人が多く流されているが、脱出を決行したのは、あとにも先にも後醍醐天皇だけである。

後醍醐天皇が隠岐島に流された年の十一月頃から、護良親王は吉野で討幕の令旨を諸国の豪族たちに発して決起を促したので、幕府に対して不平を抱いていた地方の武士たちは呼応して蜂起した。そのため幕府の支配機構は分断される状態に陥ったのである。

楠木正成が千早城に楯籠ったことが知れ渡ると、諸国の反幕府勢力が活発に動き出すようになった。『太平記』によると、閏二月下旬に隠岐の警固番佐々木富士名義綱が官女を

通じて密かに後醍醐天皇に、諸国の反幕府の武士たちが蜂起している状況を述べて、「この島を脱出されるなれば、できる限りの援助をいたしたい」と奏上したので、後醍醐天皇は隠岐脱出を考えるようになったが、佐々木義綱の申し入れは罠かも知れないと用心して、義綱の真意をたしかめるために、彼を出雲に渡らせて塩谷頼泰と連絡をとらせることを命じた。義綱は早速出雲に渡って塩谷頼泰に事情を説明したが、天下の形勢を見極めるまでには至らず義綱の申し入れを承諾することはできず、義綱を人質にとって様子を見ることにした。



楠木正成再起の本拠地・千早城跡(大阪府)

いっぽう連絡を待ちわびていた後醍醐天皇は、しびれを切らして忠顕や廉子をともなって夜闇の中を浜辺にたどり着き、伯耆へ渡る

商人船に乗り込ませてもらったのである。

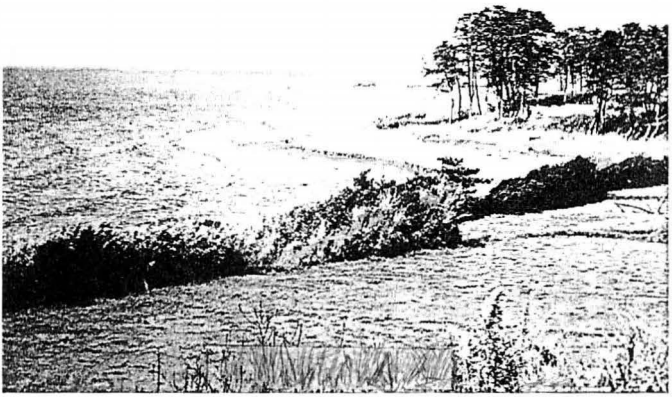
このスリルに富んだ隠岐脱出の様子を『太平記』は活き活きと描写している。江戸時代の「太平記読み」が特に熱を入れた場面の一つであるという。

船は明け方に島前を離れた。帆を上げて順風に乗って海上をすべるように本土に向かったのである。これを知った隠岐判官清高は十艘ばかりの船を仕立てて追っかけた。船頭は万一のことを考えて、天皇を船底にかくし、その上に干魚の俵をたくさん積み重ねて、ちょっとやそっとでは見つからないようにした。

追手が船に乗り込んで船内を探しはじめると、気転をきかせて、「そういえば、千波の浜を出る前に貴人らしい者を乗せた船が一艘急いで出て行った」と言うと、追手の武士たちは船足を早めて追いかけて行った。

かうして後醍醐天皇を乗せた船は名和湊に到着し、名和長高、長重兄弟の協力を得て上陸することができた。その上陸地点については諸説がある。

『増鏡』と『開城書表書』では、伯耆国稲津浦となっており、『梅松論』には奈波庄野



長年が領した名和湊（鳥取県）

津郷としている。『太平記』は伯耆国名和湊としている。国学院大学の池永二郎講師は、「上陸後に名和氏を頼っているので、名和湊（現在の名和町）と考えた方がよい」と主張しているのである。

その名和氏の出自は明らかでないが『増鏡』によると、

あやしき民なれど、いと猛に富めるが、顔広く心もさかさかしく、むねむねしきもの。

とある。また、『太平記』には、

其身武士ニテハ候ハネ共、家富一族広クシテ心ガサアル者ニ候へ

と、浦人が述べたと書いてある。『梅松論』は、

此所に奈和又太郎と申す福祐の仁候。一処に

おひて討死仕べき親類の一、二百人も候はん。

とある。従って名和氏は名和湊を拠点にして日本海を舞台に海上交易に活動していた土豪であろうと思われるのである。系譜には「村上天皇第六皇子具平親王の後胤」となっているが、村上源氏であるという確証は何ひとつないのである。

しかし、後醍醐天皇は、この多数の動員力を持っている名和氏の援助を得て、伯耆国船上山に楯籠り「朝敵追討」の綸旨を諸国に発したのである。

後醍醐天皇は既に宇治の平等院において幕府の圧力のため、光厳天皇に神器を譲っていたので、身分は上皇ということになっていたが、後醍醐自身は天皇としての意識を持っており、三月三日には船上山の山上で曲水の祝いを催し、名和長高に長年の名を賜り「帆かけ船」の家紋を与えている。従って彼は以後名和長年と称したのである。

また、後醍醐天皇は播磨国で武家方の軍と戦っている赤松則村（円心）を加勢させるために、千種忠顕に六波羅の攻撃を命じ、先遣隊として出発させた。赤松則村は佐用庄の一庄官に過ぎなかったが、村上源氏の末孫であるという氏姓意識に燃えており、老境にあっ

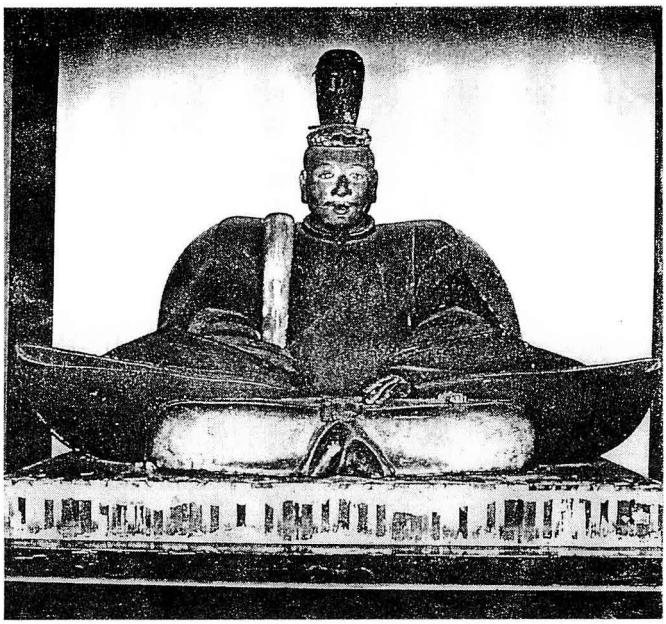
ても血を振るい立たせるほどの勇者である。その勢力は一千騎を越えるものであって、三月十二日には早くも京都の南山崎に達したほどの勢いであった。

幕府は後醍醐天皇が船上山に遷幸したことを知ったので、北条氏の一族である名越高家・足利高氏を将として伯耆国へ軍勢を指し向けることにした。ところが、足利高氏は途中で一族の上杉重能・細川和氏を船上山に派遣して、後醍醐天皇の綸旨を乞うて、四月二十九日、丹波の篠村八幡宮の社頭で鎌倉幕府打倒を決意して反旗を翻えしたのである。

七、足利尊氏幕府に反旗

足利高氏は嘉元三年（一三〇五）に生まれた清和源氏の名門である。元服したとき、鎌倉幕府の執権北条高時より「高」の一字をもらって以後、又太郎高氏と名乗っていた。

『難太平記』によれば、足利家には遠祖八幡太郎源義家が書き残していた「我が七代の



足利尊氏木像（等持院蔵）

孫に生まれ代って天下を取るべし」という置文（おきぶみ）があったという。その七代目に当るのが高氏の祖父家時であったが、家時は天下を取ることができなかったので、八幡大菩薩に「我が命を縮めて三代のうちに天下を取らしめ給え」と願かけを行って切腹したのである。その三代目が即ち足利高氏である。

足利氏は古くから北条氏と深い縁によって結ばれている。高氏より五代前の義氏は北条時政

の女を母としており、その子泰氏は北条泰時の女を娶り、頼氏は北条時頼の妹を母としている。高氏も北条氏の一門で、後に執権となった赤橋守時の妹登子を妻に迎えているのである。

元弘三年（一三三三）後醍醐天皇が隠岐島を脱出し、船上山に拠ったとき、播磨国（兵庫県）の赤松則村（円心）が、これに呼応して六波羅探題の攻撃を開始した。

京都から相次ぐ宮方軍の攻撃についての報告を受けた鎌倉幕府は大きな衝撃を受け、慌てて六波羅を応援させるため、出陣を一族の名越高家と足利高氏に命じた。

高氏にとっては、これが二度目の出陣である。笠置や赤坂攻めのときは、戦いが終ったとき、すぐには鎌倉に引揚げることをせず、残敵掃討を理由にして幾内五カ国を巡って、地理や運輸や水路などの状況を見て回り、部下の兵たちの演習に日を費やしたという。

今回、出陣の命がくだったときは、父貞氏の喪中であったので変更を願い出たが許されなかった。鎌倉幕府の倒壊はも早や時間の問題であると見抜いていた高氏は、病気を理由にして出発を一日延ばしに延ばしていた。

北条高時は、この高時の心情を疑い、北条氏に対して異心なきことの起請文（誓紙）を書かせ、妻の登子と四歳の嫡子千寿丸を人質にとって妻の実家赤橋守時の邸に預け置くように命じた。

高氏は弟の直義をはじめ、上杉、吉良、仁木、細川など一門三十二人と、一類四十三人を合わせ総勢三千余騎で「二引両の旗」を翻えして鎌倉を出発した。

三河国矢矧（やはぎ）に着いたとき、高氏は腹心の細川和氏と上杉重能に反幕府の意志を明かし、手勢を与えて船上山の後醍醐天皇の綸旨を受けるべく急使として走らせたのである。

中仙道を近江にはいり、番場の宿まできたとき、伊吹山の麓の太平寺城から佐々木道誉がやってきて高氏を迎えた。同じ近江源氏の六角時信は六波羅にあって宮方の赤松則村軍と戦っていたが、佐々木道誉は居城に引きこもっていて待機していたのである。

このとき高氏は二十九歳、道誉は三十八歳であった。二人は近くの蓮華寺で密談を交わした。高氏は北条氏（平氏）を倒して足利氏（源氏）の世を作りたい旨決意を示したところ、道誉はこれに賛成し激励したということである。それ以来、道誉は高氏の影武者とし

て高氏を助け、終生裏切ることがなかったという。

高氏らが近江の鏡宿に着いたとき、細川和氏、上杉重能らが後醍醐天皇の北条氏討伐の綸旨を受けてもどってきた。高氏は綸旨を弟の直義に見せただけで知らぬふりで行軍を続け、四月十六日に京都にはいった。六波羅の両探題と軍評定をしたのち、同月二十七日、八幡と山崎で合戦が始まった。高氏は桂川の西に陣を構えていたが、名越高家が戦死したという報を聞くと、ただちに陣を払って丹波街道を西へ進んで、足利家の所領である南桑田郡篠村にはいって陣を構えた。

高氏は、ここに鎮座している篠村八幡宮に願文を納め戦勝を祈って北条氏打倒の旗挙げをしたのである。以来、足利将軍発祥の神社として歴代の足利将軍から格段の信仰を寄せられることとなった。高氏の捧げた願文は現在も神社で大切に保存せられている。

四月二十九日、足利高氏が篠村八幡宮で旗挙げをすると源氏ゆかりの御大将の招きであると、たちまち二万三千余騎が集った。高氏の目的は佐々木道誉に打ちあけたように、北条氏を打倒して源氏の子孫である足利高氏がこれに代って将軍となることであった。後醍

篠村八幡宮（京都府亀岡市篠町）。元弘３年、六波羅救援のために鎌倉から上った足利尊氏が、丹波篠村の八幡宮に願文をこめて戦勝を祈った。反北条氏の旗挙げをした場所

醐天皇が求めている天皇親政の政治を助けるつもりなどは毛頭なく、忠節を尽くすことでもなかった。わざわざ綸旨を受けに船上山に行かせたのも、高氏が天下取りの目的達成するための手段にしか過ぎなかったのである。

高氏は綸旨の写しを絹の布に幾枚も書き写させ、髻（もとどり）を結んだ密使を諸国に走らせた。「髻の綸旨」を受け取った者は、奥州の結城宗弘、信州の小笠原貞宗、九州の島津家、阿蘇家にまでおよんでいたが、かねてよ

りの手筈のとおり承知したという返事があった。

五月六日には、足利高氏は二万三千余騎を率いて老ノ坂を越え京都へ突入した。後醍醐天皇の軍も総攻撃の態勢を整え、京都で激しい市街戦を展開したので、幕府軍は戦線を離脱する者が増加する状態であった。北条仲時・時益らは光厳天皇と後伏見・花園上皇を伴って関東へ逃れようとしたが、時益は近江路で戦死し、仲時らは伊吹山麓で守良親王の率いる宮方軍の襲撃を受けて大敗し、仲時以下四百三十余人が自刃して果てたのである。このとき、光厳天皇と後伏見・花園上皇は捕えられて京都に送られ、京都における幕府の拠点は完全に崩壊したのである。

八、新田義貞と伊予の武将

新田義貞と足利高氏とは清和源氏の流れをくむ同族の名門である。八幡太郎義家の子、

義国の長男義重が上野国新田庄を領して新田氏を称した。新田庄は今の群馬県太田市の北部にあたり、新田氏の居城であった金山城跡には、義貞を祀っている新田神社がある。

義国の二男義康が渡良瀬川の北岸に位置する足利庄を領して足利氏を名乗ったのである。館跡は現在の鑁阿寺が建っているところであった。

新田氏初代の義重は、源頼朝が治承四年（一一八〇）に以仁王の令旨をいただいて平氏打倒の兵を挙げたとき、源氏ゆかりの関東の武士は、そのほとんどが参加したにも拘らず、参加しないで傍観的態度をとっていた。

そのため、頼朝が鎌倉幕府を開いて日本史上初めて武家政権をうち立てるようになってから、新田氏はずっと冷遇されるようになったのである。

新田氏は代々、又太郎とか小太郎とかいう通称だけで生涯朝廷の官名はもらえなかったのである。義貞は三十歳を過ぎても無位無官であって、ただ小太郎と呼ばれるだけで、鎌倉幕府のもとでは身分関係において高氏とは比較にならぬほど差が生じてしまったのである。

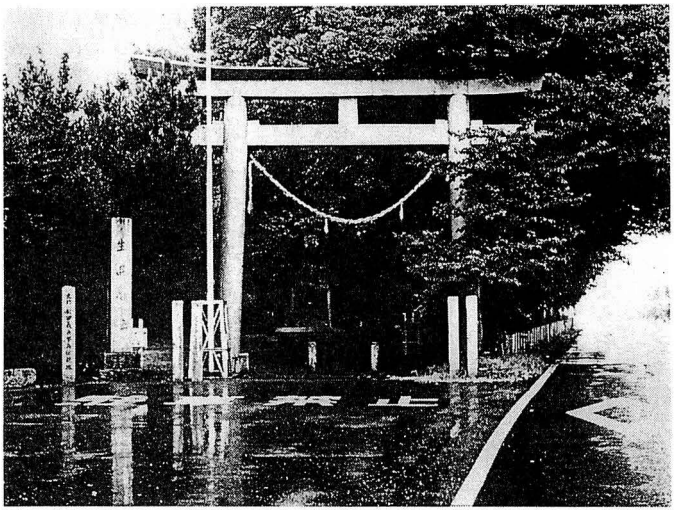
義貞は幕府の命令で、千早城の攻撃に参加していたが、守りが堅くて寄せ手の大軍が戦いに飽きてきたので、病いと称して領国に引き揚げてしまった。そうして、高氏が鎌倉を発つ直前に、「高氏が京都で決起するなれば、自分は鎌倉を攻撃する」と約束をしたのである。

その関係で、後醍醐天皇の綸旨を受けると、「今こそ家名を再興させる好機到来」とばかりに、いち早く反幕府の態度を鮮明にして、上野、越後、信濃、甲斐の諸源氏や友好の武士団に檄を飛ばして参陣を呼びかけたのである。ときに、元弘三年（一三三三）五月八日、義貞三十三歳の男盛りのときであった。

赤城山の南麓、上野国新田庄に鎮座している氏神生品大明神の社頭に、甲冑に身を固めた新田氏にゆかりの武士たち百五十騎が集った。義貞は綸旨を開いて拝し、

おのおの宣旨を額に当てて、運を天にまかせ、ただ一騎になろうとも討って出て鎌倉を枕に討死にしようぞ。

と一同に訓辞をして出陣式を終えると、大中黒の旌旗を翻えし鎧の袖を鳴らしながら進



新田義貞が旗挙げした群馬県新田町の生品神社

軍を開始したのである。

利根川の北岸、世良田に陣をしいていたときには、二千の兵が駈けつけて合流、五月九日の夜までに二十万七千余騎にふくれあがったと『太平記』は述べている。五月十一日に義貞軍は小手指原（てしがはら）で幕府軍と激突した。相戦うこと三十余度に及んだので、義貞軍は三百余騎が討死したが、鎌倉勢は六百近い将兵が野に屍をさらす結果となった。翌十二日の久米川での戦いは義貞の軍が圧勝した。

小手指原と久米川の戦いで破れた幕府軍は新鋭の十万余騎の大軍を指し向けて

義貞軍の邀撃に当てて分倍河原で戦った。分倍河原は自然の要害で鎌倉防衛の第一線である。十五日の戦いは終始幕府軍が優勢であったので、義貞は軍を堀金に撤退させた。翌十六日、三浦六左衛門が六千余騎を率いて馳せ参じたので、この日の分倍河原での戦いは義貞軍の大勝利となった。

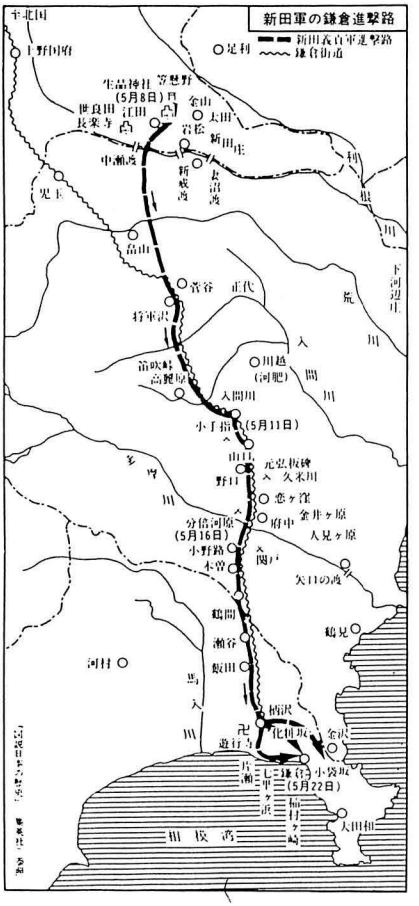
その勢いをかった義貞は鎌倉めざして殺到した。義貞が生品大明神の社頭で旗挙げをしてからわずか十日目の五月十八日には、関東八カ国の総勢は六十万七千余騎にふくれ上がったということである。

義貞は大軍を三手に分け、鎌倉を三方から同時に突入する作戦をとって、戦いは十八日巳ノ刻からはじまった。極楽坂の切り通しには大館次郎を左の大将とし、右大将は江戸三郎行義とし兵十万を当て、巨福呂坂の切り通しには堀口三郎貞満・大島讃岐守守之を配し十万余騎を、最大の難所といわれる化粧坂には義貞が自ら上将軍となり、弟脇屋次郎義助を副将として四十万七千余騎の大軍を率いることとした。

幕府側もこれに対抗して総力を結集して防衛に当った。戦いは四日間、終日終夜鎌倉の

街は阿鼻叫喚の巻と化した。いたるところで目をおおう地獄絵が展開されたのである。幕府軍の抵抗は死にもの狂いのすさまじい勢いであったから、さすがの義貞軍も一進一退の状態の繰り返しが続いた。

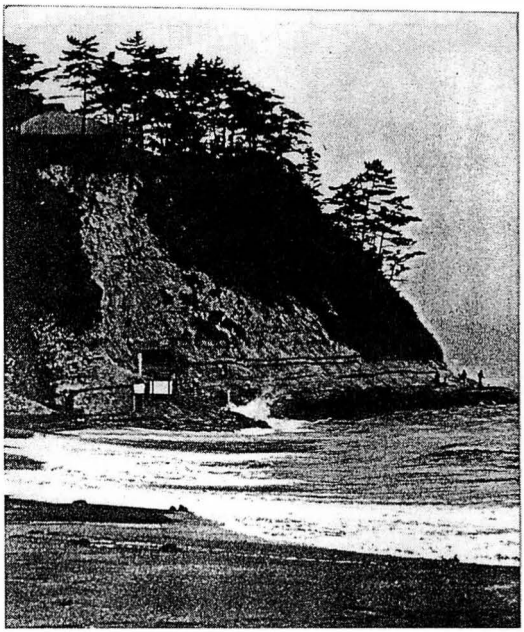
二十一日になっても、主力はまだ切り通しの難所「七つ口」を破ることができなかったので、その明け方義貞は二万余騎を率いて片瀬・腰越を回って極楽坂へ出た。稲村ガ崎を



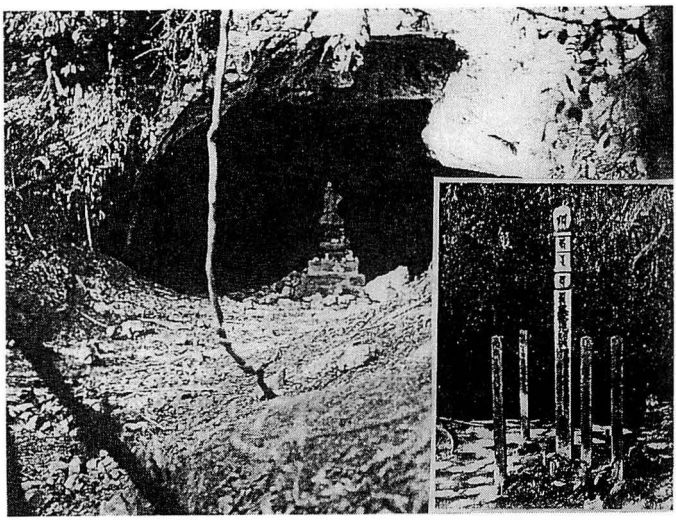
望むと、波打ち際まで逆茂木が構築され、沖の四、五町先には敵の軍船が近付く者に横矢を射かける構えである。

義貞は波打ち際まで馬を進めると、馬から降りて冑を脱ぎ、遥か海上を伏し拝んで竜神に祈りをはじめた。『太平記』によると、

伝え来る、日本開闢の主、伊勢天照大神は本地を大日の尊像に隠し、垂迹の滄海の竜神にあらはしたまへりと。わが君その苗裔として、逆臣のために西海の浪に漂いたまへり。義貞今臣たる道を尽さんために斧鉞をとって敵陣にのぞむ。



義貞が黄金の太刀を投入した故事で知られる稲村ガ崎



北条一族最期の地（鎌倉市小町三丁目・東勝寺跡）　高時腹切りやぐら

その志ひとへに王化をたすけたてまつって、蒼生を安らかしめんとなり。仰ぎ願わくは内海・外海の竜神八部、臣が忠義をかんがみて潮を万里の外に退け道を三軍の陣に開かしめたまえ。

と祈り終わると、義貞は自分の黄金作りの太刀を海中に投げ入れた。潮は音をたてて引きはじめ、渚は見る見るうちに砂浜になった。義貞は干潮時をねらって大芝居をうったのかも知れないが、兵士たちは勇気百倍して大喚声をあげて鎌倉に突入し火をかけた。

北条氏一族は、もうこれまでと決心し菩

提寺の東勝寺に入って自決した。殉死した者を合わせると八百七十余人に及んだと伝えられている。源頼朝が鎌倉幕府を開いて百四十一年目の元弘三年（一三三三）の五月、燃えさかる炎とともに滅び去ったのである。『太平記』に、

ああ、この日いかなる日ぞや。元弘三年五月二十二日と申すに、平家九代の繁昌一時に滅亡して、源氏多年の蟄懐（ちっかい）、一朝に開くる事を得たり。

と述べている。思えば新田義貞にとっては絶頂期であっただろう。戦前の歴史書では、稲村ガ崎から鎌倉に突入する義貞の武勲を輝やかしく取り上げていたものである。

このときを境にして、義貞と高氏はライバルとして生涯死闘を繰りかえす運命となるのであるがまことに不思議な因縁である。

栄枯盛衰は世のならいとか。源頼朝がうち立てた武家政治の本拠、鎌倉幕府を策謀によって奪い取った北条氏は将軍とはなれずに執権政治を続けていたが、愚物北条高時は政治を混乱に陥れ、遂に東勝寺で一族と共に滅び去ったのである。

鎌倉は実に歴史の宝庫である。源氏三代の悲劇の舞台であり、『太平記』の舞台となっ

たところである。私は鎌倉に魅せられて幾たびとなく訪れたものである。幾度訪れても尽きない歴史の郷愁にひたることができるところである。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

延元元年（一三三六）十月、新田義貞は恒良・尊良親王を奉じて、弟脇屋義助と子義顕をともない伊予の土居通増と得能通綱らを従えて比叡山を降って北陸に向かった。北陸地方は新田氏一族の勢力圏であり、敦賀は気比神宮の鎮座地で、その社頭は皇室の御料地になっているので後醍醐天皇とは深い関係にある。

北国をめざしていた新田軍は荒乳（あらち）の中山で大吹雪に遭遇して難渋していたところを足利高経の軍に襲撃されて、寒気の厳しさと食糧の欠乏によって戦わずして人馬もろ共に倒れるという惨状の中で、伊予の武将土居通増とその一族は壮烈な戦死を遂げたのである。『河野系図』の一本に、「通増、北国落之時雪中自害。三十三歳」とある。伊予の南朝の忠臣土居通増の忠臣の最後はまことに哀れである。きっと口惜しい自決であったに違いあるまい。

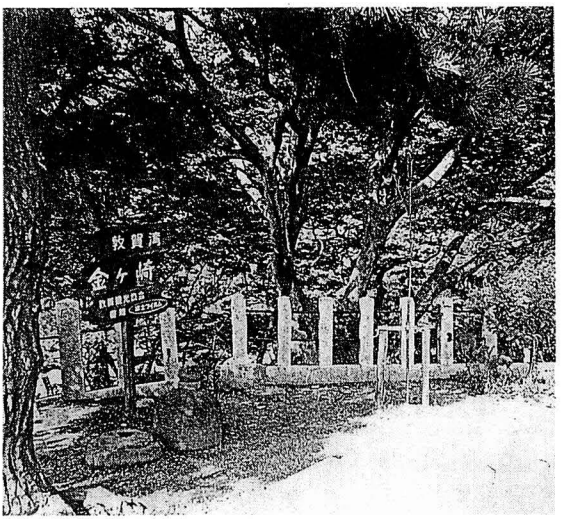
いっぽう、新田義貞に従った伊予の武将得能通綱らは、荒乳の中山における遭難をまぬ

気　比　神　宮

がれて気比神宮の祠官気比氏治に迎えられた。

気比神宮は現在敦賀市曙町に鎮座している。市内バスを神宮前で下車すると、すぐ朱塗りの美しい大鳥居が目につく。敦賀市のシンボルとなっている。重文で一〇・九メートルの四脚型鳥居は、安芸の厳島神社と奈良の春日神社のものと共に、木造の朱塗り鳥居では我が国のビックスリーである。佐渡が島の社領から奉納されたアスナロの大木を用いたもので、正保二年（一六四五）に建立されたものであるから既に三百五十年の歴史をもっているわけである。

延喜式名神大社であって、中世には越前国



金ガ崎城跡

の一ノ宮として隆盛を極めて神領は越前、若狭、近江、能登、越中、越後、佐渡にわたっており、祠官の気比氏の勢力は強大で平泉寺衆とならび称せられたほどで、社家領は十八万石で江戸時代の大名並であったという。

新田義貞の軍は、気比氏の居城金ガ崎城に楯籠った。金ガ崎城は三方を海に囲まれた断涯上の山城である。延元二年（一三三七）三月、足利高経は高師直、斯波高経らの支援を受けて金ガ崎城を攻撃したが、難攻不落を誇った堅城だけにビクともしなかった。

しかし、六カ月にわたる長期戦に追い込まれ、兵力、武器、食糧の消耗が甚大で、城兵

たちは食糧が尽きて軍馬を食って飢を凌ぐという有様であった。延元二年三月六日、餓死寸前になった伊予の武将得能通綱は、最後の力を振りしぼって槍を杖に立ち上がり、搦手門から突入してくる足利軍と戦って壮烈な討死をした。「尊良親王、公卿、親田義顕、気比氏治ら三百余人は自害し、恒良親王は気比斉晴のはからいで逃がれようとしたが、武家方に捕えられ、京都で毒殺されたと、『太平記』は伝えている。

この両親王を祭神とする金崎宮は、この山の中腹に鎮座していたが、明治二十三年（一八九〇）に新しく建築し社地を現在地に移した。明治時代建築の代表的なものといわれている。本殿と並ぶ絹掛神社は新田義顕、気比氏治、気比斉晴、瓜生保らを祀っている。あたりは桜樹が沢山あって春の花換（はなかえ）祭りが有名である。

新田義貞、脇屋義助兄弟は三月三日の夜半に金ガ崎城を脱出した。義貞はその後、加賀国の土豪を味方にして勢力を盛り返し、越前の国府を奪い、さらに黒丸城の斯波高経を攻めようとした。ところが、その途中九頭竜川沿いにある藤島城の守兵の頑強な抵抗に遭った。

燈明寺の前で首実検をしていた義貞は、この状況を聞くと、すぐさま新しい馬を用意させ、藤島城の搦手から一気に攻め落そうと燈明寺畷の水田の畦道づたいに馬を走らせた。義貞に従う者五十騎、これを見た細川孝基が率いる三百騎がいっせいに矢を射かけた。

義貞は馬に鞭打って敵中に突進した。馬は駿馬であったが五本も矢を受けて水田の中に倒れた。起き上がろうとしたとき眉間の真ん中に矢を受け慌れる血潮で目が見えなくなった。義貞は進退きわまって、もうこれまでと自らの首を掻き切って果てたのである。

義貞の死について『太平記』は、冷やかな記述をしており、『神皇正統記』は無駄死をしたかの如くに、あっさりと片付けているのはまことに哀れである。思えば義貞は悲しい星のもとに生まれた王子様であったのかも知れないと思わざるを得ないのである。

九、建武新政の成立と崩壊

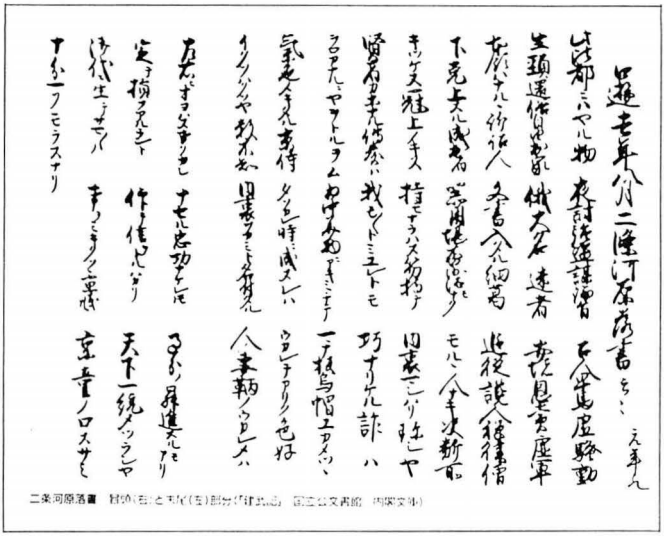
足利高氏が北条幕府に反旗を翻えして、六波羅探題を滅亡させたことを知った後醍醐天皇は伯耆国船上山を出発して京都に向かった。その途中、新田義貞が鎌倉幕府を滅亡させたことを知ったのである。

京都に帰還した後醍醐天皇は、『梅松論』によると「朕ノ新儀ハ未来ノ先例タルベシ」との覇気と自負をもって建武新政に取り組んだが、綸旨万能の政策は当時の世の中には受け入れられなかった。しかも、戦後処理の論功行賞には偏重があった。即ち、武士では足利高氏が最高であって、武蔵・上総・常陸の守護と伊勢の柳御厨他二十九ケ所の地頭を命ぜられ従三位武蔵守に任じられた。さらに、尊治の「尊」の字を賜わり、以後尊氏と名を改めたのである。

新田義貞は従四位上越後守に補せられ、越後・播磨・上野の守護を命じられた。楠木正成は河内・摂津の守護に、名和長年は因幡・伯耆の守護に任じられた。ところが赤松則村は六波羅陥落に大功があったにも拘らず、旧来の佐用庄の地頭確認の沙汰があったに過ぎなかった。そのため則村は立腹し、後には足利尊氏が後醍醐天皇にそむいたとき、いち早くこれに応じたのである。

伊予の武将では得能通綱が従五位下備後守に、土居通増が従五位下伊予介に任じられた。後醍醐天皇が、これほどまでに尊氏を優遇したのは、今回の戦いを通じて彼が武士の中で隠然たる勢力をもっていることを知ったからで、「自分の手元に引きつけておくのが得策である」と考えたからだといわれている。

このほかに、天皇は公家や有力社寺を重視して優遇したので命がけで戦った武士や土豪たちの不満をかい、反感を受ける原因となった。戦前の教育では、「建武の中興」と称して褒めたたえ高く評価したが、それは皇国史観によるものであって、史実は全く反対であった。『建武年間記』によると、



二条河原落書　冒頭（右）と末尾（左）部分（『群書類従』　国立公文書館　内閣文庫）

此比都ニハヤル物　夜討強盗謀綸旨
召人早馬虚騒動　生頸還俗自由出家
俄大名　迷者　安堵　恩賞　虚軍

と、建武政権の無力が世間を混乱に陥れている様子を鋭く指摘しているのである。また、

本領ハナルル訴訟人　文書入レタル細葛下克上スル成出者　器用ノ堪否沙汰モナクモルル人ナキ決断書（以下略）

と土地関係の訴訟の混乱は綸旨の乱発によって起きた結果であろう。

これは「二条河原落書」の一部であるが、当時庶民の反感を強くかったのは内裏の造

営の布告であった。時局をわきまえぬままに、後醍醐天皇の念願であった専制政治の遂行である「建武の新政」は誰の目から見ても容認できるものではなく、日本史上稀に見る反動政治であった。これが原因して、全国の武士や農民の心が朝廷から離れたので、足利尊氏が武家政治を復活させようと立ちあがったのである。

ことに、建武元年（一三三四）一月大内裏造営費の収奪は、長い戦乱続きで疲弊しきっている一般民衆の生活を全く無視したものであって「明王聖主」への期待はむなしく裏切られたものとなった。

建武二年七月の中先代の乱のとき、尊氏は弟直義の救援に行くことを願い出たが後醍醐天皇はこれを許さなかったので、尊氏は無断で鎌倉に下向した。十一月には新田義貞の誅伐を名目にして、反後醍醐の立場を明らかにしたのである。

延元元年（一三三六）、天皇はついに叡山に避難したので、「建武の新政」はここに完全に失敗して、「天皇親政」の夢は露と消え去ったのである。天皇の忠臣、万里小路藤房はついに絶望して出家し消息を絶った。そして奥羽・南関東・北九州・日向・越後・紀伊

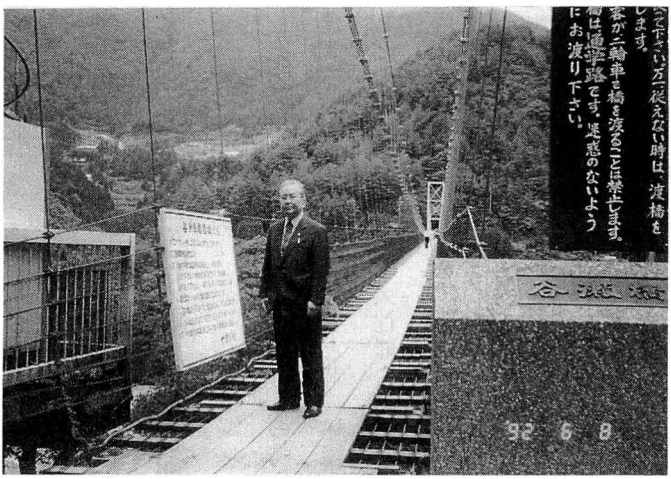
など各地につぎつぎと反乱が続出したのである。

十、大塔宮護良親王の悲劇

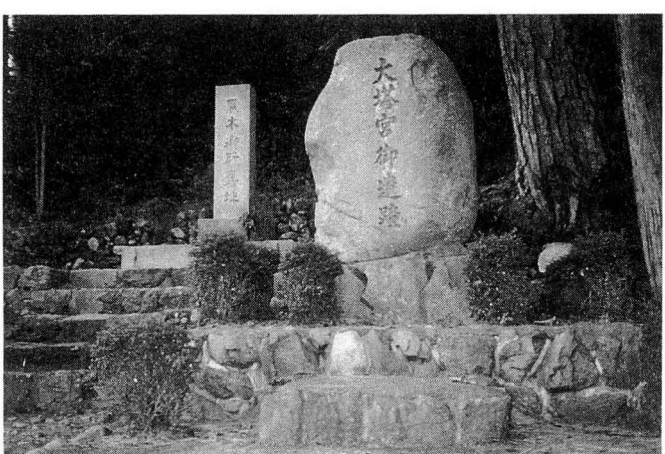
奈良県の五条駅前から新宮行きの特急バスに乗ると、約一時間で県境の天辻トンネルに達する。これを通り抜けると昔の秘境十津川郷である。大塔宮護良親王が十津川郷に潜入したときは、この上の天辻峠を越えたに違いあるまい。

この十津川郷というのは、大和国（奈良県）吉野郡の南部を占める広大な地域であって、東と北は大峰連山に、西と南は紀伊国の高野山群・熊野山系によって限られた別世界を作っていて、天川・十津川・野迫川・大塔の四カ村に分かれている。谷合いを流れている水は十津川となり和歌山県に入ってからは熊野川となっている。

私は特急バスを上野地で降りて、日本一の吊橋で有名な谷瀬の大橋を渡ることにした。



日本一の釣橋　谷瀬大橋



黒木御所跡　護良親王御潜居の所（奈良県十津川村）

長さが二九八メートル、高さが五四メートルで、橋巾は四メートルはあろうか、中央どころに板が敷いてあるが、橋巾いっぱいにあるわけではなく、はるか下に川が見えて目が回わる。歩くたびに吊橋は上下左右に揺れるので肝を潰す。毎日通っている人たちは慣れているのか、オートバイを平気な顔して走らせているのには驚いた。

私は渡り終えると、生き返ったような気持ちになったが、油汗でからだ中がびっしょりになっていた。右に折れて百メートルばかり歩くと左側の広場に護良親王の「黒木御所旧地」という碑が建っていた。十津川の郷士竹原八郎・戸野兵衛たちが、大義を唱え、同志を糾合して仮宮を造って護良親王を迎え入れたところである。

護良親王は延慶元年（一三〇八）に生まれた皇太子尊治親王（のちの後醍醐天皇）の皇子である。『太平記』に、

御幼稚ノ時ヨリ利根総明ニ御坐セシカバ君、御位ヲバ此宮ニ社（こそ）ト思食（おぼしめ）シタリシ。

とあって、後醍醐天皇は護良親王を次の天皇にしたいと望んでいたようであるが、「文保の御和談」の定めによって、皇太子にさえなれなかった悲運の親王である。

この「文保の御和談」というのは、鎌倉幕府の執権北条高時が、朝廷の皇位継承問題で争いが起こったとき、仲介に入って成立させた約定（やくじょう）である。護良親王が討幕に執念を燃やしたのも無理からぬことであろう。

『本朝皇胤紹運録』によると、護良親王は後醍醐天皇の六ノ宮となっているが、『太平記』は三ノ宮としている。ところが、他の諸書はみな一ノ宮となっているのである。一般に一ノ宮の尊良（たかよし）親王より実際は年長であったといわれているので、出生については秘密が隠されているのかも知れないのである。

元弘元年（一三三一）、「元弘の変」が起きると、護良親王は笠置に出向いて後醍醐天皇を援けたが、笠置が陥落すると、墓府軍の追捕を逃がれて、奈良・十津川・吉野・熊野と転々と居所を変えて、反幕府勢力の糾合に努力したのである。

奈良の般若寺に潜伏していたとき、経巻を入れた櫃の中に身を潜めて討手の目から逃がれたというきわどいこともあった。熊野別当定遍の欲に絡んだ奸計を赤松・平賀・村上らの股肱の臣に助けられて、かろうじて逃がれたということもあった。こうして後醍醐天皇

のために尽してきたのである。

「建武新政」が始まろうとしたとき、護良親王は吉野から三千の兵を率いて京都へ帰ったが、建武の新政府には護良親王が政務を執るべきポストは既に無くなっていた。征夷大将軍と兵部卿という肩書を持っていたが、仕事を行うところは一つもなく、やりたいと思うところは皆足利尊氏によって占められていたのである。

これは護良親王の今までの戦功を全く無視したところの酷(ひど)い仕打ちであった。後醍醐天皇が隠岐島に流されていたとき、護良親王は天皇に代わって令旨(りょうじ)を発して全国の反幕府の武士たちを吉野に集めて、幕府の目を引きつけていたので、その隙(すき)に乗じて天皇は隠岐島の脱出を容易ならしめたのに、その功績は何ひとつ認めてもらえなかったのである。

征夷大将軍の護良親王と鎮守府将軍の足利尊氏が狭い京都で両立することは無理なことである。その上に、護良親王が大きな打撃を受けたのは准后廉子が生んだ皇子が次々と登用されていくことであった。恒良(つねよし)親王の立太子に続いて、義良(のりよし)親王は北畠顕家が奉じて陸奥の国府に赴き、鎮守府将軍となり、顕家は陸奥・出羽の二国を管領した。

成良（なりよし）親王は足利直義に奉じられ、鎌倉にくだって、二階堂邸を御所として鎌倉幕府を設置し征夷大将軍となった。そして直義は執権となったのである。

護良親王は、これら一連の人事は足利尊氏と准后廉子の謀略であると思ったようである。

『太平記』は、

護良親王が信貴（しき）山から連れてきた部下が、毎夜白河あたりを徘徊して辻斬りを行い女や子供が斬り殺されることがあとを断たないのみか、護良親王はそれを黙認している。といった意味のことを述べている。考えようによっては、六波羅奉行として治安維持にあたっている尊氏に対する挑戦ともみえるわけである。護良親王はついに後醍醐天皇に、

尊氏は幕府再興の野心を持っている。今のうちに除かないと、親政のさまたげになりましょう。

と迫った。後醍醐天皇は、

同じ考えである。尊氏が六波羅に居すわって、奉行所を置いたと聞いたときから、武家政治を続けようとする野心があると見抜いていた。

と述べ、護良親王に、尊氏の野望を除くため、

兵を集めて誅伐の用意をせよ。

と命じた。護良親王は令旨を発して兵を集結させたのである。

ところが足利尊氏はこの状況を見て、逆手に利用して、天皇の寵妃阿野廉子を動かし、

護良親王は帝位を奪おうとして兵を集めている。

とざん訴させたのである。天皇は廉子の言うことを信じ、護良親王に謀反の罪を着せて捕えさせることにした。

建武元年（一三三四）十月二十二日、清涼殿で歌の会を開くからという天皇のお召しに応じて「鈴の間」に入ろうとしたとき、親衛隊の結城親光と名和長年に命じて屈強の侍十数人をして護良親王を取り押さえさせ武者所に押し込めたのである。

元弘の始めより、幕府を倒すために身を挺し、木の下岩かげに身を伏せて戦いぬき、やっと京都に帰ったかと思うと、天皇のためにこのようなことになろうとは思いもかけぬことであった。誠に哀れというほかはない。悶々の情をしたためて父帝後醍醐にあてた手紙

も天皇の目には触れることなく、翌月、数百騎の兵に護衛されて鎌倉に送られ、足利直義の手によって二階堂の薬師堂が谷に土牢を造って押し込められたのである。

捕えられた護良親王が「武家よりも君がうらめしく渡らせ給う」と呟いたということであるが、父帝後醍醐に裏切られたかと思うと口惜しくて胸がつまる思いであったことであろう。

この事件について、『保暦間記』は、

護良親王が我が子興良親王を帝位につけようとしたことが発覚したからである。

と述べており、『梅松論』は、

後醍醐天皇が足利尊氏を暗殺しようと企てたことが失敗したので、その罪を護良親王にかぶせて捕えさせた。

と述べている。いずれが真実かは決め手がないが、教育勅語の「皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」には縁遠い天皇である。

「建武の新政」において、その片腕ともたのむべき我が子、護良親王を阿野廉子を偏愛

のあまりに目がくらんで、足利尊氏・直義らの謀略に惑わされ、ついに自らの手で葬り去ってしまった後醍醐天皇は、『太平記』のいう。

万民徳に帰して楽しむ。誠に天に受けたる聖王、地に奉ぜざる明君なり。

と絶賛するほどの天皇であったのであろうか、疑問に思えてならないのである。

その事件と前後して、検非違使別当正二位万里小路藤房が官職を捨てて姿を消している。天皇に最後まで供奉した側近の一人であったが、天皇に対し諫奏文を奉呈したが怒りをかったことが原因なのであろうか、藤房は考えに考えた上で決めたことに相違ないであろう。その諫奏文の要点をあげると、

① 元弘の乱に天下の士卒が天皇のもとに集ったのは戦功の賞が目的であった。だから乱が終ってから大勢の者が争って上洛した。ところが、公家のほかは恩賞の沙汰がなかったので、うらみをもって自国に帰った。政道の誤りを憎んでのことである。

② 大内裏の造営を計画し課役が過大であるという不当が行われている。

③ 国々では守護が権威を失い、国司が権を専らにし、その代官らが過大の勢力を有する

ようになった。

④ 諸国の家人の称号を廃止したことは幾十万の武士の怒りをかっている。

⑤ 元弘の乱の功臣は、高氏、義貞、正成、則村、長年であるのに則村だけ恩賞がなかったのは不当である。

⑥ 綸旨が朝令暮改となって武士や農民はただ迷うばかりである。

⑦ 今もし、武家の棟梁となるような人物が現れたら、政道に不満をもつ武士たちは、たちまちその方へ応じることであろう。

以上のような内容で建武新政の欠点をずばりと指摘し、将来を予言しているのである。

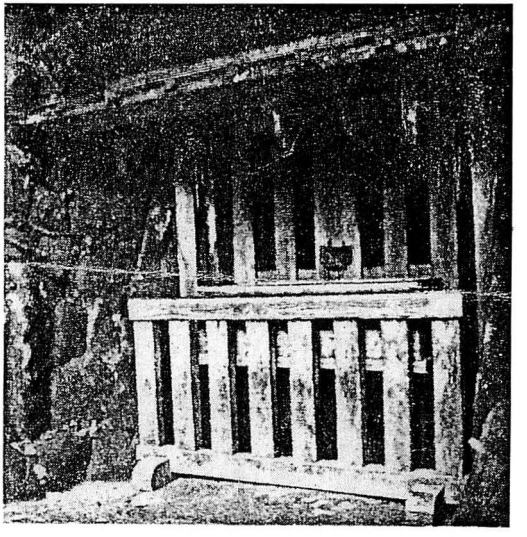
護良親王が幽閉せられてから半年ばかり後のことである。北条氏の残党が反乱を起こした。北条高時の弟時興は、鎌倉が陥落したとき奥州へ逃がれていたが、持明院統の西園寺大納言公宗をたよって京都に潜入していた。時興は信州にかくれていた高時の子、時行と呼応し、西園寺家の別荘に後醍醐天皇の行幸を仰ぎ暗殺し、それを機会に花園上皇の院宣により、時興は京都で、名越時兼は北陸でいっせいに兵を挙げようと陰謀を企てていた。

これは持明院統の大覚寺統に対する巻返しであったが、公宗の弟公重の密告によって露見し、一味の大半は捕えられ、公宗は首を斬られた。

しかし、諏訪の上の宮の祝昭運（諏訪頼重）、その子時継、滋野一族に擁せられた北条次郎時行の信州での旗挙げには、「建武の新政」に対する不平不満をもった越中、能登、加賀、伊豆、駿河、武蔵、相模、甲斐の武士たちがまたたく間に集って五万騎となり、鎌倉めざして進撃を開始したのである。

足利直義は武将を派遣して女影原、小手指原、府中で防戦したが、渋川義季、小山秀朝らが戦死し、相ついで敗戦となり、直義も井出沢で戦ったが破れ、三河国矢矧まで命からがら逃げもどった。

尊氏の妻登子と嫡子千寿王を連れて鎌倉の山ノ内まで落ちのびたとき、ふと頭に浮かんだのが護良親王のことであった。「このままでは北条氏の手中におち入って、どのように利用されるかわからず禍根を残すことになるかも知れない」と考えた直義は、淵辺伊賀守義博に命じて護良親王を弑逆することに決めた。



護良親王が幽閉されていたといわれる土籠

義博は七名の部下を連れて薬師堂ガ谷に引き返し、土牢の入口まで忍び寄った。親王は土牢の中で火を灯して読経中であったが、人の気配を感じたので、「誰かッ」ととがめたが淵辺は答えず、鍵をはずして土牢の中に踏み込んで護良親王をねじ伏せ、首をはねようとしたとき、護良親王は刀の切っ先に噛みついたので、鋒が一寸ばかり折れた。淵辺は脇差を抜いて親王の胸を二度突き刺したのち首をかき切ったということである。

淵辺は恐ろしい形相をした首を見せない方がよいと考えて竹藪の中に投げ込んだ。時に護良親王は二十八歳であった。淵辺は駿河の手越川原で直義に追いつき、親王の首を打っ

たことを報告したが、彼はその夜の合戦のとき自ら敵陣に斬り込んで行き自殺的戦死を遂げたということである。

鎌倉市の二階堂を訪れると、明治二年に創建された鎌倉宮があって護良親王を祀っている。足利直義が護良親王を押し込めていた東光寺跡はここであるといわれており、境内に親王が幽閉されたという土牢、淵辺義博が藪の中に捨てたという親王の首塚、親王に最後まで近侍していた南の方（藤原保藤の娘）を祀る南方社、吉野で親王の身代りとなって自刃した村上義光（よしてる）を祀る村上社がある。親王の墓は首塚をいい、この社の東方二百メートルの理智光山の山頂に祀られている。

十一、足利尊氏と伊予の武将

建武二年（一三三五）七月、諏訪（すわ）頼重らに擁立せられた北条高時の遺児時行は、後醍醐

足利尊氏画像（守屋美孝氏蔵）

天皇の「建武の新政」が失敗したことを見て鎌倉幕府の復活を図ろうと、北条泰時らと反乱を起した。これを「中先代の乱」という。

これまでにも、北条氏の残党が陸奥・関東・紀伊・長門・九州の各地で反乱を起こしたが、いずれも大事に至る前に鎮圧された。

これらの散発的な反乱を統一するため働きかけたのが、高時の弟泰家である。泰家は鎌倉幕府が滅亡後、一時陸奥に逃がれていたが、やがて京都へ潜入して西園寺公宗（きんむね）に接近した。

公宗は北条氏の残党と緊密な連絡をとり、一斉蜂起を期して後醍醐天皇の暗殺を図るが、密告によって発覚し、名和長年によって斬首され

た。

鎌倉幕府が滅亡後、得宗被官諏訪盛高に守られて鎌倉を脱出した北条高時の子時行は、信濃国諏訪祠官頼重のもとに隠れて、相模次郎と名乗り、時機を見て北条氏の再興を期していたのである。

建武二年七月、北条時行は信濃の守護小笠原貞宗の軍を破って信濃一国を手中に収めると、その勢いをかって鎌倉に向けて進撃を開始した。

時行の軍は直義の軍と武蔵の女影原・小手指原・府中などで激戦を展開し、渋川義季・小山秀朝軍を破って鎌倉の防衛線を突破した。直義は七月二十五日には鎌倉を放棄し、成良親王・足利義詮（よしあきら）と共に三河国矢矧（やはぎ）宿まで敗走したので、時行はついに鎌倉を奪回することができた。

直義の急報を受けた尊氏は、後醍醐天皇に追捕使と征夷大将軍に任命を願い出たが「征夷大将軍については、尊氏が時行を討ったあと、鎌倉に留って政権を握るのではないかと疑いをいだいていた」ので許さず、わずか五歳の宗良親王を征夷大将軍に任命した。尊氏

の野心を封じる意図であったことは、いうまでもあるまい。

尊氏は腹を立てて、勅命を受けないまま京都を発って五百騎の軍を率いて鎌倉をめざした。尊氏のあとを追ってこれに加わる軍勢は日増しにふくれ上がり、近江に入ったころは三千余騎になった。柏原では京極道誉が一千の手勢をさいて待っていた、尊氏直義兄弟が

京極道誉（バサラ大名で有名）
元弘の乱以後足利尊氏に従って終生変わることがなかった

八月八日、三河の矢矧の陣所で対面したときには三万騎という大軍にふくれ上がっていたのである。

直義軍と合わせて総勢五万余騎を整えて、鎌倉をめざして進撃した。駿河の高橋、国府、清見関、相模の湯本、相模川、辻堂、片瀬と七度の合戦で北条軍を破り破竹の勢いで進撃したので、時行は鎌倉に在住すること二十日ばかりで敗走したのである。

八月十五日、諏訪頼重、時継父子や安保次郎左衛門など主だった者は、鎌倉の勝長寿院で自刃した。時行は信濃に逃がれたが、守護方の村上・市河氏らの攻撃を受けて、この乱は終りをつげた。

この戦いで勝利を得た足利尊氏は天皇に見切りをつけて帰還命令が出たにも拘らず、鎌倉に腰をすえて動こうとはしなかった。

かつて、鎌倉幕府の御家人として仕えていた伊予の河野通盛は鎌倉幕府が滅亡したので、鎌倉の効外で静かに隠棲していたのであるが、世の中の事情が変ってきたので、建長寺の僧、南山士雲の斡旋によって足利尊氏に謁見することが叶い、忠節を尽くすことを誓った。

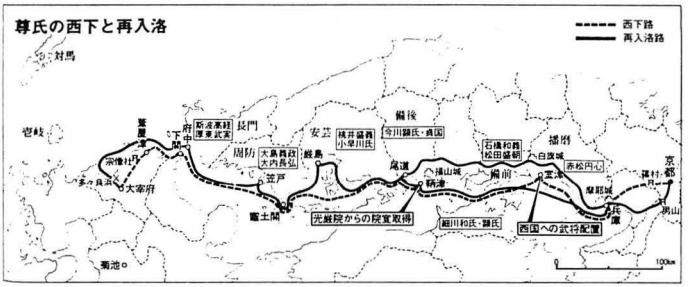
その後、通盛は伊予河野氏の惣領職を認められ、伊予に帰って武家方の勢力挽回に尽したのである。

一方、伊予の宮方である土居通増、得能通綱らは新田義貞の軍に属して京都に出征していた。やがて河野通盛は大三島の祝安親と協力して、伊予郡方面における土居・得能氏の残存兵力を討ち滅ぼし、松前・由並両城を陥落させた。

中央においては、足利尊氏・直義軍は、新田義貞軍を討ち破って京都を占領していたが奥州から西下してきた北畠顕家の大軍と楠木正成の軍に狭撃されて九州に敗走せざるを得ない状況に急変した。

このとき、源氏ゆかりの東国へ帰えれば、精強な軍団を再建することは容易であったろうに、九州に敗走したのはなぜであろうか。尊氏にとっては東国は完璧に巨大な後方であるので、さらに必要なのは次の戦略であったのであろう。

それは瀬戸内海をおさえておくことであったに違いない。「畿内の商品経済を支える瀬戸内海を勢力下におさめることは、経済的にも朝廷側を締めつけることになるし、直接的



には西国武士団をそっくり戦力化し得る」と尊氏は最初からその計画をもっていたと、作家光瀬龍氏は推理しているのである。

案の定、九州に渡った尊氏のもとへは九州や四国の武士たちがぞくぞくと参加してきたのである。いかに尊氏が武士団に人望があったかがわかるのである。待ち望んでいた指導者が到来したといわんばかりの人気である。

ところが、九州には朝廷と、歴代緊密な関係にある肥後の菊池城主菊池武敏がいた。武敏の嫡男武重は新田義貞の率いる尊氏・直義征討軍に加って戦功を挙げた勇者である。

菊池武敏は大軍を率いて福岡市の北方、筥崎宮に近い多々良浜に陣を敷いた。ここは、文永・弘安の役に元の大軍が上陸して来たところである。菊池勢は六万といわれる大軍に対

して、尊氏勢はわずか一千騎であったという。『太平記』によると、「兵力の差に尊氏は絶望して戦う以前に腹を切ろうとしたという」が、これは信じがたいところである。

劣勢の尊氏勢に神風が吹いたのである。それは突風であった。しかも尊氏には追い風であったから、多々良浜の砂塵が菊池勢の正面に襲いかかるという状態になったのである。

多々良浜の戦いは足利勢の勝利となった。

弱気になっていた尊氏を励まし、多々良浜で菊池勢を討ち破って敗走させたのは弟の直義であるといわれている。松浦党や竜造寺党が足利方に内応したことも勝利の原因といわれているが、とにかく奇蹟的な勝利であったわけである。

多々良浜の戦いで勝った尊氏は、五百艘の船団を組んで延元元年（一三三六）四月三日博多港を出発東上を開始した。直義は高師泰（こうのもろやす）を旗本頭として陸路を、尊氏は海上を東へ東へと進撃したのである。

伊予の河野通盛は河野水軍を率いて鞆ノ浦で尊氏の本隊に合流したことが『梅松論』に見えている。五月十日、この鞆ノ浦を出たときは、軍船千百余艘、陸上の軍勢は七万騎に

ふくれ上がっていたという。沿道の武者どもがぞくぞくと参加したのである。いかに尊氏の人望が大きなものであったかがうかがえるのである。

「尊氏軍、都に迫る――」の報は、堂上公家たちを震いあがらせたのである。

宮方の新田義貞軍は赤松則村の拠った白旗城を攻撃していた。播磨（兵庫県赤穂郡）の千種川に臨む標高四四〇メートルの白旗山の頂上に、赤松円心入道則村が築いた城がある。

延元元年（一三三六）二月、足利尊氏が京都の戦いに敗れて西走したとき、則村はこの城に拠って後醍醐天皇に反旗を翻えしたのである。新田義貞は六万の兵力をもって、五十余日間にわたり、昼も夜も攻めたてたが、四方みな嶮岨にして、攻めても攻めても、播磨ノ美作の名を得たる射手に射落されるという堅城であった。

義貞は尊氏軍の東上を知ると兵庫を退いて急を京都に知らせた。朝廷では、楠木正成の作戦に耳をかさず、ただ義貞を援けるよう命じ、あたら忠臣を無駄死にさせてしまったのである。戦いのことを知らぬ公家たちの強がりにバカげた戦いを強いられたわけである。

楠木正成は「もうこれまで」と玉砕を覚悟の上で、足利軍を迎え撃ったのが有名な湊川

の戦いであった。

楠木正成の手勢は七百騎余りで、湊川の西の宿に陣をかまえた。そのころの湊川は、会下山の東の麓から現在の湊川神社の西を走って海に流れこんでいたという。五月二十五日辰ノ刻、尊氏の率いる船団の兵二万五千が経島や小松原に上陸を開始し、これを阻止する新田軍との間に戦闘が始まった。

尊氏は光厳上皇の「義貞討伐」の院宣をふりかざし、必勝の決意で下知した。

楠木軍は二万余の足利軍に四方から攻め立てられた。いかんせん、衆寡敵せず、三刻余り（六時間）の間に十六たびも出撃するという死闘のあげく、刀折れ、矢つきて正成・正季は一族郎党とともに自刃して果てた。

河野通盛の軍に属していた大森盛長彦七が楠木正成の陣中に突入し、正成の首級をあげたが、あとで正成の亡霊に悩まされたことが『太平記』に記述されている。

この大森盛長彦七について、景浦勉編『郷土歴史人物事典愛媛』（第一法規）には「大森盛直」とあり、『伊予偉人録』（愛媛県文化協会）にも諱は「盛直」とある。ところが

『愛媛県史―人物』では『盛長』となっていて、古典『太平記』と同じである。いずれが正しいのであろうか。

とにかく、伊予郡砥部庄を領し、五本松に館を構えていた豪族であるが、生没年ともに不詳である。

後醍醐天皇は敗戦の情報を得ると京都を脱出して比叡山に逃げ込んだ。尊氏はこれに追い討ちをかけたが、新田義貞軍の強い抵抗にあって苦戦したようである。『築山本河野家譜』に次のような記録がある。

被聞食畢　真義御判

建武三年六月五日　於比叡山大嶽南尾、合戦分捕并手負実検支

伊予国軍勢

二宮弥四郎忠世　ホソノ下物具ヲイトヲサル

志津川弥太郎通治　分取右ノモ、右乳上左ノ方頸一突疵二ケ所

岡田新五郎市遠　頸骨射疵

久枝孫四郎康盛　　左ノウテヲ射抜カル

大内小三郎信俊　　右ノ脇下射疵

といった具合に三十三名の者の負傷状況が詳しく記載されている。

このほかに負傷している伊予軍勢の氏名を連記しておこう。

大内又太郎信種、仙波平治盛増、同弥平治実氏、氏家助五郎会長、富田治部房、正岡三郎信久、桑原孫四郎通時、岡田彦五郎通時、大窪左近允家景、石手寺円教房増賢、田村越中房元康、長又五郎忠貫、大野次郎兵衛尉通忠、江戸六郎太郎重近、岡田又六武、二宮左衛門太郎義親、太郎兵衛尉、江戸弥次郎、本郡孫四郎宗房、本郡太郎左衛門入道賢何、桑原次郎左衛門尉久通、山崎又太郎祐盛、沼田七郎三郎入道道智、兵衛次郎、伊原彦四郎市継、河野墨俣三郎信有。（以上）

光厳天皇はこのとき比叡山から脱出して尊氏軍の本陣に入った。直義軍の攻撃は昼夜を分かたず続けられ十五日間にも及んだので兵糧が絶たれ、新田義貞軍は孤立状態に陥った。

戦いが長期化している中で、八月十五日に光厳天皇は尊氏の奏請をいれて、弟の豊仁親王を元服のうえで、二条烏丸殿で践祚の儀を執り行った。即ち、光明天皇である。神器の援受はなかったが、後醍醐天皇の隠岐配流中に光厳天皇が践祚された先例にならったのである。

ここに、またもや京都と東坂本に天皇が両立することになった。叡山では興福寺に檄を飛ばして京都の足利勢を攻めるように呼びかけた。南都はこれに応じて四方から京都に攻め入った。新田義貞はこの機をのがさじと命運をかけて戦ったが、足利軍の大軍の前には退かざるを得なかった。

後醍醐天皇は勢力挽回を図ろうと、北畠顕家に再度上洛を指令し、懐良親王に九州の武士を糾合して東上させようとしたが、八月二十五日の阿弥陀峯の合戦と同月二十八日の合戦に敗れて、さすがの後醍醐天皇も暗然としていたところへ、叡山の忠円僧正を介して、尊氏の密書が届いた。

自分が敵対しているのは君側の奸臣である。天皇が京都へご還幸の意志あれば奉迎し、

天下の成敗は公家にまかせます。

という意味のものであったという。

尊氏は光明天皇を擁立したとはいえ、後醍醐天皇と戦って朝敵呼ばわりされることを恐れていた。後醍醐天皇の手中にある神器も光明天皇を正統の天皇とするために必要であったのである。

後醍醐天皇は尊氏の奏請に応じて京都に帰還したところ足利直義が五百騎を従えて出迎え、花山院の旧御所の建物の中へ幽閉した。そのあと、直義から神器を新帝光明天皇にお渡しあるようにとの使者が来た。後醍醐天皇はこれを承諾して、正式な授受の儀式は十一月二日に行われた。

花山院から神器が東寺の御所に渡御した日、光明天皇から後醍醐天皇に太上天皇の尊号を奉った。後醍醐天皇の退位と光明天皇の即位が正統な手続きで行われたことを天下に示したのである。

足利尊氏は十一月七日、十七カ条からなる「建武式目」を公布し、幕府を京都におくこ

とをあわせて宣言した。式目（法令）は八人の学識者に諮問し、その答申を受けて定めたもので、独断専行のものではなく、衆議によって決めるという尊氏の性格をよくあらわしている。

十一月十四日には、後醍醐天皇の皇子成良親王を皇太子に定め、後醍醐天皇と花山院で提案したとおり両統迭立の約束を実行しているのである。

ところが、十二月二十一日に後醍醐天皇は花山院から脱出した。刑部大輔景繁という楠木党と気脈を通じている公卿がただひとりで伺候して奏上、女官の姿に変装して脱出したのである。金枝玉葉の御身で、冒険をしてまでなぜ尊氏の手からのがれたのであろうか。「天皇親政」の執念を捨てることができず、凝り固った人間像というものをそこに見る思いがするのである。

吉野に着いた後醍醐天皇は、「足利直義に強要されて光明に渡した神器は偽物であって、本物は我が手中にある」と宣言し、改めて足利氏討伐の綸旨を諸国に発したのである。直義はただちに後醍醐上皇の捜索を命し、後醍醐上皇を廃帝と呼んだ。だが、尊氏は別にあ

わてる様子もなく、「天下の情勢は落ちつくところへ落ちつくものなり」といった態度であった。

問題は、ここに正統性を主張する二つの朝廷が並立して存在するという有史以来の一大異常時代がはじまったということである。それ以来二つの朝廷（後醍天皇の吉野朝廷を南朝といい、これに味方する者を宮方と呼び、光明天皇の京都の朝廷を北朝といい、これに味方する者を武家方といった）の争いは泥沼化し長期にわたって庶民を苦しめる結果となったのである。

吉野に着いた後醍醐天皇は吉水院にはいって行宮としたが、のちに金輪王寺実城院に落ちついたのである。吉水院はもともと金峰山寺の一僧房であったが、明治八年に神社に改め、祭神を後醍醐天皇とし、楠木正成を合祀している。書院は単層入母屋造りの板ぶきで、後醍醐天皇入御当時のものが残存している。桃山時代に豊臣秀吉が吉野桜の見物に来る直前に改築したもので、床の間、違い棚、御帳台、飾り金具などに桃山時代の様式を備えている。

なお、吉野に逃がれた後醍醐天皇が「光明天皇に渡した神器は偽物である」と宣言したことに対して疑問に思うことは、あの動乱時代のさ中、行在所を転々としていた後醍醐天皇が、神器と見まがうような偽物を製作するような機会があったのであろうか、後醍醐天皇が足利氏からの束縛から離れたので、あのような強がりを言ったのではあるまいかと疑わざるを得ないのである。

十二、固陋頑迷な北畠親房

北畠親房は万里小路宣房・吉田定房と共に「のちの三房（さんぼう）」と呼ばれた後醍醐天皇側近の公卿である。三十二歳の若さで正二位となり、後醍醐天皇の政治に参与する。また、同天皇の皇子・世良（ときよし）親王の養育を担当したが、元徳二年（一三三〇）に親王が若くして没したので、親房は剃髪して宗玄、または覚空と号していた。後醍醐天皇が隠岐から脱出すると

再び出仕し、親房と共に奥州にくだった長男は武士以上の豪勇と謳われた北畠顕家である。

親房も南朝を代表する公家であると同時にたいへん果敢な武将でもあった。後年、講和条件を無視して突然京都に攻めこんだことがある。親房は最右翼といってよいであろう。

天皇、公家、貴族だけが尊いのであって、卑しい武士が政治に口を出すことはもってのほかと考えていた。武士は朝廷のために命を捨てて奉仕するものと決めつけていたのである。ましてや、一般庶民は人間として扱っていない。朝廷を支えるため牛、馬のように働けばよいとしか思っていなかったのである。

建武の新政府での政策論議では「今までの制度を破壊して朝廷主導の政治にしよう」と提案したようで、側近の万里小路藤房は庶民感覚に富んでおり、武士の存在を重視していたので激しく対立した。

建武の新政が発足した当初、新政府の内部では意見が二つに分かれた。西園寺公宗（きんむね）の政府転覆事件がそれを物語っている。そのような混乱の中、万里小路藤房が突然姿をくらました。親房一脈に暗殺されたのではないだろうか、暗殺される恐れがあったので、下野国（しもつけのくに）

足利にある鑁阿寺にかくまわれたという言い伝えも残っているのである。

最終的には天皇親政の意見を持つ者が主導権を握るが、親房はかなりの強硬論者であったため護良親王と似ており新政内部からけむたがられた。北畠親房は突然奥州の統治を任ぜられ、義良（のりよし）親王を奉じて京を去ることになる。新政府の権力争いに敗れて左遷せられたのである。

ところが、建武の新政府が崩壊すると、親房は吉野の山奥へ後醍醐天皇を迎えて、足利尊氏に反抗した。しかし、足利方の勢いは強く、全く相手にならない。親房は関東に南朝の勢力を植えつけようと常陸国へ向かう。しかし間もなく後醍醐天皇の崩御を知る。

それから三年の間、南朝の正統性を主張し常陸の小田城で足利方の敵軍と対戦しながら、「童蒙に献上する」といって記述したのが、『神皇正統記』であった。童蒙というのは、幼くして道理のわからない子供を意味するが、実は南朝第二代の後村上天皇だったことをはばかって敢えて明記しなかったと伝えられている。

大日本は神国なり。天祖はじめて基をひらき日神ながく統を伝え給う。我国のみこの

事あり、異朝にはそのたぐいなし。これゆえに神国なりという。――

と、あまりにも有名な『神皇正統記』の冒頭である。

親房は『神皇正統記』を書きながら、関東で南朝勢力の拡大のために努力を続けたが、何の利益もないまま吉野に帰った。

南北両朝の和平へのチャンスが幾度となくあったのに、親房はそれを拒否し続けた。そしていたずらに戦いを続けたのである。楠木正行が高師直と四条畷で戦うことになったが、これぐらいバカげた戦いはなかったので、正行は「勝つ見込みのない戦いであるからいったん足利方に和睦をすべきである」と提案したが、親房は拒否した上に正行に対し、冷たく叱りつけるのである。そのとき、正行は南朝の抱えている矛盾に失望し、

南朝は天下万民のために戦っているのではない。親房の意地で戦いを続けているだけのことである。自分は正義のために戦うつもりであったのに――

と、若いが故に失意は大きく、四条畷に向かってあっけなく戦死してしまうのである。

このように北畠親房は無駄な戦いを続けて多くの尊い命を失わせたのである。彼には、

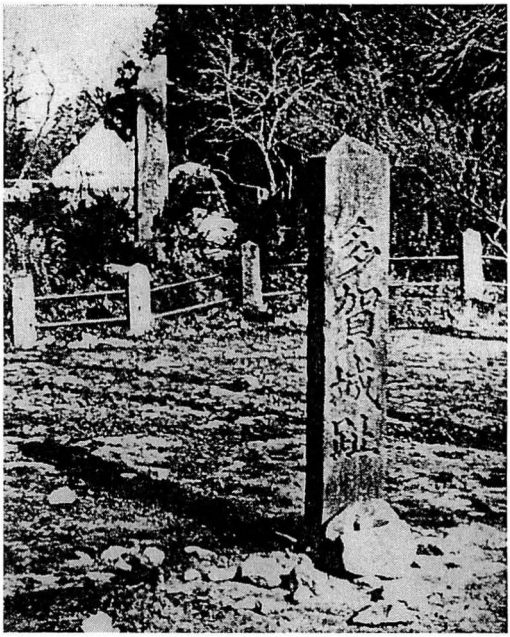
戦いの中で死んでいった者たちに申し訳ないと思う考えなどはみじんもなかったようである。

『神皇正統記』は当時の社会には何らの影響を与えていない。時代錯誤の思想であり、固定観念にとらわれたものであったから、当時の社会には到底受け入れられるものではなかった。それは北畠親房の冷たい人問性がにじみ出ていたからかも知れないのである。

『神皇正統記』は『大日本史』がこれを取り入れ、南朝を正統としていたが、有名になったのは幕末のころ江戸幕府を倒そうとする勤皇の志士が『神皇正統記』の精神を体し、明治維新においては政府が基礎固めの指導理念に利用したのである。

十三、北畠顕家の活躍と諫奏文

北畠顕家は南朝の柱石として活躍した公家北畠親房の長子として、文保二年（一三一八）



北畠親房・顕家の拠点となった多賀城跡（宮城県）

に生まれた。北畠家は代々大覚寺統の皇室に因縁が深く、その皇統の後醍醐天皇が皇位を継いだので、幼少の頃から幸運に恵まれ、十四歳で正四位参議中将という官職についた。

「建武の新政」がなると、顕家は十六歳の公卿の身でもって、六歳の義良（のりよし）親王（のちの後村上天皇）を奉じて陸奥（むつ）に赴き、多賀国府を拠点として、奥羽の統括に当ったのである。

父親房も同行して後ろ楯となっているとはいえ、顕家は学問・識見がすぐれ、のびやかな性格である反面、強靱さも兼ね備えていたといわれている。

元大納言の肩書をもつ父親房を、顕家の後見人として奥羽に送り出したのは、「建武の親政」に対して親房が批判的な態度をとったので、敬遠しようとした後醍醐天皇の思惑があったためといわれている。

多賀城に入った顕家は陸奥の鎮撫に力を入れ、国府の再建に力を尽していた。また、現地の豪族の登用には意を用い、結城宗広を重用し、奥州式評定衆に任じた。

「建武の新政」がうまくいかず、京都が騒然としているとき、多賀国府による陸奥の政治はみごとに進行していった。これは自分を巧妙に東北の地に追いやった後醍醐天皇に対する親房の意地と執念であったと見る歴史学者もいるのである。

「建武の新政」が失敗に終わると、北条高時の遺児時行が信濃で北条氏再興の兵を挙げた中先代の乱のとき足利尊氏は大軍を率いて時行軍を蹴散らして鎌倉に入った。後醍醐天皇は再三にわたって尊氏に帰京するよう命令を出したが従わず京都に帰らなかったので、顕家に尊氏討伐の命令を降した。

顕家は義良親王を奉じて大軍を南下させ、新田義貞と力を合わせて尊氏の軍を狭撃しつ

つ東海道を西上した。

顕家の軍は疾風迅雷の勢いで近江に達し、京都に入り尊氏の軍を駆逐するや、再び陸奥に帰って国府の整備に努め「陸奥の朝廷」と称されるまでになった。

ところが、京都では九州へ落ちて行った尊氏の軍が勢力を整えて東上を開始し湊川の合戦で楠木正成軍を敗死させ、京都に入ったので、幽閉されていた後醍醐天皇は花山院を脱出して吉野に逃がれて朝廷（南朝）を開いた。

延元元年（一三三六）、後醍醐天皇の綸旨が顕家のもとに届いた。「尊氏を討って京都を奪回せよ」との意図であった。

このとき、顕家のいる多賀城は尊氏に同調する豪族たちによって包囲されていたので、天皇の綸旨に対し、翌二年正月二十五日付をもって返書を送った。

勅書ならびに綸旨および貴礼、跪き拝見しおわんぬ。吉野に臨幸の事、天下の大慶、社稷安全の基、この事に候。すべからく馳せ参り候の処、当国騒乱の間、彼の余賊を対治せしめ、急ぎ参洛を企つべく候。去んぬる頃、新田右衛門督（義貞）申し送り候

の間、先んじて用意致し候わんぬ。而して今に延引本意を失い候。この間親王(良成)霊山(霊山成)にござ候。凶徒城を囲み候の間、近日合戦を遂ぐべき候なり。下国のち日夜濤策をめぐらすほかなく候。心労賢察有るべく恐鬱の処、御礼をひらき、鬱蒙を散じ候。且つは綸言到来ののち諸人勇を成し候。毎時上洛の時を期し候……。

と、顕家は天皇の心中を深く推察し、一日も早く上洛したいが、みちのくでも北朝方の武士が増加し、今合戦の準備中だと伝えたのである。

そのころ、平城(ひらじょう)の多賀国府では守り切れないと考えた顕家は霊山城に移って勢力の挽回を図ろうとしていたのである。

延元二年(一三三七)八月十一日、顕家は義良親王を奉じ霊山城を出発した。綸旨を受けてから八ケ月後になる。奥州、坂東諸国に決意を披瀝して使者を走らせ堂々の出陣である。結城宗広、伊達行朝、南部師行、政長、葛西清貞、下山修理、武石高広ら諸豪族が精兵を集めてこれに従い、奥州の宮方軍の武威を輝かした。

八月二十二日、下野の結城、寒河両郡の敵の陣地を奪い破竹の進撃を続け、十二月八日

には小山城を攻略し、十三日には利根川の大会戦で上杉憲顕、細川和氏、高重茂らを破り、十六日には武蔵の安保原へと怒濤の進撃を続けた。

正月十二日、遠州の橋本に到着すると宗良親王が井伊道政の兵に守られて駆けつけ、感激の対面をした。『太平記』によると、途中、略奪や暴行が繰り返し行われたとある。

顕家軍は正月二十八日、美濃国青野原で高師直軍と激突した。戦闘は一応顕家軍の勝利であった。敗北した足利軍は近江・美濃付近で顕家軍を迎え討とうとしていたが、なぜか顕家は足利軍との対決をさけて伊勢に向かったのである。

その理由について『太平記』は、「新田義貞の軍と合流して京都を討てば、義貞に功を奪われるため」としているが、真実のほどは誰も知ることはできない。

伊勢から奈良に攻め入ろうとする顕家の戦法を見ぬいた高師直は、桃井忠常・直信の軍を奈良に派遣し、般若坂で顕家軍を邀撃した。顕家の軍は長旅の疲れがあったためであろう、もろくも破れて軍はちりぢりばらばらになった。義良親王を吉野に送ったのち、顕家は態勢を立て直し、三月八日、天王寺で細川顕氏軍を撃破した。高師直軍は和泉国石津の

宮に陣をとった。顕家軍は石津川に近い坂本郷の観音寺に城塞を築いて拠点として対決姿勢を強めた。決戦を七日後にひかえた五月十五日、顕家は後醍醐天皇に対し諫奏文を奉呈した。

死に臨んでの悲痛な信念と、思いつめた烈々たる憂国の大文章であって、現在、京都伏見の醍醐寺三宝院文書として、その一部が伝えられている。原文は漢文の格式の高い美しい文章といわれている。

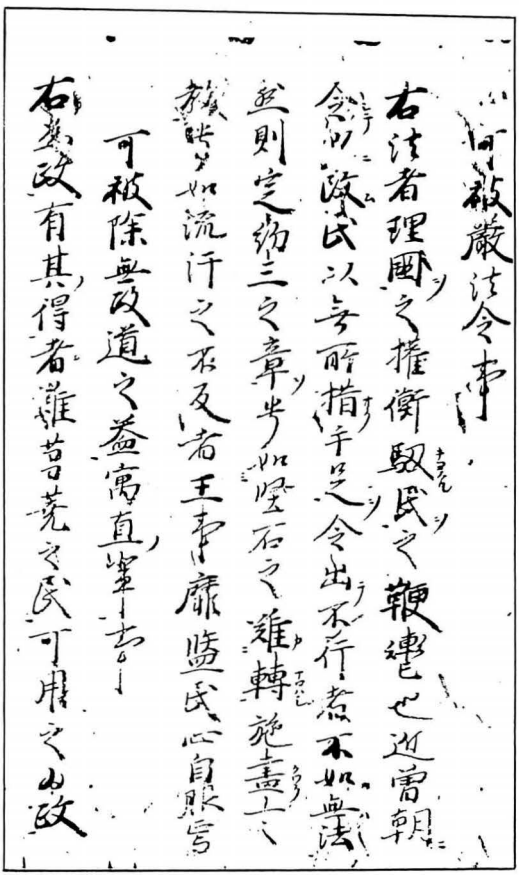
惜しいことに顕家自筆の原本（草案）は焼失したもののようで、現存のものは写本であり一カ条の巻頭は欠損しているといわれている。その内容を現代文風に翻訳して要点を紹介しておこう。

① 人民を愛し人民の肩を憩わしめること。

② 宮殿などを造らず、一切の奢侈を断つこと。

③ 宴飲を慎み遊幸を堅くやめること。

④ 婦人や僧などに政治に対し喙（くちばし）を入れさせぬこと。



可被厳法令事

右法者理国之権衡致民之鞭轡也近曾朝
令所改民以妄所措手足之令出不行者不如無法
並則定物三之章半如堅石之難轉施畫一
教如流汗之石及者王事廉監民心自服号
可被除無改道之益寓直掌士
右熟政有其得者雖昔荒之民可用之政

北畠顕家の諫奏書（一部分）

⑤　賞を正しくし、罰を明らかにすること。

これ臣が鎮に在る日、耳に聞きて心痛む所なり。陛下諫に従わざれば、泰平期するなし。もし諫に従わば清粛あるものか。小臣もと書巻を執り軍旅の事を知らず。再び大軍

を挙げて命を鴻毛に斉うし、幾か戦を挑みて身を虎口に脱す。私を忘れ君を思い悪を却けて正に帰すの故なり。

もし、先非を改めず太平致し難くば符飾を辞して范蠡の跡を追い山林に入りて以って伯夷の行を学ばん。

と述べている。

ここまで述べるのは、よくよくのことであろう。二十一歳の青年公卿が、堂々たる見識を吐露しているのは、死を決した者でなければ言えることではない。顕家の国事に対する遺言ともいうべきもので、さすがに顕家は麒麟児であったといえるのである。

その七日後に、高師直の率いる大軍と石津で戦って戦死した。顕家の死は吉野朝廷に大きな衝撃を与えた。後醍醐天皇は従一位右大臣を追贈して、その労をねぎらったのである。

父親房は「忠孝の道ここにきわまりはべりき」と、顕家の戦死を『神皇正統記』に書き留めているのである。

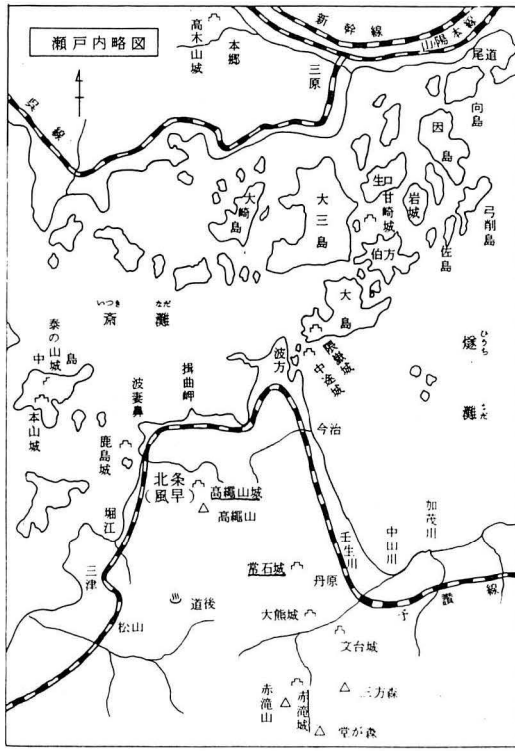
十四、南朝と伊予水軍の活躍

南北朝時代における伊予の忽那水軍は、南朝方にとっては有力な軍事力であった。瀬戸内海の制海権を握っていた忽那氏は、吉野―熊野―瀬戸内海―九州を結ぶ海上交通の要衝忽那島に在った。懐良親王が征西将軍として九州に下向するときに、長い海上移動の護衛の任を果たしたことはよく知られているところである。

忽那諸島は伊予灘と安芸灘・斎灘を分つ防予諸島の一部で、忽那七島と呼んでいた。往古は骨奈島または忽那島といわれた今の中島本島を中心にして、野忽那・睦月・怒和・二神・津和地・柱の七島から成っている。

この地域は潮流が複雑で、船を巻き込むような激流に出合うことさえあるので、潮流をよく知っている者でなければ、安全な航行は無理であったから、警固料を払ってでも海上

の案内をしてもらったのである。これが通行税ともいうべきもので、これを徴集して生計を立てていた者たちを海賊衆と呼んでいた。忽那衆が、この海峡を塞ぐと、たちまち瀬戸内海の東西交通の海上動脈が絶たれてしまうという存在となっていたのである。



12

忽那七島の開発領主であった忽那氏が、歴史の上に現れてくるのは十二世紀になってからである。その出自は、『忽那島開発記』および『忽那氏系図』によると、応徳元年（一〇八四）に藤原道長の末裔親賢が、京都を追われて島流しになりこの島に渡って忽那氏を称したに始まるとされている。その親賢は忽那島に長隆寺を建立し、本島の大浦、長師（ながし）、神浦（こうのうら）・熊田（くまた）・吉木（よしき）などの地域を開発して領主となったという。即ち『忽那島開発記』には

（前略）右大臣藤原親賢朝臣（中略）因二讒奏一、応徳元甲子夏四月、所二遠流、其砌於二此島一維レ艫跳レ陸、幽谷風景、（中略）其時於二山中一、一點光明輝輝、映二親賢一、仍就二于彼光一而尋覚、掃二一推濕葉一、設二千手観音全像一、因於二此島一、住縁純熟、義了得レ為二開発領主一、称二忽那一、（中略）建二立一宇梵殺長隆寺一、奉二安彼尊像一、（以下略）

とある。しかし、系図として信憑性の高い『尊卑分脈』には能信の子に隆賢あるいは親賢という人物を見出すことはできないのである。また、『忽那氏系図』には、

道長―能信―親賢―親朝―親則―俊平―兼平―国重―重俊（以下略）

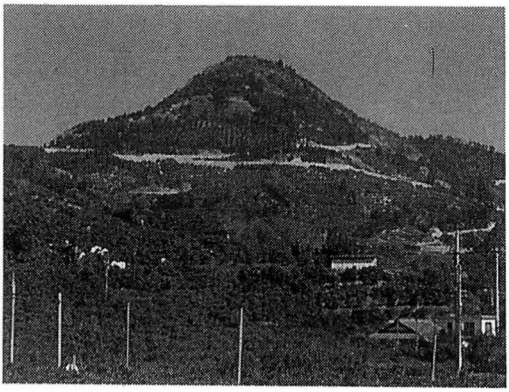
とある。

『忽那嶋相伝之証文』では親賢の曽孫と伝えられる俊平も忽那氏を称したという確証はなく、俊平から三代のちの重俊に至って始めて忽那姓を名乗っているようである。

それはともかくとして、忽那島こと現在の中島町は中世から近代にかけての史料の宝庫といっても過言ではなく、今後の研究の深まりによって新しい史実の発見も考えられるのである。

『忽那島開発記』および『忽那氏系図』によると、後白河法皇が長講堂を創建されたとき、俊平は寿永元年（一一八二）に、造営の費用として米麦二百斛を寄進したのがきっかけとなって、忽那島は長講堂領となり、院の保護を受けながら地頭として実質的に経営に当っていたのである。

朝廷との結びつきはあったが、鎌倉幕府の御家人武士団とは系譜を異にし、独立独歩の



泰の山城跡（中島町畑里）

文治5年(1189)忽那兼平築城は
忽那水軍の拠城であった

立場をとっていた。そのような関係で後醍醐天皇の討幕計画が露見し、笠置に立て籠ったとき、河内国悪党の楠梁楠木正成は金剛山で蜂起し、護良親王が吉野に楯籠って討幕の令旨を全国の諸豪族に発したとき、忽那氏は朝廷側に味方して幕府打倒の戦陣に加ったとの説がある。

しかし、忽那氏は護良親王が令旨を発する以前に府中合戦（元弘三年）・根来山の戦い（同年）に参加している史的徴証があるので、挙兵は元弘三年（一三三三）ころと考えられるのである。

これに対抗して武家方は、高縄城の河野通盛、砥部庄大森盛長（彦七）、越智郡府中城の伊予の守護宇都宮貞宗、周桑郡赤滝城の大森長春、喜多郡根来山城の宇都宮貞泰らが立

ちあがった。

忽那重清らは挙兵の準備が完了すると、一族を率いて喜多郡に入り、宇都宮貞泰を攻撃した。この方面に勢力を張っていた土居氏もこれに加勢したであろうが史料は見当らないようである。

博多に設置していた鎮西探題と長府の長門探題の出方が注目されていたが、伊予における反幕府軍の蜂起に驚き、一挙に撃破しようと伊予に侵入してきた。

伊予の反幕府軍は府中城を占領することを急務として、忽那重清のほか土居通増・祝安親らがこの戦いに参加し陥落させた。

いっぽう北条時直は探題の兵を率いて、石井浜（越智郡波方町）に上陸しようとしたが通増・安親らの軍に破れ敗走した。

府中・石井の浜の合戦が終わると、忽那重清は義範とともに喜多郡に入り、土居・得能・祝氏らの軍と協力して、再び宇都宮貞泰を根来城に撃破した。反幕府軍は勝利をおさめ幕府軍の根拠地を占拠したのである。

長門探題の北条時直は、伊予の反幕府軍を潰滅させようと、土居氏の本拠を突くため水居津に上陸し、星ノ岡を占領する勢いであった。『楠木合戦注文』などによると、戦場は平井周辺まで広がったようである。

俗書にいう「徳威原合戦」とは即ちこの周辺の戦いであったらしく、この付近一帯は荒野になってしまったと伝えられている。

激戦が長く続いた末、連合軍の精鋭のため時直軍は多数の死傷者や馬鞍、兵糧米などをすて置いたまま逃走したのである。

伊予における幕府軍の惨敗はついに武家政治の権威を失墜することになり、瀬戸内海沿岸には王政復古の気運をつくり、さらに中央における宮方軍の形勢を好転させるうえに大きな効果をもたらした。

このように社会的に不安定な状勢のなかで北条氏の残党が、陸奥・出羽・豊前・筑前の各地域で蜂起した。

建武二年（一三三五）二月、北条氏の与党であった赤橋重時（守時の子）は烏帽子山城

に、野本貞政・河野通任（通盛の兄通種の子）らは越智郡府中城に兵を挙げて、新政府に反抗した。

このとき、土居・得能両氏は協力して烏帽子山城を攻撃して重時をたおした。忽那氏は得能・祝氏らと赤滝城を攻撃すること二カ月に及んで、やっとこれを陥れた。建武二年（一三三五）七月になると、中先代の乱が起きた。鎌倉を守っていた足利直義は三河国矢矧に敗走するという大軍の襲来を受けた。急報に接した尊氏は弟を援助するのを名目に関東に下り、時行の軍を追い払って鎌倉を占領、天皇の召還の命に従わず、十一月義貞追討を名目に同志を糾合して建武新政府に反旗を翻えした。

朝廷では、義貞らに命じて東海・東山の両道から尊氏・直義兄弟を征討させた。このとき、忽那重清は上洛していたので、洞院実世の配下に属して東山道に進んだ。重清の軍は東進して信濃国に入り、大井庄で小笠原信濃（しなの）前司・村上源蔵人らの大軍を破った。重清の奪戦した様子が『忽那重清軍忠状』に明記されている。

伊予国忽那嶋東浦地頭弥次郎重清致軍忠子細事

右尊氏直義為誅罰、自京都発向山道之処、小笠原信濃前司、村上源蔵人以下凶徒等為朝敵人之間、被誅伐之刻、去廿三日於信州大井庄致合戦了（中略）者、不及子細、所詮被成下御判、為備弓箭之面目、言上如件

建武二年極月廿五日

この当時の伊予国は、宮方では忽那義範をはじめ土居通世・重見通宗らがあって、相当の勢いであった。これに対し尊氏に呼応して活動していたのは、河野通盛とその与党大森盛直らであって、両軍の間では絶え間なく戦闘が続いていた。

そのうち活躍の顕著であったのが忽那氏であって、会原城の討伐に従事し、義範か重勝が忽那一族を率いたものとされている。

延元元年（一三三六）五月、宮方軍は尊氏直義軍に包囲され、楠木正成は湊川の戦いで自刃し、義貞は京都を放棄し、後醍醐天皇は同年十二月吉野に逃がれた。この間に、忽那

重清は尊氏側に呼応した。尊氏が京都に入った際、重清は尊氏のために武家方の部将として活躍して功労のあったことが『重清軍忠状』に見えている。

建武三年五月以後、忽那氏の勢力は重清が武家方になったため吉野朝側の義範方とに二分されることになった。伊予国では宮方の勢力が強大であったから、常に河野通盛を援助

神浦館跡の忽那義範公表忠碑
（懐良親王をかくまった史実が記されてある）

して宮方打倒の計画をすすめた。そこで尊氏は一族の吉良貞義を遣わして、まず問題の忽那島を管理させることにした。貞義は代官を派遣して、この島を経営しようとしたが、義範は土居通世の協力を得て延元二年（一三三七）三月に、彼らをこの島から放逐することに成功した。

これより先、尊氏は伊予の宮方の活動を威圧するために、讃岐国の武家方の細川皇海に命じて出征させた。この時河野通盛の部下が細川氏の軍を援助した。

忽那義範は宮方の土居通重の協力を得て、細川・河野両氏の連合軍を和気郡和気浜に撃破した。忽那氏は土居通世とともに河野氏の与党のたてこもった下浮穴郡の井門城を攻撃し、また土居通重の軍とともに大森春直のよった久米郡の高井城を攻略した。さらに、河野通盛の軍と再び和気浜で戦い、進んで越智郡宮山城および西条北面の武家方を討ち平げたのである。同年九月に播磨塚、および左河（さこ）河原等に河野氏の与党と戦った。

重清逝去後、忽那七島全域を支配したのは義範で、忽那家の惣領職は重清の子重勝に継承されたようであるが、真の実力者は義範であったといえそうである。

十五、長慶天皇と伊予の武将

長慶天皇の在位については、近世に至るまで不明であった。肝心な『皇統譜』にもその名が記載されておらず、江戸時代より学者間で在位説と非在位説が戦わされていた謎多き天皇であった。

ところが、八代国治博士が大正九年（一九二〇）に『長慶天皇御即位の研究』を著わして在位説を立証したので、これが認められることになり、六年後の大正十五年（一九二六）に詔勅によって始めて第九十八代の天皇として皇統に加列されたのである。

そのような経緯がある天皇だけに、生涯の動静については不明な点が多いので、その間隙につけ込んで好事家たちが虚構の歴史を作り上げたので混迷している。長慶天皇の真実の歴史を知るには確実な史料によって研究するのでなければ過ちを犯す結果になりかねな

いるのである。

一天万乗の大君である天皇の動静が不明であるということは、戦前に強調された金甌無欠の国体とは言えないであろう。天皇をめぐる当時の環境がいかに悲惨な状況にあったかという証しである。

吉川公文館が発行している最新の『国史大辞典』（全十四巻）には、

後村上天皇の皇子で興国四年（一三四三）に生まれ、名を寛成といい、晩年に出家して覚理と号したらしく、同天皇の称号長慶院は禅宗寺院の一坊である長慶院に住したことに基づくものであると考えられる。また、同天皇を慶寿院と称したことは確実であるが、これは同天皇が崩御せられた後、皇子の海門承朝によって菩提供養のためにつくられた寺院名による称号と解すべきである。

と述べているのである。

正平二十三年（一三六八）春の頃には、既に在位していた事実が認められているので、長慶天皇が践祚した当初は、摂津国住吉の行宮にいたが間もなく大和国吉野に、ついで河

内国天野の金剛寺に移り、天授五年（一三七九）の頃には大和国栄山寺に移っているのである。

これより先の天授元年（一三七五）八月十五日に、伊予国の河野通直（通堯）が刑部大輔に昇進し、伊予国守護に任じられて周防国の大内弘世の討伐を命じられていることが、『築山本河野家譜』に記載されている。即ち、

上卿右衛督
天授元年八月十十五日　宣旨
治部少輔　越智　通直
宣任刑部大輔
蔵人頭左中弁平時熙奉

伊予国守護職可令管領者天気如此悉之以状

天授元年八月十五日　左中弁

河野刑部大輔館

周防国事相語便宜輩可令運籌策者天気如此悉之以状

天授元年八月十五日　左中□

河野刑部大輔館

というものである。

正平二十三年（一三六八）三月十一日、後村上天皇のあとを受け継いで帝位についた長慶天皇は、二十歳代の半ばと思われるので、意気盛んな青年期である上に、祖父後醍醐天

皇の性格を受け継いだところがあって、徹底した武家方に対する強硬派であったようである。側近には北畠親房の三男顕能と四条隆俊の強硬派がついて補佐していたのである。

だが、南朝側の人たちすべてのものが抗戦派一辺倒ということではなかった。後醍醐天皇が討幕を計画してから既に四十数年を経過しており、その長い期間戦いに明け戦いに暮れた毎日、なんの成果も上がらず、血を流し命を失った武士や巻きぞえに苦しみの日々を送っている庶民のことを考えると、一日も早く平和な日を迎えることを願うのは当然のことであろう。武士や悪党たちは長い戦いに飽きて軍紀も乱れがちになっていたに違いあるまい。

ところが、抗戦派の長慶天皇が即位すると、強硬路線に力を注ぎ、内部分裂を防ぐことにしたので、従来の和平派楠木正儀は孤立するようになった。

この様子をじっと見ていた幕府の管領細川頼之は正儀に幕府側に来るよう誘いをかけた。正儀はかねてより細川頼之の人物に惚れ込んでいたので、細川の要請を受け入れて幕府方に移ったのである。

このことを知った南朝方のショックは大きかった。楠木正成の三男正儀の転向であるから驚いたのも無理からぬことであった。

激怒した長慶天皇は、ただちに正儀追討の勅命を下すとともに天皇自ら天野の行宮まで出向いて直接督励したほどであった。

史学者の中には、「正儀は細川頼之の人物が大きいことに惚れ込み、膠着状態に陥っている南北両朝の和平について新しい道を拓こうとした深慮があってのことである。のちに、南朝に帰順していることによって、その真意を知るべきである」と述べているのである。

いつ終るとも目処もなく泥沼化した南北両朝の戦いは、今は意地の張り合いだけで続けているというバカげたものになってしまったので、チャンスがあれば和平にもって行きたいと考えているのが南北両朝のいずれも共通した願望であったに違いあるまい。

楠木正儀が惚れこんだという細川頼之は、貞治六年（一三六七）に将軍足利義詮に認められ、その遺命によって室町幕府の管領に抜擢された人物である。

頼之は幼少の将軍義満の補佐をして幕政に大きく貢献し、後には幕政を左右するまでに

権力の行使を強行したので守護大名たちの反目をかうようになった。遂には将軍義満にも忌み嫌われることになり、康暦元年（一三七九）に管領を辞任して讃岐国に帰って剃髪して常久と称して政治の世界から遠ざかっていた。

ところが明徳元年（一三九〇）に備後国が乱れたとき、将軍義満は頼之を備後の守護に任じて、その国を平定させ、翌年再び京都に召して幕政に関与させ厚く信任したのである。

正儀が頼之に心を寄せただけの大人物であることは、一時的なトラブルがあったとしても、その力量は政治の上に生かされていったことでわかるであろう。

さて、その後は一時的に南朝方は畿内において勢力を盛り返したかに見えたが、文中二年（一三七三）八月、楠木正儀の誘導によって細川氏春、赤松範資らの幕府軍が天野行宮に夜襲をかけた。激しい乱戦の末、南朝方抗戦のリーダー四条隆俊ら多くが戦死したので、長慶天皇は神器を奉じて脱出したが、『大日本史』は「吉野に逃がれた後、玉川の宮に移った」としており、『吉野考纂』と『南山皇胤譜』は「高野山に入った」と述べて相違している。しかし、いずれも当時の一等史料ではなく、ずっと後世に編纂したものであるか

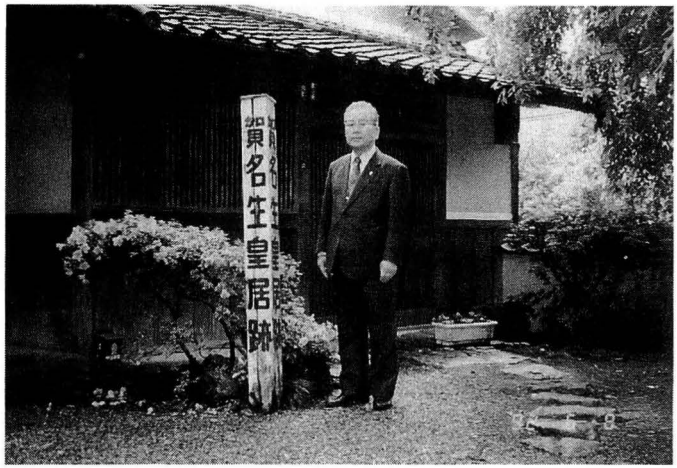
ら、どちらが正しいと決定することは無理であろう。今後の研究によって確かな史料の発掘により決めなければならないところである。

弘和三年（一三八三）末から翌元中元年閏九月までの間において長慶天皇は弟凞成（ひろなり）親王に譲位している。即ち後亀山天皇の践祚が行われたのであるが、即位の式を挙げたか否かは不明である。

同年三月二十七日、懐良（かねよし）親王が筑後国矢部で薨じた。懐良親王は忽那島（現中島町神浦（こうのうら））に三年間滞在せられたといわれている。時期については、延元二年説と同四年説がある。延元二年説は『阿蘇文書（もんじょ）』によるものであり、四年説は『忽那文書』によるものである。

なお、正平二十四年（一三六九）十二月に、良成（よしなり）親王を伊予の河野通直のもとに遣わして四国、瀬戸内の鎮撫を企図している。同年七月には親房の三男北畠顕能が没した。顕能は親房の死後、賀名生（あのう）の行宮に出仕し、南朝内において抗戦論を強く主張していたのである。

このように、南朝における重要な人物が死没したので勢力は衰退の一途をたどらざるを



賀名生皇居跡

得なかった。延臣の中には一日も早く和平を実現させねばならないと考える者が次弟に多数を占めるようになってきた。

「長慶天皇はこの様子を見て、譲位もやむを得ないと思うようになったのであろう。」と日本中世史の研究者、国学院大学の中野達平講師は述べている。

しかし、長慶天皇は上皇になってからも、徹底抗戦を強く主張し続けたようである。現在は『高野山文書』となり国宝に指定されている元中二年（一二八五）九月十日付の紀伊国丹生明神に奉った願文に、「今度之雌雄如思者殊可致報賽之誠状如件」とあるので、長

慶天皇と後亀山天皇の「抗戦か和平か」の雌雄を争っての願文であるという説と、南朝が北朝と対決して勝利を得る願文であるとする二つの説がある。

とはいえ、両天皇の間に武力によるべきか和平を求めるべきかという路戦上の対立があったことは確かなようである。

さて、この当時における伊予国の状況はどうであったか。『予章記』および『予陽河野家譜』によると、懐良親王が九州に移ったあと、宮方の総師として伊予に入国した新田義貞の弟脇屋義助は病死したので事態は一変したのである。

阿波国の細川頼春は阿讃の武士を率いて東予に攻め込んできた。守護大館氏明の拠る世田山城を陥れ氏明を戦死させた。以後、宮方の勢力は衰えを見せるばかりとなった。

いっぽう武家方の陣営には、内部抗争が複雑な様相を見せるようになる。河野通盛の子通朝（みちとも）と孫通堯（みちたか）は武家方にあったが、伊予平定を企てて侵入してきた讃岐の細川氏との間に紛争が起こり、通堯は道後湯築城を攻略せられたので、一時宮方の九州征西府に帰順し、名を通直と改めた。

通直（通堯）は征西府から、本領ならびに惣領職安堵の綸旨を賜り、伊予国守護職に補任せられた。細川氏に攻撃されたことによって宮方に走った通直（通堯）は、やがて伊予国に帰り、武家方の府中城をぬいて、応安二年（一三六九）には新居郡高外木（たかとぎ）城で細川軍を破り、一時宮方軍の勢いは盛んになったが、応安四年、今川貞世が九州探題となってから西国の宮方軍はふるわなくなり、通直（通堯）はこの形勢をみて、将軍義満に降った。康暦元年（一三七九）には、将軍から伊予国守護に任じられた。だが、細川氏討伐を命ぜられた。そのため、伊予に侵入してきた讃岐勢と戦うことになった。

通直（通堯）のもとへ、宇摩・新居方面が細川軍に占領せられたという知らせが飛び込んできたので、通直（通堯）は手元の精兵をさいて援軍を送ったところ、細川頼之は佐志久原の本陣が手薄になっていることを察知して、総攻撃をかけてきた。優勢な細川軍の前に惨敗し、河野通直（通堯）と援助に参陣していた西園寺公俊は自刃した。

西園寺公俊は東宇和郡松葉城主で、西園寺公経（公家、西園寺家の祖）の子実氏から六世の子孫で、河野通朝の女（むすめ）を妻としていたのである。

将軍義満はこれを憐んで、翌年（一三八〇）二月十二日、通直（通堯）の忠節を賞賛し、その子亀王丸を元服させて通義と名を改めさせ、伊予国の守護に任じ、本知行を安堵したのである。さらに、十二月二十九日に、細川頼之に対し、河野氏の所領を侵さぬよう注意を与えている。

弘和元年（一三八一）十一月、通義の弟鬼王丸が細川氏と和気郡福角で会見し、和議を整えることができた。ここで河野氏はようやく安泰の時期を迎えることができ、元中五年（一三八八）には将軍義満に謁見が許されたのである。

ここに至って、伊予の武家方の勢力は優勢になったが、それに反して宮方の勢力は影を潜めてしまったのである。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

長慶天皇の伊予入国説については、『鳳闕嵐史』に、

（略）文中二年伊予国にては得能家嫡なる河野伊予守通定同兵庫介通範の父子覚理法皇を守護して此国の山中奈良原の宮に潜匿し次で久米郡山内の御所に黒木の宮を造り

て移し奉る。かくて翌文中三年正月には温泉郡湯の山の北、多幸山天徳寺に又安養寺に浮島の宮久万菅生山大宝寺の理覚院に入り給ふ。此年義満九州征討に進発す。伊予には武田小笠原の兵打向ふ。天徳寺安養寺を焼き征南の宮得能通資楠次郎左衛門尉正盛太田三郎左衛門入道延貞等廿八人戦死す。徳威原激戦の時法皇負傷同十二日法水院に崩御浮島原に葬る。今の御陵松是なり。

とあるのを根拠として、御陵墓の認定を明治四十一年に宮内者へ申請書を出したが認められなかったという経緯がある。

さらに、この『鳳闕嵐史』は俗書または偽書といわれて現在では史家のかえり見ないもので信憑性がないものである。

私は県内の長慶天皇御陵伝説地の著名なところを訪ねてみた。上浮穴郡直瀬の長慶帝陵、奈良原山の伝説地などである。さらに足を伸ばして徳島県の四国霊場第三番金泉寺、和歌山県十津川村の河津平の国王神社と首塚、青森県三戸郡名久井の長谷寺及び泉山、中津軽郡相馬村紙漉沢陵、南津軽軍浪岡町の天が岱などである。

この中で紙漉沢陵は明治二十一年に「御陵墓伝説参考地」に指定されていたところである。

さらに、和歌山県伊都郡九度山町の「長慶天皇御陵参考地」の遺跡を訪ねた。長慶天皇は譲位後数年は院政を執られたが、政治の第一戦を離れて法皇になられてからは、安住の地を玉川の宮に定められたのは至極当然のことであろう。

九度山町教育委員と連絡をとって本格的調査を行うことができたのは幸いであった。和歌山県伊都郡の丹生川が高野山の北麓を巡って流れている渓谷玉川峡にある。現在、この地域一帯は和歌山県の名勝地に指定されている約十二キロの渓谷で、夏はホタルや鮎の名所となり、ツツジやサツキが美しく色どり、欧穴、犬戻（いぬもどり）、仙人淵、猿飛などの景勝地が続いているところである。

その上流に「御陵橋」と名付けられている朱塗りの釣橋がある。その橋を渡ると、そそり立った小山があり、その頂上に明治二十一年以来宮内省の管理下に置かれ、白い手袋をした陵守が護衛していた『御陵参考地』がある。ところが紀元二千六百年事業として確証

玉川峡にかかった御陵橋

南朝玉川宮伝承地
長慶天皇元御陵参考地
（明治21年～昭和19年　宮内省指定）
現在　九度山町教育委員会　文化財指定

がないまま、宮内省は京都に長慶天皇陵を決定してしまったので、今までの「長慶天皇御陵参考地」は指定を解除されることになったのである。

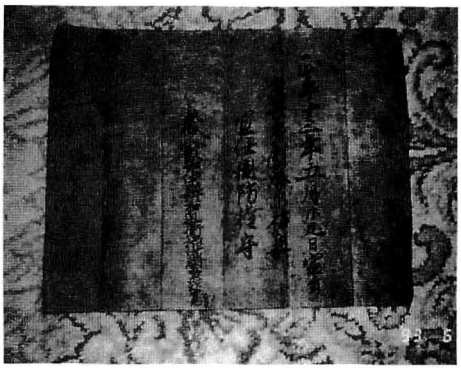
最も真実性の高い九度山町の御陵参考地であった遺蹟を、九度山町においては、その国有地の払い下げを願い「長慶天皇御陵参考地遺跡」として管理することにしているのである。

さらに、昭和五十六年に五輪一基、宝篋印塔一基、観阿弥尼公墓地及び玉川の宮、明野庵跡を「南朝玉川宮伝承地」として文化財として指定し保存に努めているのである。

私は九度山町教育委員会の堀重美先生の格別の御厚意によって、当時長慶天皇扈従の臣藤原祐興の子孫が秘蔵している宣旨や天皇の御宸筆、系図その他の古文書を拝見させていただき、真実の歴史の重みというものをひしひしと感じ取ることができたのである。その宣旨は、

正平十三年五月廿九日宣旨

右兵衛尉藤原祐興
宣任周防守
蔵人頭左中弁右近衛権中将藤原実篤奉



長慶天皇扈従の臣
藤原祐興に対する宣旨(子孫所蔵)

というものである。

長慶天皇扈従の臣は藤原祐興の外に、左兵衛尉藤原国朝、木工助源清貞、左兵衛尉小松忠篤の三名がおり、その子孫たちも現在に至っており「宣旨」を大切に保存しているということである。

『九度山町史』によると、興国三年(一三四二)が後醍醐天皇の三回忌に当るので、明野宮観阿弥尼公が高野山に参詣しようとして相の浦にたどり着いたとき、南院の弘助法師が「山上は女人禁制である

から丹生玉川に行かれるように」と申し上げたところ、郷士刀弥家、丹生明神の神官、円通寺の住職らが亀石のほとりに草庵を建てて迎え入れたという。これを明野庵といい尼公は持参した十一面観音像を安置して祈りの日々を過されたのである。

長慶天皇は文中二年（一三七二）に河内の天野行宮が襲撃されたとき、この玉川の宮に逃がれ、天授四年（一三七八）高野山に登り南院の弘助法師について仏道を修業され、丹生川へ下り、坂の宮居を造った。多摩淵の東六十メートルあたりに下屋敷というところがあるのがそれだと伝えている。

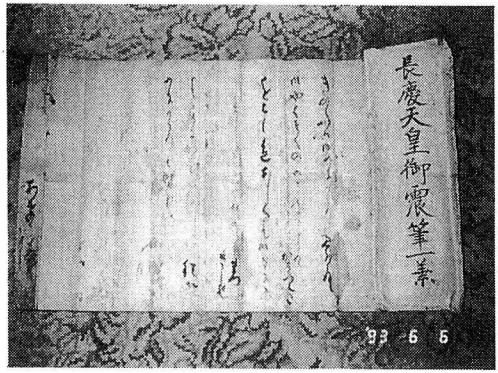
当時、長慶天皇が尼公に送った御書が現在明野庵に保存されているのである。その文面は、

きのうは御目にかかり過分に存じ候御やくそくの御経十巻かきつづり進上候、色あしくして御気に入りまじきやと存じ候へども、まづきうせ進上候、御目にかゝり候時分申候

あけのゝ宮さま　　寛成かしこ

となっている。

天授五年（一三七九）七月二十三日に尼公が亡くなられたので、中井平の玉山に埋葬した。その後、明野庵に長慶天皇が移り住み「玉川の宮」と呼ぶようになったといわれている。



長慶天皇が伯母君惟子内親王に送られた御宸筆
（後醍醐天皇の皇女＝明野宮観阿弥尼公）

『高野春秋』巻一によると、長慶天皇は元中七年（一三九〇）に崩御されたように見せかけるため玉山の尼公の墓地の北側に葬ったように装い、幕府方の目を欺いて、玉川の宮で余生を送られ、応永二十一年（一四一四）に崩御されたとしている。

しかし、実際は元中七年に長慶法皇は崩御されたが、抗戦派の士気に影響があってはならないと崩御を隠すためにとった処置とみるのが妥当のようである。

由良哲次博士は

玉川の宮の五輪塔の刻字は「元中九年十月五日、井本重村建之」と読めるとし、明治十年丹生川村長大屋助五郎の家から発見された「寛成法皇第三回忌土砂加持入用控」にも石塔料が記入してあり、寛成法皇の崩御は元中七年十月五日と認めねばならぬ。

小川一敏が拠った元中七年とする文献と、五輪塔の刻文と大屋家の控書が一致するので、史学的見地からも考慮するところがある。

と述べているのである。

私は今回の現地調査によって、当時のことを無言で語っている遺跡や遺品、多数の史料に接して、長慶天皇終焉の地は、この玉川の宮であろうという感をいっそう深くしたのである。

長慶天皇が後亀山天皇に譲位し、政治の第一線から引退して法皇となられたのは、側近で片腕とも思っていた抗戦派のリーダー四条隆俊が戦死して以来、南朝の士気はあがらず、それに反して幕府の勢力はますます強大となってきたので、後醍醐天皇が執念とまで願っ

ていた天皇親政の時代が再来することはないものと諦めて、この玉川渓谷の奥地に身分をいつわって、ひっそりと余生を送られたので、扈従の臣だけが窃かに言い伝えただけで、記録らしい記録は残らなかったのであろう。

天授四年（一三七八）足利義満は京都の室町に「花の御所」を造営し、そこに移って天皇になったような気分に浸っていた。幕府の勢力は絶大なものとなっており、天授五年九月には、伊予の河野通直に対し細川頼之の討伐を命じている状態であるから、伊予は既に武家方の勢力圏となっているのである。

このようなときに、政権を離れている覚理法皇（長慶天皇）が伊予に潜幸する意味はあり得ないことである。

藤原祐興は長慶天皇扈従の臣の筆頭であるが、その子孫が所蔵している書類に、

大君之御事、将軍家ヨリ尋ネ来り候トモ決シテ不可語、若シ御塚ヲ犯ス者有之ハ投身命早速可討果、不守之者ハ大不忠ノ至也。子孫代々朝塚之霊山可尊敬事相伝ヘヨ。大君ノ御霊魂亀石ノ上ニ小社ヲ造リ辨財天ト号シテ可為拝処者也。

干時延徳二年正月十一日記之

とある。長慶天皇の動静が不明になってから約百年後においても身分を隠していたということは、後南朝の遺臣たちの反乱があちこちで起こっていたので、南朝系の遺臣や関係者に対する詮議は厳しかったのであろうと推測されるのである。

十六、南北両朝合一と後南朝

後村上天皇の晩年には、南北両朝の合一の和議がかなりはかどっていたようである。南朝側からは楠木正儀（まさのり）が代表となり、北朝側の代表者佐々木道誉と交渉を進めていた。和議について両者の意見が合意に達したので、本会議を開くことにした。

ところが、南朝側の勅使葉室光資が名分論にこだわって、「将軍義詮が南朝に降伏するという条項を明記すること」を強く求めたために和議は決裂となった。

楠木正儀はなかなかの政略家であったから、北朝側は幕府の優勢な軍事力を背景にして強気であることを知っていたし、南朝側は比較にならぬ貧弱な武力で戦意がほとんどなくなっていたので、余り名分論にとらわれていると機会を失い武士や土豪たちが離反していくことを心配をしていた。

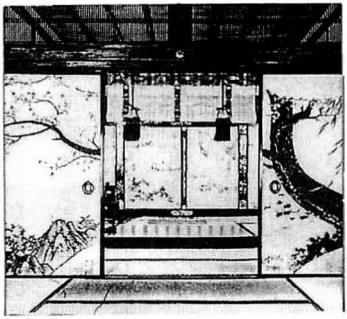
そこで、楠木正儀は機会があれば一日でも早く両朝の合一を希望していたのである。

いっぽう、北朝側にとっては軍事力は優勢であるが、幕府が無理に擁立したものであるから権威がないので常に不安を感じていたのである。『太平記』にも

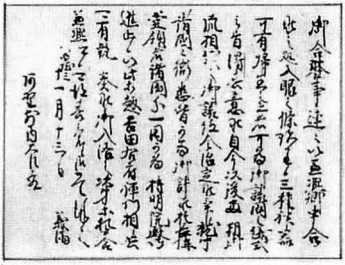
三種の神器おわしまさで、御位を続かせ給うことは、未だその例を聞かずと、有識を立つる人々の欺き申さぬは無かりけり。

と、世間で噂をしていることを述べている。

長慶天皇が即位した翌年に、楠木正儀が北朝に降ったのは、幕府の管領細川頼之の人物が大きいことに惚れ込んで、何とかして和平の道を探ろうとしたためであった。ところが、その細川が失脚して幕政から離れて讃岐国に帰ったので、正儀はあきらめて南朝に復帰し



◀大覚寺の両朝合一の間（京都市）



▲義満書状　1392年（明徳３）11月、両朝合一の最終的条件を承認したことをしるして、阿野実為宛に送った書状（京都 陽明文庫蔵）

たのである。

その翌年、後亀山天皇が即位したので、南朝の内部は次第に和平派の勢力が盛りあがってきたのである。ところが、和平のリーダーであった楠木正儀が死没したので、和平についての推進が頓挫するかに思われたが、後亀山天皇は和平論者であり、戦乱が余りにも長きにわたっているため、一般の武士たちも戦いに飽きていたので、和睦を求める気運を高めようと努力をした。

いよいよ両朝の和睦の実現に向けて、元中九年（一三九二）十月、南朝側からは吉田宗房と阿野実為が、北朝側からは吉田兼熙が出席して、両朝合一についての詰めの協議を行った。和睦の具体的な条件については、十月十三日付で足利義満が阿野実為に宛てた請文（うけぶみ）に、

一、三種の神器は後亀山天皇が譲位の儀式をもって後小松天皇に授けること。
二、今後の皇位は、南朝大覚寺統、北朝持明院統が交互に即位すること。
三、諸国の国家領は大覚寺統が、長講堂領は持明院統の支配とすること。

とあるので、この三カ条によって和平交渉は纏ったと思われるのである。

ただ一人、長慶天皇は、この合一条件が幕府によって反古にせられるのではないかと、不安を抱いていたといわれている。後亀山天皇は、そこまで疑うことはしなかったので、南北両朝の合一は漸く成立したのである。

そこで、元中九年（一三九二）閏十月三日、後亀山天皇は京都に還幸し、その二日後に、神器を後小松天皇に授け、南北両朝の合一は完全に成立したのである。

しかし、長慶天皇が案じていたことは現実となって、合一条件は幕府が一方的な考えと力によって蹂躙してしまったのである。今まで、南北両朝の争いとしてきたことが、まるで天皇と幕府の政権争いと見なされることが明らかになったわけで、これでは天皇と臣下が政権を争った末に、天皇が臣下に騙し取られたことと同様になったのである。

その上、それ以後の幕府がとった処置は、幕府の政権の確立のために、南朝系の皇胤の絶滅を図るために、あらゆる面に弾圧を加えていくのである。

この悪辣な幕府のやり方を憤慨した後村上天皇の第五皇子説成親王は、応永十五年（一四〇八）十二月、大和において反幕府の兵を挙げた。吉野河上郷三村の武士や土豪たちがこれに呼応して立ちあがったのであるが、優勢な幕府軍のために鎮圧されてしまったのである。

しかし、この挙兵が動機となって、南朝の遺臣たちは各地で武力蜂起し幕府のやりかたに対して反抗したのである。ことに、後亀山天皇は南北両朝の合一に賛成した南朝側の最高責任者としての面目は丸潰れとなったのである。この幕府の理不尽な態度に激怒し、応永十七年（一四一〇）十一月、突如吉野へ潜幸した。『看聞日記』には、

南朝の法皇、御困窮と号せられ、吉野へ御出奔

と述べているだけである。この『看聞日記』とは、後花園天皇の父、伏見貞成親王の日記のことである。後亀山天皇の心の中にある苦衷を察するでなく、その表面的な観察で極く

簡単に、ただ経済的理由だけに触れて淡々と記録しているのを見ると、朝廷内の関係者としては余りにも冷淡に過ぎるように思われてならないのである。

それから二年後、北朝系の後小松天皇の皇子躬仁（みひと）親王が践祚して称光天皇となった。これで、両統迭立の合一条件は完全に無視されたことが明らかになったのである。そのため南朝の遺臣たちが激怒して、反幕府の兵を挙げて幕府の処置に対して結問したことは至極当然のことと同情せざるを得ないのである。

応永二十年四月、陸奥の伊達持宗、懸田定勝らが蜂起して大仏城に楯籠って反抗した。応永二十一年の秋には伊勢国司北畠満雅が兵を挙げて阿賀城に拠った。これに対して幕府は土岐持益をして追討させたが攻めあぐんだ。強抗な抵抗に苦しんだといわれている。

正長元年（一四二八）、称光天皇が崩御されたとき、南朝の遺臣たちは、「今度こそは南朝の皇胤が即位するに違いない」と思い込んでいたのであるが、その期待は幕府によって裏切られたのである。幕府は持明院統の後花園天皇を皇位につけたのである。

このようにして、幕府の権力はますます強大なものとなって、皇位の継承は幕府の意の

ままに決せられるようになったのである。

そのため、後亀山天皇の皇孫小倉宮聖承は伊勢に出奔し、北畠満雅に擁立せられて兵を挙げた。驚いた幕府は大軍を繰り出して鎮圧に当ったが、激戦につぐ激戦の繰り返しが続いたので、両軍の死傷は甚大であった。この戦いで北畠満雅が戦死したので、その子顕雅は幕府軍に降伏した。

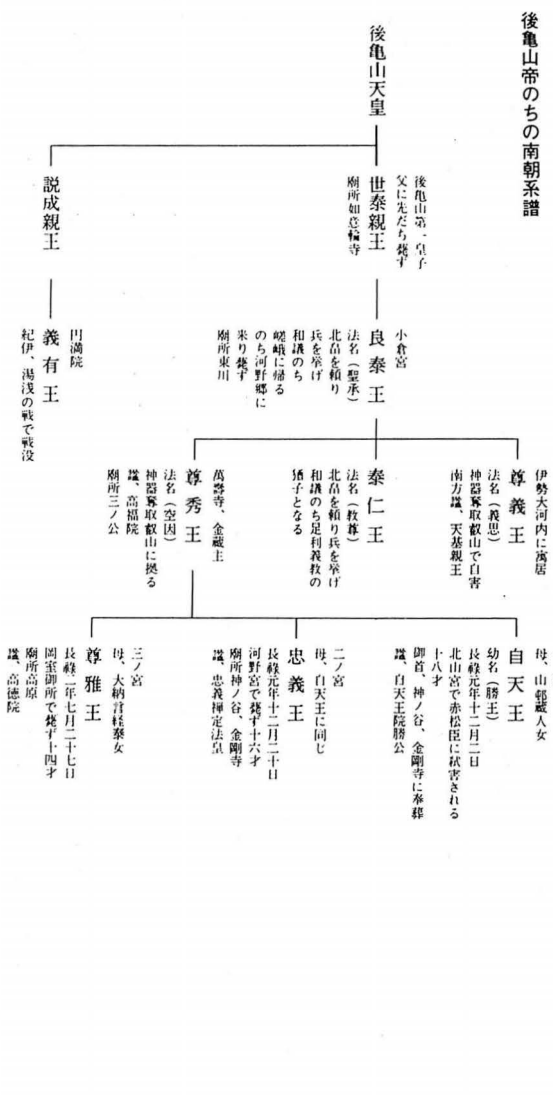
永享二年（一四三〇）小倉宮は京都に帰って剃髪し万寿寺にはいった。幕府は小倉宮に歳費三万疋を支給するかわりに、その嫡子教尊（のりたか）を勧修寺にはいらせることにした。これは教尊で小倉宮の絶滅を期するという幕府側の思惑によったものである。永享五年（一四三三）に、後村上天皇の皇孫相応院宮が幕府に反旗を翻えしたが、すぐ捕えられて殺害された。

嘉吉三年（一四四三）九月二十三日の夜、南朝の遺臣が皇居に侵入放火して剣璽を奪い取るという事変が起きた。侵入した南朝の遺臣たちのほとんどは幕府軍によって殺されたが、神璽はついに吉野の奥へ持ち帰えることに成功したのである。

神璽を奪った南朝の遺臣たちは、翌文安元年（一四四四）に紀伊の八幡城に楠木一族を中心とした兵が籠城して対峙することになった。幕府は短期間で陥落させることができたが、文安三年に南朝の遺臣が再度楯籠ったときは幕府軍が惨敗した。これに脅威をいだいた幕府は、畠山、細川、佐々木、土岐氏らの有力守護に命じて、四万の大軍を動員させて攻撃したが三カ月もかけてやっと陥落させるという苦戦をしたのである。このときの戦いで楠木一族は全滅したのであろうか、それ以後史上にその名を見ることはなかったのである。

神璽を取り戻すために、幕府は朝廷と相談の上で、先に嘉吉の乱で追われていた赤松満祐の遺臣たちに、「謀略をもってでも神璽を奪還すべし」と密命を下したという。それで、赤松の遺臣十余人は窃かに奥吉野に入って尊秀王（たかひで）と忠義王（ただよし）を訪ねて味方であるかのように装って言葉巧みに仕えて信頼を得た頃に、夜陰に乗じて二王を殺害して神璽を奪い取ったのである。これを知った南朝の遺臣たちは赤松の残党たちを追いかけて、そのほとんどを殺害し二王の首級を取り返すことはできたが、神璽はついに持ち去られ京都の朝廷に納め

たので赤松氏はその功によって再興が許され、加賀半国の大名にとり立てられたのである。



この南朝の皇胤である北山宮尊秀(たかひで)王と河野宮忠義(ただよし)王については、玉川の宮承朝の御子梵勝と梵仲の兄弟であるという説と、小倉宮の皇孫の兄弟であるという二つの説があるが、いずれが真実であるかということは確かめようがなく、推測の城を出ないものである。

私は後南朝の遺跡が今どのようになっているか、地元ではどのように考え保存しているのであろうかと興味を覚えて奥吉野を訪ねることにした。吉野宮前で電車を降りて新宮行きのバスに乗り、国道一九六号線を南進し、柏木停留所で下車した。三月の山間の村はもう日が暮れかかっているような感じである。明るいうちに旅館を見つけておかなければと尋ねたところ一軒だけ残っていてホッとした。

山の頂あたりには春雪が残っていて日暮れとともに冷え込みがきびしくて夜はぐっすり眠れなかった。

旅館の奥様は歴史に関心を持っておられ、私が川上村や上北山村を訪ねたわけを話すと郷土史家中谷順一郎氏を紹介してくれた。彼が出版した『南山慟哭—後南朝物語』を旅館に宿泊した人に販売をしていたので一冊買い求めて帰った。

宿を出てあたりを見回すと、国立公園大台ガ原を水源地とする吉野川は豊かな清冽を尽きることなく続けており、両岸から山の峰々に至るまで、ぎっしりと繁っている美林は全国に冠たる吉野杉である。延々と続いている濃緑（こみどり）の陵線は、折からの朝日を受けて輝き、横山大観が描く雄大な一幅の日本画を観る感激である。

私は川向いにある神之谷に赴くため橋を渡って右に折れ坂道を登って行くと山の中腹に立派な建物をもつ後南帝菩提所金剛寺の前に出た。その前に『後南朝由来』という扁額があって、

中世の砌、南北朝合一後の不履行を憤った旧臣遺党が南朝皇胤を擁し、嘉吉三年九月宮闕を侵して神璽を奪い川上郷八庄司公文を頼り此所川上の奥に遁れ、のち吉野川奥天険の地に黒木御所を営み二皇子を密に隠れ住む。後に此の地を三之公と称す。空因の宮はこの山にて崩御、皇子一ノ宮自天親王は父君崩御の後北山郷竜泉寺に出帥南朝回天を計り二ノ宮忠義親王河野ノ里に御所を設けて外郭とする。

ときに長禄元年十二月二日雪の夜赤松旧臣両御所を襲い一ノ宮は討たれ給う。二ノ

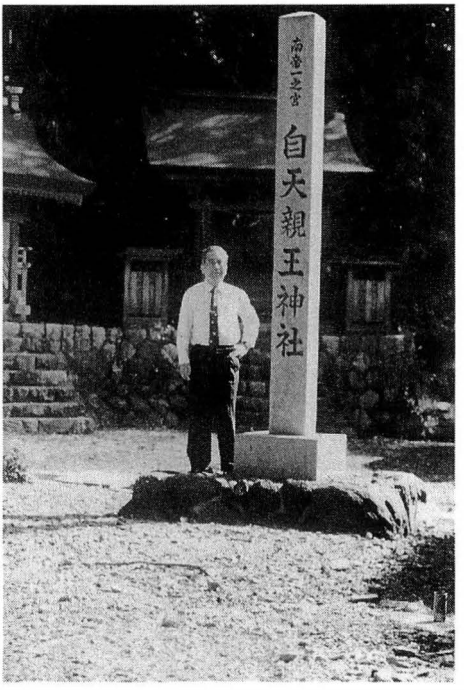
後南帝菩提所と尊秀王墓（金剛寺―奈良県川上村）

宮は剣を負う賊徒は神璽御首を持ち逃走伯母谷村に泊る。事変を病床にある橘将監が知り謀をたてて郷中に回章郷士塩谷向いに馳せ参じ賊徒爽撃す。大西勘五郎の強弓賊将を斃し神璽御首を奪還当城に奉葬神璽は二ノ宮に捧ぐ。然るに宮の創癒えず薨じ同域に葬る。斯くして南朝再興の大業潰え今日の悲哀の史実を止む。

　爾来川上郷では宮を追慕し遺品の武具を御神霊として毎年二月五日朝拝式を奉修す。

とある。

その裏側に自天親王神社がある。南朝の末



自天親王神社

裔自天王・忠義王を祭神として祀っている。

後亀山天皇の皇孫尊秀王は足利幕府の謀略に追われ、二皇子と神璽を帯同して入之波、三之公に身をかくしていたが、尊秀王は享徳三年（一四五四）に病没せられた。二人の王子は川上村の神之谷と上北山村小橡に分かれて住み、再起の機会をうかがっていたが、既に述べたように赤松満祐の遺臣に襲撃されて悲憤の最後をとげられたのである。

二王寺の遺骸は金剛寺に葬ってから以後毎年二月五日に朝拝式を執り行い今日まで絶えることなく続いているのである。

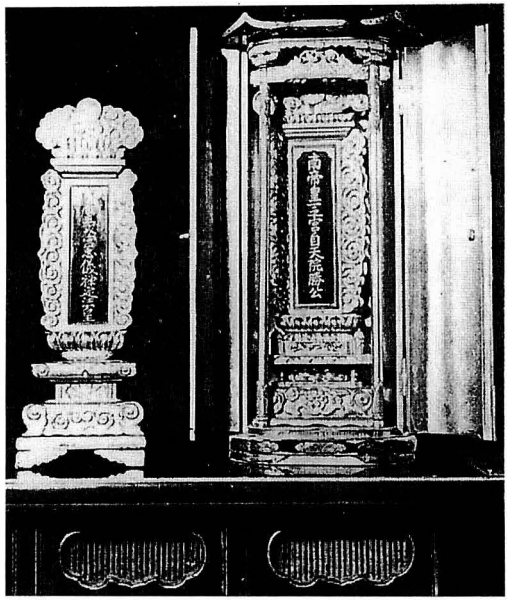
この起源は、享徳年間に三之公の御所で行っていたところの朝賀拝礼の儀式を再現したもので、王の冥福を祈るために遺品（重文）をまつる儀式である。この儀式を奉仕する者は「筋目」という家系にある者によって行われるもので、その最も正しい家筋を一番衆といい、この一番衆がかつて長禄の変に武勲が高かったところの一党の子孫であるといわれている。

金剛寺は妹背山天乗院金剛寺というのが正式の名で、那迦寺とともに大峰山上奥之院ともいう。寺伝では白鳳時代役ノ行者の草創ということである。『和州旧跡考』に

役優婆塞、済度利生のために金峯山に一千日籠りて生身の薩捶をいのり給ひしに、まず地蔵菩薩の御かたちにて、すえの世の衆生いかでか利益かなふべしやとて、地蔵を掌にとりてなげられなければ、此所にとどまらせ給ふ所につたへいへり。

とあり、当寺に帰依した後醍醐天皇から、金剛寺の寺号を賜ったと伝えられている寺である。

寛文元年（一六六一）智積院七世比丘僧正泊如運敞が、天和二年（一六八二）に書いた



南帝皇一之宮自天王・二之宮忠義王御位牌
（川上村神之谷金剛寺安置）

当時の『過去霊簿』に、

長禄元年十二月二日、南帝王一宮自天勝公正聖、北山小瀬邑龍泉寺、金剛寺境内御首奉葬。

とある。なお右脇に多数の位牌がある中に、南帝王一宮天勝公正聖仏というのがある。境内には二つの小社があり、向かって左が牛頭天王社で、右が自天親王神社である。鉄筋コンクリート造りの宝物殿には国指定の重要文化財になっている伝自天王の武具がある。

自天王碑は昭和十五年（一九四〇）川上村によって建てられ、本堂裏の右側の宝篋印塔

河野宮御墓（川上村神之谷金剛寺境内）

には「寛延三庚午天二月吉日」と刻してある。境内の奥には、明治十五年（一八八二）二月宮内省から自天尊秀王御墓と治定があり、のち同四十五年一月に河野宮忠義王の御墓と改めた墓地である。

享保二十一年（一七三六）に刊行した『大和志』の金剛寺の項を見ると、

「有南天自天王陵及小祠、宝篋印塔」

基刻日長禄元年十二月二日

とあり、墓地の石柵内北側中央に尊秀王の首を葬り、その上に小祠を建てていたと記してある。

ところが明治十五年の墓地治定の際、

墓地と神社を分離、小祠は今の牛頭天王社に遷座して分祀、昭和四年（一九二九）に新しく社殿を造営したというが、私は明治初年の「神仏分離令」が日本の歴史を、ことに日本人の信仰心を混乱させる原因となったことを非常に残念に思うのである。

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

南朝を擁護した武士たちは、必ずしも純粋に名分論に徹した者ということでもあるまいが、北朝のように利益集団ではなかったという説は確かなことである。南朝系には驚くばかりの忍対力、勇気、節操など本質的な美意識があったと思われるのである。

福沢諭吉が、「抵抗の精神が失われたら、その民族の発展はない」と道破しているが、安藤英男博士が、

南朝の人々が人力の限りを尽して、苦難にもめげず、一つの理念を守り抜こうとしたのは、なかなかできることではない。人を下劣にする卑しい利己主義や貧戻（どんれい）で恥知らずな行動は、北朝―武家方―に充満しているが、南朝はそれよりずっと清涼である。北朝の悪徳になじまず、南朝が建闘した歴史は、日本の歴史に光彩をそえ、日本人が

誇りにしてよい面をもっている。

と述べていることは、ひどく私の心をうつのである。

南北朝時代というのは、日本史上複雑な要素がからみ合って国民を苦しみの中に引き込んだ理解しがたい時代である。再びこのようなことを繰り返すことのないよう深く反省することこそ、われわれの子孫に対するつとめであると思うのである。

十七、後南朝の亡霊熊沢天皇

昭和二十二年、名古屋の雑貨商熊沢寛道は突如として「吾れこそは南朝正統の皇胤（こういん）であるから皇位を継承する権利がある。現天皇はよろしく退位すべし」と宣言して立ち上がった。

このニュースを知ったG・H・Qの若い士官たちは大喜びで、記者を伴って東京からジープを走らせはるばる名古屋にかけつけた。彼等は熊沢寛道から事情を詳しく聴取して「新

天皇ヒロミチ」のためにビールで乾杯して得意顔で引きあげて行ったということである。

この異常な事件は早速アメリカ最大の雑誌『ライフ』に、菊花紋章入りの紋服を着けた寛道の写真入りの「クマザワ・ストーリー」を大々的に掲載して発表したという。

G・H・Qの統制下にあった日本の各新聞社も「熊沢天皇」の記事で紙面をにぎわしたので一躍有名になり、津々浦々に至るまで知れ渡った。

太平洋戦争に敗れた日本は連合国側に有史以来の恥辱である無条件降伏を受諾した。国民は虚脱状態に陥っていたさ中の出来事である。驚いたり呆れたりしたものである。南北朝時代の真実の歴史を教えられていない国民の大部分は狐につままれたような思いをした者もあったようである。中には寛道の不敬に対して強く憤りを覚える者も少なくなかったので、寛道は身の危険を感じ、G・H・Qに対し保護を要請した。G・H・Qは直ちに全国の警察署に対して「寛道の生命身体の保障」を指令した。

寛道を利用する人たちは、あちこちの講演会に引っぱり出したが、いつもG・H・Qまたは日本の警察の護衛つきであったという。彼を「党首」にまつり上げてパンフレットを

頒布して何事かを企んで活動を展開した黒幕は吉田長蔵という人物であるという。

寛道は南朝最後の天皇後亀山の皇子小倉宮実仁（みひと）親王十五世の孫となっている。後南朝史について早くから深く関心をもって研究していた日本法制史学の権威滝川政次郎博士は翌二十三年の秋、当時既に京都市左京区下鴨松原町に移り住んでいた熊沢寛道を訪ねて、その系譜や写真や証拠といわれる遺品などを見せてもらい、由来の詳細を聴取したが、その

「ライフ」にのった熊沢氏

熊沢天皇とマスコミがさわいだ
熊沢寛道氏（アメリカ最大の新法「ライフ」の写真）

内容の大部分は、既に博士が奥吉野の川上村や北山村を調査したとき伝承されていた後南朝の説話であって珍らしくも何でもなかったと感想を述べている。

ただし、西陣南帝が応仁の乱後に東国に赴いてからの物語については、滝川博士も今までに聞いたことのないものであったという。その内容の概略は、

南帝は陸奥の標葉氏を頼って標葉郡沢村（福島県双葉郡大堀村）に落ちのびられた。南帝の諱（いみな）は信雅王といい紀州熊野で成人したので熊野王と称した。因って王は熊野の「熊」と沢村の「沢」を取って性を熊沢とし、僧名を現覚と称したということである。王は尾張の時之島に移って繁栄していた。その直系が即ち寛道である。

と主張しているのである。

しかし、滝川博士は寛道に見せてもらった系図や沢村付近から掘り出したという金石文などは、いずれも首肯するに足るものではなかったと述べている。さらに博士は、

西陣南帝が熊野で成人せられたということは信じられないことではない。『大乗院寺社雑事記』文明元年十一月廿一日の条には「南主蜂起、兄弟、一所ハ吉野奥一所ハ熊

野、十方被廻宣云云」とあるから、熊野にも大覚寺統の皇胤がおられたということは信じることができる。また、西陣南帝が標葉氏を頼って奥州へ落ちて行かれたということも考えられるのである。しかし、それらはいずれも可能性があるというだけのことであって、それが直ちにそうであったという確証は一つもないのである。

と述べていることに注意しなければならないであろう。

昭和二十四年十月二十九日と三十日の両日、滝川博士は熊沢寛道と共に川上・北山の後南朝史蹟を回りながら、寛道に対して、

埋もれた後南朝の歴史を顕彰しようとすることはよいが、自分が南朝の正系であるから皇位の継承権があるという主張は間違っている。憲法において「世襲の天皇とする」とあるのは明治天皇の御子孫という意味に解すべきである。故に自分が天皇になろうというようなことはよした方がよい。況んや現皇室を傷つけるがごときことは言語道断である。

と強くたしなめて翻意を求めたということである。

しかるに、昭和二十五年に至って熊沢とその身辺で参謀役を勤めていた吉田長蔵が原告となって、天皇を相手取り「熊沢が正常なる皇位継承者であることを確認せよ」と訴状を東京地方裁判所に提起したのである。

東京地方裁判所は「天皇を裁判する権限を持たない。

という理由で却下したことは至極当然のことである。

昭和三十一年三月二十九日、議会で「憲法調査会法案」が可決せられると、寛道らは再び蠢動し「この際天皇制を廃止しようというのであれば問題はないが、わざわざ憲法を改正して天皇を元首にしようとするのであれば正系の天皇を置くべきである」と論じ立てた。

しかし、世間はもう誰も彼に関心を寄せる者はなく、彼の独り芝居に終ったようである。この事件は、明治時代の末に起きた『南北朝正閏論問題』を政治の権力を以って無理に歪めて決着をさせたため、国家権力が弱ったとき、うみが吹き出すように矛盾が吹き出した事件である。滝川博士は「後南朝の亡霊熊沢天皇」と称しているのもここに起因しているからであろう。

また、熊沢寛道自身も後南朝の亡霊を以って自ら任じていたようである。即ち、

裕仁天皇が無条件降伏をしたのは八月十五日であるが、この日には南朝の怨霊がつきまとっている。後醍醐天皇の御命日は延元二年八月十六日であるが、その前日にはすべてを覚悟せられて御譲位になっている」

と因縁づけした言辞を発表しているのである。

戦後は不敬罪がなくなったので、その虚に乗じて起きた代表的な事件であるが、宮内省を無視して勝手に補助学である陵墓比較考古学を振りかざして、長慶天皇陵を決定づけたりする世の中に変ったことを深く憂うるものである。滝川博士は、

南北朝及び後南朝の不祥事を生んだ第一の責任者は後醍醐天皇と天皇の行為を正当化した北畠親房とである。

と明言している。この言葉は史学を論じ史学を志す者は真実を求めることが使命であることを示唆しているものである。明治以来歪められてきた南北朝時代の歴史をどうにかその真実に迫ることができたように思っている。御指導を乞う次第である。

南北朝史略年表

（自一三一七―至一四六七年）

天皇	年号	西暦	主な事蹟	北朝天皇	北朝年号
花園	文保元	一三一七	**4月** 幕府、皇位の継承について、持明院・大覚寺統の迭立を提案する（文保の和談）。		
後醍醐	2	一三一八	**2月** 花園天皇（二十二歳）、皇位を皇太子・尊治（後醍醐。大覚寺統）に譲る。		
	元亨元	一三二一	**12月** 後宇多法皇、政を後醍醐に返す。		
			同月 後醍醐、記録所を復活し、親しく政を聴く。		
	正中元	一三二四	**9月** 後醍醐、北条氏を討伐せんと謀りて成らず。幕府、土岐頼兼、多治見国長らを襲殺し、日野資朝、藤原俊基らを捕える（正中の変）。		
	2	一三二五	**8月** 北条高時、日野資朝を佐渡へ流し、藤原俊基		

嘉暦元	一三二六	を許す。 **3月20日**　皇太子・邦長（二十七歳）崩じ、**7月24日**、量仁（十四歳。持明院統）、皇太子に立つ。	
2	一三二七	**3月**　後醍醐、僧・円観、文観らを召して、北条高時を呪詛せしめる。 **12月6日**　護良親王（大塔宮。二十一歳）、天台座主となる。	
元徳2	一三三〇	宗良親王（尊澄）、護良に代わり天台座主となる。	
元弘元	一三三一	**5月6日**　後醍醐の北条氏討伐の謀漏れ、藤原俊基、僧・文観、円観ら捕えらる（元弘の乱）。 **8月22日**　関東軍入京する。**同月24日**、後醍醐、京都を出奔し、笠置に向かう。 **9月28日**　笠置落ちる。 **10月2日**　後醍醐は捕えられ、**同月6日**、神器を光	光厳
			元徳3

天皇	年号	西暦	主な事蹟	北朝天皇	北朝年号
	2	一三三二	厳（量仁）に授く。10月21日、楠木正成の赤坂城落ちる。 3月8日　北条高時、後醍醐を隠岐へ遷し、宗良を讃岐へ流す。 4月1日　車駕、隠岐へ航す。 6月2日　日野資朝、佐渡の配所で斬らる。同月3日、藤原俊基、葛原ケ岡に斬らる。 11月　楠木正成、千早城を築き、護良（大塔宮）は吉野に兵を挙ぐ。赤松則村も、また兵を播磨に挙ぐ。	←	正慶元
	3	一三三三	閏2月28日　後醍醐、隠岐を脱出して、伯耆に至り、名和長年に拠る。 5月7日　足利尊氏、赤松則村らと六波羅を討ち、京都を占領する。5月22日、新田義貞、鎌倉を落		2

		落とし、北条高時三十一歳自害する(北条氏滅ぶ)。
		6月5日　後醍醐、京都へ還幸する。
建武元	一三三四	**5月7日**　記録所、雑訴決断所、大番武者所などの結番を置き、法令を定める（建武新政)。
		10月　藤原藤房（万里小路)、官を棄てて去る。
		11月15日　後醍醐、護良(大塔宮)を捕え、鎌倉に流す。
2	一三三五	**7月**　北条時行、兵を挙げて鎌倉を侵す（中先代の乱)。**同月23日**　足利直義、護良を殺害する。
		10月　足利尊氏、鎌倉に拠りて叛す。
		12月11日　新田義貞、官軍を率いて東征し、箱根・竹ノ下に尊氏と戦うも大敗する。
延元元	一三三六	**正月10日**　尊氏、進みて京都に入り、後醍醐、延暦寺へ遷る。
		2月12日　尊氏、摂津打出ノ浜に敗れ、九州へ遁走する

天皇	年号	西暦	主な事蹟	北朝天皇	北朝年号
			3月2日　菊池武敏、尊氏を多々良浜に攻めて克たず。 5月25日　尊氏東上し、官軍、湊川に防ぐも克たず。 楠木正成（四十三歳）戦没す（湊川の戦）。 8月15日　尊氏、光厳上皇に奏請して、豊仁親王（光明）を王位に就ける（北朝の再建）。 10月10日　後醍醐、尊氏と和睦し、京都へ帰る。新田義貞、恒良親王を奉じて北国へ落つ。 11月　建武式目十七条成る。 12月21日　後醍醐、京都を脱出し、吉野へ奔る（吉野朝の建設）。	光明	建武3
	2	一三三七	正月8日　北畠顕家、義良親王を擁して、陸奥霊山に拠る。 3月6日　越前の金ケ崎城落ち、恒良親王は捕えら		4

			れ、尊良親王、新田義顕ら自刃する。
			12月28日　北畠顕家、鎌倉を占領し、足利義詮を奔らす。
	3	一三三八	**5月22日**　北畠顕家（二十一歳）、高師直と和泉石津に戦って死す。
			閏7月2日　新田義貞（三十八歳）、越前藤島砦に平泉寺僧兵を攻め、灯明寺畷にて戦没する。
後村上	4	一三三九	**8月16日**　後醍醐（五十二歳）、吉野行宮に崩じ、義良（後村上）立つ。**同月**、脇屋義助、美濃に敗れて吉野に入る。この秋、北畠親房、常陸の小田城にて『神皇正統記』を撰す。
興国元		一三四〇	**5月5日**　脇屋義助、伊予に病没する。
4		一三四三	**11月**　常陸の関・大宝の二城落ち、北畠親房は吉野に奔る。

暦応元	
2	
3	
康永2	

天皇	年号	西暦	主な事蹟	北朝天皇	北朝年号
	6	一三四五	**8月29日** 天竜寺が落成する。	←	貞和元
	正平2	一三四七	**8月17日** 楠木正行、細川顕氏を河内富田林に破る。 **11月26日** 正行、また山名時氏、細川顕氏を摂津の住吉、瓜生野、天王寺に破る。		3
	3	一三四八	**正月5日** 楠木正行（二十二歳）、高師直・師泰と河内四条畷に戦って死す（四条畷の戦）。 高師直、吉野行宮を焼く。		4
	5	一三五〇	**正月11日** 赤松則村（七十二歳）。病没する。 **12月** 足利直義、南朝に帰順する。畠山国清、桃井直常ら直義を擁し、尊氏を討つ。	崇光	観応元
	6	一三五一	**2月晦日** 尊氏、直義と和す。高師直・師泰、上杉能憲のため摂津で殺さる。 **10月** 尊氏、義詮父子、南朝に降る。	→	2

			11月7日　崇光（十八歳）。同月二十三日、後村上、北朝の神器を回収する。	
7	一三五二		2月26日　尊氏、直義（四十七歳）を鎌倉に殺す。 閏2月19日　南北朝の和議破れ、後村上、男山八幡に進出する。	
8	一三五三	後光厳	8月17日　足利義詮、後光厳（北朝四代）を京師に立つ。 9月21日　尊氏、後光厳を奉じ、京師を回復す。	文和元
9	一三五四		4月17日　北畠親房（六十三歳）、賀名生に病没する。	3
10	一三五五		3月22日　尊氏・義詮ら京師を回復する。 8月　宗良親王、兵を信濃に起こし、小笠原長亮と戦う。	4
13	一三五八		4月30日　足利尊氏（五十四歳）、病没する。	延文3
14	一三五九		8月16日　菊池武光、懐良親王を擁し、少弐頼尚を筑後大保原に破る（筑後川の戦）。	

天皇	年号	西暦	主な事蹟	北朝天皇	北朝年号
			12月22日　貝利義詮、河内天野の行宮を犯す。後村上、観心寺へ遷る。	←	
	16	一三六一	10月　細川清氏、南朝に帰順する。		康安元
	17	一三六二	7月24日　細川清氏、細川頼之と讃岐に戦って死し、四国の南軍壊滅する。		貞治元
長慶	23	一三六八	3月11日　後村上(四十一歳)、摂津住吉の行宮に崩ず。第一皇子・寛成（長慶）、立つ。		応安元
	24	一三六九	正月　楠木正儀、足利義満に降る。楠木氏の一族、正儀を攻む。		2
	建徳元	一三七〇	10月　今川貞世（了俊）、鎮西探題となる。このころ『太平記』成立する。		3
	2	一三七一	3月23日　後光厳（三十四歳）、位を後円融（十四歳）に譲る。	後円融	4

	3	一三七七	8月　懐良親王、大内義弘と戦い、大敗し、菊池の一族、多く戦死す。	
	4	一三七八	3月　足利義満、室町に新邸（花の御所）を造る。	
	5	一三七九	5月　細川頼之、管領職を解任されて帰国する。斯波義将、代わって管領となる。	
	弘和2	一三八二	正月24日　楠木正儀、南朝に帰順し、山名氏清と戦う。 4月11日　後円融（二十五歳）、後小松（六歳）に譲位する。	←
後亀山	3	一三八三	3月17日　懐良親王（征西将軍。五十五歳）、病没する。 この年、長慶、位を皇弟（後亀山）に譲る。	後小松
	元中5	一三八八	3月　楠木正勝、河内で挙兵、山名氏清と戦って敗れる。	
	8	一三九一	4月　細川頼之、義満に召還されて再び管領となる。 12月　山名氏清、義満に叛し、敗死する（明徳の乱）。	

永和3	
4	
康暦元	
永徳2	
3	
嘉慶2	
明徳2	

天皇	年号	西暦	主な事蹟	北朝天皇	北朝年号
後小松	9	一三九二	閏**10月2日** 義満、南北朝の和を議し、後亀山（三十二歳）、京都に還幸し、**5日**、神器を後小松（三六歳）に授ける（南北朝合一）。	←	3
	応永元	一三九四	**8月1日** 長慶上皇（五十二歳）、崩ず。 **12月** 義満、将軍職を義持（九歳）に譲り、太政大臣となる。		
	15	一四〇八	**5月6日** 足利義満（五十一歳）、病没する。 **12月** 説成親王（後亀山の弟）、大和で挙兵するも、やがて鎮定される。		
	17	一四一〇	**11月** 後亀山法皇、吉野に還幸する。		
称光	19	一四一二	**8月29日** 後小松（三十六歳）、皇位を称光（十二歳）に譲る。		
	21	一四一四	**9月** 北畠満雅、兵を伊勢に起こす。		

		23	一四一六	**9月**　後亀山法皇、京都に還幸する。**同月**、北畠満雅も幕府と和す。
後花園	正長元	一四二八	**7月20日**　称光天皇（二十八歳）崩じ、**同月二十八日**、後花園（十歳）践祚する。 **8月23日**　北畠満雅、小倉宮（良泰）を奉じて伊勢に兵を起こす。 **12月12日**　満雅、土岐持頼らと戦って敗北す。
	永享8	一四三六	この冬、越智維通、南朝の遺臣として兵を大和高島城に挙げる。
	9	一四三七	**正月**　幕府、諸将をして越智維通を討たせる。 **8月**　楠木氏の一族、兵を河内に起こす。畠山持国、これを討って降す。
	嘉吉3	一四四三	**9月23日**　日野有光、南朝の皇胤・尊秀を擁して闕を犯し、神器を奪い去る。**同二十六日**、延暦寺の

天皇	年号	西暦	主な事蹟	北朝天皇	北朝年号
	文安元	一四四四	僧徒、有光らを攻め殺す。		
			7月 後村上の皇孫・義有（円胤）、兵を紀伊北山に挙ぐ。やがて京軍に破られ、義有は自刃す。		
	長禄元	一四五七	**12月2日** 南朝の皇族兄弟・尊秀、忠義、神璽を奉じて北山、河野郷に拠る。		
	2	一四五八	**8月30日** 赤松氏の遺臣、吉野の民を欺き、尊秀・忠義をし、翌年、神璽を奪って幕府に献ず。		
後土御	応仁元	一四六七	**5月26日** 細川勝元（東軍）、山名持豊（西軍）、諸将を語らい京都で激戦する（応仁の乱起こる）。		

（安藤英男著『南北朝動乱）より抜粋）

『重信史談』に発表した論考

一、浅野刃傷事件の謎と浪士松山預の始末
二、郷土が生んだ偉人豊島要三郎伝
三、勤王の志士 得能通生とその周辺
四、徳川家康とかかわり深き松山藩主たち
五、長慶天皇御陵の謎
六、人間空海とその周辺
七、郷土における在地領主とその周辺
八、郷土出身女流画人岡村春谿さんのこと
九、御陵伝説をめぐる虚像と実像
一〇、野田村周辺の歴史と伝承
一一、郷土の歴史誕生―一遍ゆかりの浄土寺
一二、河野氏の滅亡と伊予の武将たち
一三、真実の歴史の重み―
―長慶天皇の遺跡を訪ねて
一四、南北朝動乱と郷土の武将たち
一五、享保の飢饉と松山騒動

あとがき

真実の歴史を日本の南北朝時代の中に求めてきた。戦前の歴史教育を受けた者にとっては『意外史』と感じる事象も少なくなかった。

「自国蔑視的歴史観」は私の取らざるところであるが、だからといって戦前の自画自賛」的歴史教育は新しい時代に世界に向けて進んでいく道を誤らしめる恐れがあるので、深く反省すべきである。

日本の民主主義精神は有史以来未曽有の大犠牲を払った代償としてかち得ることができたものである。この事実を亡れてはならない。そうして生存している者は戦没者にかわって命がけで守って行かなければならないことである。

「依らしむべし、知らしむ可からず」という政治理念は、唯封建時代の遺物ではない。現代社会の中においても時によりチラチラと庶民を窺い見ているのである。

真実の歴史を究めることによって、明日の日本を担う大きな糧としたいものとつくづく思うのである。

南北朝動乱と伊予の武将

―付 後南朝物語―

〈著者略歴〉
大正5.2.24生．昭和8.国学館本科・
研究科卒．小学校教諭・教頭・校長．
昭和50退職．重信町教育委員・委員長．
文部大臣表彰．徳威三嶋宮々司．
愛媛県神社庁参与．重信町文化財
審議会委員．重信史談会副会長．
神宮評議員

平成七年七月一日発行
著者　別府　頼雄
〒七九一―〇二
住所　愛媛県温泉郡重信町大字北野田一、一七七
TEL（〇八九九）六四―三四一七
印刷所　有限会社　有光印刷